節を引用してあることにつき、そのまゝにして置いて宜敷きものかと思つて、元帥の意見を伺つたところ、元帥は「國民と言ふところが一寸變だが、精神は結構である、そのまゝにして置いてよろしい、その位の堂々たる精神がなくて、戰爭に勝てるものではない」と斷言されたのである。その一節といふは、

「吾人は以爲らく、戰爭は一の國民の意志と他の國民の意志と衝突する所あつて之を和解するの方便は既に悉く盡きたれども、各〻獨立の一國民として他の國民の爲に、其の意志を曲ぐること能はざる窮極の場合に於て避け難き不幸の出來事なり、此の出來事に於て、雙方の編制したる實力の機關を戰はしめ、他の一方の意志を屈せしめんことを務むるは、其の自國の自由、卽ち獨立に對する止むを得ざるの義務なり、然れども此の編制したる實力の機關、卽ち軍隊に關係なき人民及び曾て軍隊に屬したるも、疾病負傷に依り、戰鬪の能力を失ひたる者に危害損耗を被らす事は、對手の戰鬪の機關を破る爲に必要ならず、此等の人民と吾人との間には、唯だ均しく此の世界に人類たる關係あるのみ、此の關係は一視同仁の主義に依り支配せらるゝものなりと、是れ支那に對し開戰せんとする當時に於て、日本政府が據て以て其の擧止を決したるの思想なり、

是に於て吾が國民の意向は全く互相の條件を離れ、敵の戰律を守ると守らざるとを問はず、我れ之を守るに一定し、唯だ我が戰爭の利益、卽ち成る可く速に勝利を得て對手の意志を屈する事の支障となるまでも、戰律を墨守せざるを以て其の制限としたり。

この著は、翌昭和十二年五月發行、海軍各艦船部隊に配布された。元帥は、この書の爲めに特に、「戰時國際法規綱要」の題筌を書き、また本書は榎本海軍教授兼書記官の編纂に係るものなり、海軍士官の實務に資し、兼て其の研究材料として適當なるものと認め、之を部內所要の向に配布すとの序文を附せられた』

と、この一事を以て見ても、元帥の國際法の研究に意を用ひ、その海軍士官への普及につとめられたことが明かである。さるにても、元帥が前記有賀博士の說をそのまゝ存置せしめ、その位の堂々の精神がなければ、戰爭に勝てるものでないといふ意氣は洵にたのもしい限りである。この精神意氣はいつも皇軍の精神意氣であるが、今や戰爭の複雜か、墮落か、この國際法の精神を蹂躙して顧みざる英米の鬼畜の行爲には洪歎せざるを得ないのである。

支那事變の勃發するや、帝國海軍は直にこの特殊な狀態に處すべき交戰規準（特に空戰關係）及び對第三國關係事項處理に關する方針を全軍に示した。これは元帥の示唆に基くところが頗る多かつたのである。また、事變勃發當初には、帝國政府は事變不擴大方針をとつてゐたので、第三國との關係には特に最深の注意を拂つてゐた。然るに昭和十二年八月、駐支英國大使ヒューゲッセンが太倉附近で負傷したといふ事件が起り、英國ではこれを日本飛行機に依る故意の襲擊に因るもので、戰鬪員、

非戰鬪員の區別を沒却する非合法的非人道的慣行の結果に外ならずと主張し、帝國政府に嚴重に抗議して來た。

我が政府は、前記の方針に基いて極めて愼重にこのことを處理せんとした。事の起りは、海軍飛行機であるといふことから、元帥は海軍次官として外務當局と連絡して事件の處理を擔當し、自ら折衝の任に當つた。仍て詳細に事件を調査してその眞相を確かめ、榎本教授等に命じて我が辯明の意見書を作製せしめた。元帥はその書を仔細に檢閲し、自ら筆をとつて加筆した上に、

『これだけの事を先方に言ふからには確實な典據がなければならないから、それを附け加へて呉れ』と命じたので、榎本は主として英、米の書籍から拔萃して原文のまゝ彼の許に提出した。元帥はこの意見書に更に檢討を加へ、十分の資料を携へて、クレーギー大使と面談し、彼の主張を反駁し、大使の納得するやうに懇切な說明を加へ、帝國側に責任なく、寧ろヒューゲッセン大使の不謹愼なる行動が事件の原因であつたことを認むるの餘儀なきに至らしめ、帝國はたゞ不幸なる出來事に對し、同情を以て慰藉するといふことで事件は落著したのである。

この談判に於て、クレーギー大使が非戰鬪員攻擊を云々して、頗る意氣込んで論じかゝると、元帥は冷靜に、貴國人の著書中に、かういふことが書いてありますねと、スバイトの『航空權と戰爭權』なる著書を持ち出し、靜かに頁をめくり、

如何なる航空機指揮官及び操縱者も、敵國都市の平和的住民に對し、不必要な損害を加へることを欲しないことは事實である、しかし、戰爭は戰爭である、手袋を穿めたまゝで戰爭が出來ると思ふならば、これは自己僞瞞に過ぎない、若し重要な軍事的目標があり、これを破壞することが攻擊者の國家の爲めでありとすれば、たとへ附近の無害の人民及び財產に重大損害を生ずるとするも、これを攻擊せざるを得ない、かやうな場合に爆擊の効果を特定目標に限る爲めに相當手段を盡した以上は、攻擊機操縱者は處罰せらるべきでない、何となれば爆彈に多少の撒布を生ずることは避け難いことであるからである。

とある一節を指示したところ、クレーギー大使は澁面を作り、「今回の事件とは場合が違ふ」とかと、頗る狼狽したとのことである。元帥は外交に於ては能くかやうの機智を示したのである。

支那事變當初、次官としての元帥は絕えず外交問題に意を用ひてゐた。ヒューゲッセン大使負傷事件の當時、英國側から帝國艦隊が支那ヂャンクを攻擊し、多數を擊沈し、遭難者を救助せずして立ち去つたといふ風說を流布して帝國艦艇の非人道を攻擊したことがあつた。このことを聞いた元帥は痛憤し、事帝國海軍の名譽に關する問題である、聞き捨てにする譯に行かぬとその惡質の風說を反證を擧げて打破せられたこともあつた。元帥の外交は、事實に立脚し、是非を明かにし、その非を認めざると共に、正は正として飽まで屈しなかつたので、大いに內外に重きを爲したのである。

その一に、昭和十二年十二月の米艦パネー號砲擊沈事件がある。これは內外に重大な衝動を惹起した。米國政府は、この事件を以て、日本の計畫的暴行なりと主張し、嚴重に帝國政府の責任を問ひ、米國民の激昂は甚しく、勢の赴くところ頗る憂慮すべき狀態となつたのである。

帝國政府は米國と事を構ふることを好まず、極めて愼重を期した。元帥はまたこの事件の折衝に當つた。海軍大將加藤寬治のごときも、この事件を、明治の大津事件に比し、一歩を過まれば重大事件を惹起するものとして、一に山本次官の處置に囑望してゐたといふことである。

元帥は現地關係員につき精細に情況を調査し、またあらゆる資料を蒐集し、更に理論上帝國側に責任ありや、否やを研究したが、それは、全く戰場に於ける通常の錯誤に過ぎざることの確信を得、米國大使グルー、その他の米國武官と面談した。このとき、元帥は最も信任せる現地員をも帶同し、數時間に亘り、詳細に且つ正確に事件發生當時の情況を說明した。元帥の間隙なき論理的說明と誠實の態度とは、深く米國側を感動せしめ、彼等をしてパネー號乘組員の證言が感情に走り、事實と合致せざる點あることを反省せしめ、事件解決の曙光を認むるに至つた。

當時、日本と英米間には、かやうなる問題が續々として起り、我が國民を刺戟し、英米に對する反感が日にたかまりつゝあつたが、元帥は一般輿論に關せず、つとめて國交の圓滑を圖るにつとめたのである。

昭和十二年十月、衆議院議員一宮房次郎氏（曾て海軍政務次官であつた）が、海軍將兵慰問として上海に赴かんとしたときに、元帥は長谷川海軍司令長官に傳言を託した。その意は『閣下が外交關係に就いて周到なる注意を拂はれることは誠に感謝に堪へない、上海は外交關係が非常に複雜してゐて、やゝもすれば外交上の紛議を惹起する恐れがあるので、閣下が周到なる注意を拂はれてゐることに對しては多大の敬意を表してゐる、どうかこの際不必要なるトラブルを起すのは、極めて誡むべきものであるから、この上とも國際關係に就いては御注意を願ひたい』といふことであつた。

かやうに、元帥は國際關係には緊密な注意を拂ひ、米英との間の不必要なる摩擦を避けようとしてゐた。その頃のこと、航空隊の或る報告中に、敵の兵舍らしきものを發見爆擊を加へたといふ趣旨のことがあるのを見咎めて、

『こんなあやふやなことではいかん、確信を以てせねばならん、こういふことでは無差別爆擊になる虞れがある、注意せねばならぬ』

といつてゐた。（榎本重治記、「外交評論」所載）元帥はかやうに國際關係に注意すると共に、前記のごとく國際法の研究に怠らず、部下將校にもつとめしめた。昭和十五年十二月、聯合艦隊司令長官としての激職の中に於て某地集合中の聯合艦隊に榎本教授を招き、戰時國際法特に歐洲戰爭に於ける各交戰國の海戰法規運用の狀況を講演せしめ、長官以下全艦隊の艦長以上が、休憩なしで、四時間の講演を聽取した熱心

さには教授も痛く感激したといふことである。（同上）これ等は東郷元帥の「海軍將校は平素から外交に關する知識を涵養し、機に應ずるの修練と覺悟とを養成し置かねばならぬ」といふ訓戒そのまゝの實行に外ならないのである。

五　皇軍聖將の信念

明治三十七年十二月下旬、東郷元帥は、旅順艦隊の全滅を見て急遽帝都に歸り、直に登營して、明治天皇に拜謁し、戰況を伏奏し、今後の作戰に關する御下問に奉答した。天皇はバルチック艦隊の回航につき御軫念、種々御下問あらせられた。元帥は長みて

敵の增遣艦隊來らば誓つてこれを擊滅し、以て宸襟を安んじ奉ります

と奉答した。その語氣があまりに斷定的であつたので、側に侍立した山本海軍大臣と伊東軍令部長とは、重厚なる東郷にして、かゝる奉答あるかと思はずもその面を凝視したといふことである。五箇月後に起つた日本海海戰の大勝利は、元帥のこのときの決意と確信との結果に外ならなかつたのである。

この東郷元帥の奏上に就いて想起するのは、大東亞戰爭開始直前に、山本元帥が召されて御前に伺候し、御下問に對し、危機一髮の重大時局に就いて聯合艦隊司令長官としての決意、策戰等を奉答したことである。奉答の內容は、我々の忖度の限りではないが、退朝の途、海軍省經理局長武井大助を訪うて示されたのが、

くにをおひたい向ふきはみ千萬の軍なりとも言擧はせじ
千萬の軍なりとも言擧せずみことかしこみい向ふわれは

の二首であつた。これは山本元帥の征戰首出の大信念を示すものである。開戰劈頭のあの雄大無双なる大作戰の決行は言句の間に看取せられるのである。

若しこの信念をたゞ歌の上のことだ、言語の上のことだと考へるものは、山本元帥の心事を知らないばかりでなく、東郷元帥の心事を知らず、皇軍魂を解せざる人といはねばならぬのである。これはまた楠木正成が元弘元年八月始めて笠置行在所に召され、後醍醐天皇に謁し、

抑も天下草創のこと、いかなる謀をめぐらして勝つことを一時に決して、太平を四海に致さるべきや、所存を殘らず申すべし

といふ勅諚を拜し、畏みて、

東夷近日の大逆、唯天の譴を招き候上は、衰亂の弊に乘て、天誅を被致に何の仔細か候べき、但天下草創の功は武略と智謀との二にて候、若勢を合て戰はゞ、六十餘州の兵を集て、武藏相模の兩國に對すとも、勝事を得がたし、若謀を以て爭はゞ、東夷の武力唯利を擢き、堅を破る內を不出、是欺くに易くして、怖るゝに足らざる所也、合戰の習にて候へば、一旦の勝負をば必しも不可被御

覽、正成一人未生て在と被聞召候はゞ、聖運遂に可被開と被思召候へ

と奉答し、絶對の信念を披瀝し奉つたと同一の信念であると信ずる。正成いかに智謀あるとも、河内の一豪族に過ぎず、その輩下に集まつた兵卒は僅か五百人に過ぎなかつたのである。彼何の信ずるところあつてこの言を敢へてしたのであらうか。しかも、古來何人も、彼の言を一時の放言と爲すものはないのである。たゞ千古不滅なる皇軍聖將の心事を仰ぐのみである。

天皇の叡慮に感激した正成は、一身の榮利を思はず、粉骨碎身たゞ〳〵叡慮を安んじ奉ることのみを念じたのである。彼も「若し謀を以て爭はゞ東夷の武力唯利を擢き、堅を破る内を不出、是欺くに易し」といつてゐる、もとより自己の智謀を信じたことに疑ひはないが、たゞ自己の智謀をのみ恃みとするものではない、彼の恃むところは皇祖皇宗の御神靈であり、聖帝の大稜威であり、部下將兵の忠誠である。この御神靈、大稜威の下、忠誠の將兵を以て、大逆の東夷を討ずるに、何の恐るゝことかあらん、我が神算妙機の湧いて止まざることを信ずるのである。

この正成の信念が、我が皇軍聖將の絶對必勝の信念となるのである。されば、東郷元帥は、

天は必ず正義に與し、神は必ず至誠に感ず

といふことを標語として至誠に勵んだ。至誠の徹するところ必ず天佑ありと確信したのである。元帥の、

おろかなる心につくす誠をばみそなはしてよ天つちの神

と赤心を吐露してゐる。かくてこそ聯合艦隊司令長官として征途に上るとき第一の命令の末句は「天佑を確信して聯合艦隊の大成功を遂ぐべし」といふことであつた。東郷元帥が明治天皇への奉答はこの大確信の披瀝に外ならないのである。この大信念は、また山本元帥の大信念であつたのである。元帥も亦至誠を致す外に何ものも誓ふものはなかつたのである。

大君のみたてとたゞに思ふ身は名をもいのちも惜しまざらなむ

と詠じ、一切の私を、一身の生命はいふまでもなく、武將最大の名譽さへ抛つて顧みざるの慨があつたのである。かくて、その征途の第一命令は

各員は本職と死生を共にせよ

といふ語を以て結んだといふことである。これは一面元帥自らが部下將兵と死生を共にするといふことを示したのである。我が全艦隊の志氣はかくして、いやが上にも高調したのである。元帥はこの部下を率ゐて米英撃滅の征途に就いたのである。元帥は自己の智謀を云々するものではない。故に

海に山本ありと御安心などは迷惑千萬にて小生は　小敵たりとも侮らず大敵たりとも懼れず　の聖諭を奉じ日夜孜々と實力の錬成に精進致し居るに過ぎず、恃む處は慘として驕らざる十萬將兵の誠忠のみに有之候

といつてゐたのである。元帥も亦大楠公のごとく、「東夷の大逆、唯天の譴を招く」といふを疑はず、東郷元帥のごとく、「天は必ず正義に與し、神は必ず至誠に感ず」といふ絶對の信念の下に、一切の私を捨てゝ征戰のことに勵んだのである。

かやうなる信念に生き、理想に導かるゝのが、我が聖將、大楠公、東郷、乃木、山本等が、東西諸外國の名將に冠絶する所以である。この信念、理想に徹することなくして、いかにして千早城の戰、旅順の攻陷、日本海の大戰、眞珠灣の大攻擊といふごとき眞に乾坤一擲の大戰をなし得るであらうか。我々はもつと眞劍に考へねば、皇國聖將の心事と大業の因つて來るところは理解し得るものでないと信ずるのである。

六　皇軍の傳統的精神

山本元帥の飛行機上の戰死に就いては、國民は齊しくその壯烈古を曠しくする偉勳を仰ぐと共に、或は、元帥の戰死を惜むのあまりならんも、往々聯合艦隊司令長官といふ重責を輕んずるの行動にあらずやとの歎を發するものがあるばかりでなく、元帥の戰死そのものに就いてとかくの疑惑を抱くものがあるやうである。

これ等は誠に遺憾のことである。かやうのことは、飛行機は危險だ、航空戰は最も危險だといふ常識的考への外何も考へ得ぬからのことで、現代戰の意義も、皇軍の傳統的戰法も知らないばかりでなく、名將の眞の心事を考察し得ないからである。少しくこのことを說明して見よう。

昭和十五年頃であらう。山本元帥が地方長官等を軍艦に招いて、軍艦や、戰鬪のことをいろいろと說明してきかせた。某官が、この話を聽き、また司令長官指揮所を見て、『聯合艦隊司令長官といふ大切な指揮官が、こんな危險なところで指揮されることはどうか、もつと分厚い鋼鐵で造つた司令塔の內で指揮されることがよいではございませんか』と問ふと、元帥は卽座に、

最高指揮官は寸秒を爭ふ迅速さで敵情を知る必要がある、敵發見の遲速は勝負を決する、敵情を知るや、旗下艦隊を卽座に決戰隊形に展開せしめなければならない、敵に對し、先制有利の隊形をとれば、司令長官は戰死しても、海戰は勝つのである、爾後の處理は參謀長その他幕僚がやつてくれる、しかし、かやうな最高指揮官の率先垂範は、この山本が發明したものでもなんでもない、皇國海軍傳統の精神である。

米內光政著『常在戰場』

といふ意味のことを告げ、彼等の蒙を啓いたといふことである。

こゝにいふ皇國海軍の傳統的精神とは何であるか、東郷元帥は、かう說明してゐる。

海戰で勝を制するの極意は、平素の戰術研究と共に微妙なる戰機を捕へてこれに應ずるの行動が大切だ、それには旗艦が常に先頭にあつて艦隊を率ゐるのが一番やりやすい、また亂軍になつた際で

も、旗艦が依然先頭に進んでゐると必ず追航するものが出來て、遂には隊列も回復し、勝を得るに至る

これが帝國海軍の傳統的精神に出る戰法と稱するものである。この戰法は日清の海戰から日露の海戰に於ていつも赫々の戰果を擧げてゐた。而して兩元帥はこの戰法の最も忠實なる實行者であつたのである。

山本元帥の戰死を輕擧なりとするものは、我が皇軍の傳統的精神と戰法とを否認するものであるといふと、更に、いや傳統的戰法可なり、たゞ危險率の最も多い飛行機に重任の身を託するのは、果してどうかといふ人がある。これも全く常識的疑問で、現代戰の意義を未だ解しないからである。現代海戰に於ては、航空戰が水上艦艇戰に代つた趣があり、海空權を制するを以て第一義とされた。この革命的戰術の變化に於て、しかもこの變化を成就するがために、尠くとも二十餘年の歲月をその研究に傾倒した元帥が、たゞ危險率が多いといふやうな舊觀念でこれを避けることが出來るであらうか。そんな精神で航空作戰を進め得るであらうか。私は、次の元帥の語を紹介したい。これは昭和九年ロンドン軍縮會議の豫備交渉のときである。元帥は、或る新聞記者に飛行機の體當り戰法を說いたことがある。

『君は僕を亂暴な男と思ふだらう、然し考へて見給へ、艦長は艦と運命を共にする、飛行機の操縱士が機と運命を共にするのは當然ぢやないか、飛行機は軍艦に比べて小さいが、操縱士と艦長とは全く同じだ、僕は今度日本に歸つたら、もう一度是非航空をやる、僕が海軍にゐる以上は飛行機の體當り戰術は誰が何といつても止めないよ。』

この語は、元帥が自ら體當り戰術を實行するといふ意ではないが、航空戰に對するその考へ方が知られるのである。私はかやうの疑問を抱く人に、更に東郷元帥の次の語を告げたい。

海戰に於て、勝利を得るの極意は戰機を觀るにあることはいふまでも無いが、その呼吸は主として實驗より會得せらるゝもので、如何に才氣の優れてをる者でも、机上の學問のみにては、之を捕捉すること困難であらう、故に海將たらんとするものは、學術研究と共に青年時代より成るべく、海上勤務に從事し、艦隊運動等に實驗を積むよう、心がけることが肝要である。（海軍軍令部長奉職中の談話）

この海將を空將とし、艦隊を航空隊として考へれば山本元帥のことが能くわかると思ふ。元帥は東郷元帥のこの語を服膺し、航空戰の戰機を机上にあらず、實際に於て捕捉せんとしたのであるまいか。私は、今少しく東郷元帥の語をかりてこのことを說明しよう。大正四年海軍大學校長佐藤鐵太郎氏が就任に際し、敎を請うたときに、元帥は、前にいつた帝國海軍の傳統的戰術たる旗艦先頭戰術を告げたのである。

世の兵學者中には、大艦隊を指揮するには、獨立旗艦に乘つて列外よりするのが善いと主張する者

があるが、此方は之に同意することはできぬ、此方は常に主力艦隊の先頭に占位して、戰ふことに與する。何故かといふに微妙な戰機は列外より命令を發して艦隊を指揮せんとするも、微細な變針を行つて戰機に應ずるやうな事は不可能であり、要するに大艦隊の戰鬪は、一々命令を待つて行はれるやうな迂遠な事では駄目だ、全軍主將の態度を仰瞻、全軍之に倣つて善處してこそ、始めて大捷が得られるのである、主將は全軍の目標となるべき嚮導者で、口喧しい號令者では無い、此方は我が主力を掌握し、全軍の模範者となつて戰ふことを望むものである。

要するに元帥は、微妙なる戰機は列外では捕捉し難いといひ、躬を以て學び得た海軍の傳統精神を佐藤海軍大學校長のために說いたものである。山本元帥は、この佐藤校長の下に甲種學生として學んでゐたことを思へば、東郷元帥のこれ等の精神が、佐藤校長を通じて吹きこまれたことにも疑がある まい、山本元帥こそは、最も能くこの精神を繼承したものである。『主將は全軍の目標となるべき嚮導者で、口喧しい號令者では無い』といふ語こそ元帥の一生であつたのである。東郷元帥の精神を現代航空戰、特に自ら創始した航空戰に適用したのが山本元帥であつたのである。若し東郷元帥をして今日にあらしめたならば、同じく山本元帥と運命を共にしたことに疑ひがないのである。

私は更に山本元帥の精神から考へたい。元帥は、大東亞戰爭に乘り出す時、全艦隊員に告ぐるに

『各員は本職と死生を共にせよ』

といふ語を以てした。我が部下に死生を共にせよといふ大將が、飛行機は危險であるから、本職は御免を蒙るといふのでは、部下將兵が動くであらうか、いつでも部下と共に死し得るといふ精神があつてこそ、戰爭が出來るのである。これが出來ない人は將帥たる資格のない人である。山本元帥はそんな人ではない。

七　死生觀

私は武將と死との問題を論じて元帥の場合を考へて見たい。

死を惜まざるもの必ずしも眞の勇者にあらざるごとく、死を惜むもの必ずしも怯者でない。要は死生を離脫し、死生のために煩はされぬのが眞の勇者といふべきものであらう。西郷隆盛は嘗て、

道を行ふ者は、固より困厄に遭ふものなれば、如何なる艱難の地に立つとも、事の成否、身の死生等に少しも關係せぬもの也、事には上手下手あり、物には出來る人、出來ざる人あるより、自然心を動かす人もあれ共、人は道を行ふものゆゑ、道を踏むには上手、下手も無く、出來ざる人も無し、故に只管ら道を行ひ、道を樂み、若し艱難に逢ふて之を凌がんとならば、彌々道を行ひ道を樂む可し、予壯年より艱難と云ふ艱難に罹りしゆゑ、今はどんな事に出會ふ共、動搖は致すまじ、夫れだけは仕合せなり

といつてゐた。これが西郷の精神である。彼が事を爲すには、事の成敗もない死生もない、たゞ道を行ひ、道を樂しむといふだけであつたのである。この精神を以て、明治六年には征韓論を唱道して廟堂に大波瀾を起した。彼は先づ死を期して特派使節となつて朝鮮に赴かんとしたのである。これに對し、反對論者は、彼の行爲を以て死を急ぐものとし、國家の柱石たるもののとるべき道にあらずとした。それで彼は同年八月二十三日、板垣退助にこの心事を告げてゐる。これは達人西郷の死生觀を能く示してゐる。左に紹介しよう。

先日は態と潛居迄御來訪被成下、御教示の趣深奉感佩候、死を見る事は歸する如く、決しておしみ不申候得共、過激に出て死を急ぎ候儀は不致候間、此儀は御安堵被成下度奉希候、乍然無理に死を促候との說は、亦以必ず起り可申、畢竟其邊を以戰を逃候策を廻し候儀必定の事と奉存候付、先生は御動き被下間敷、今日より御願申上置候、扨小弟此節の病氣に付主上より御沙汰を以醫師え被命治療仕候間、醫師の命ずる通りいたし來候處、最早治養所にては無之候得共、難有御沙汰を以加養致し候、付ては死する前日迄は治養決して不怠と申居候位に御座候間、死を六ヶ敷思ふものは狂死でなくては出來不申候故、皆々左樣のものかと相考可申候得共、夫等の儀は兼て落著いたし居候間、申上候も餘計の事とは奉存候得共、先生の御厚志忘却難致御安心迄に卒度申上置候、此旨御厚禮旁以寸楮奉得貴意候、謹白、

こゝに西郷の死生觀が見られる。「死を六ヶ敷思ふものは狂死でなくては出來不申候」といひ、「夫等の儀は兼て落著いたし居候」といふところに達人の言がある。死を自然にまかすれば議論はないのである。葉隱に「武士道と云ふは死ぬ事と見付けたり、二つ一つの場にて早く死ぬ方に片付くばかりなり」といつてゐるのはいざといふときに、思慮分別に亙りて、死すべき道を誤まらんことを恐れて誡めた語で、必ずしも生を輕んじたことでないことはいふまでもないことである。

さて、話は少しく側道に入つたやうだが、こゝに見るごとき西郷の精神、生死を超脫して道を行ふといふことは、東郷、山本兩元帥の等しく懷抱する精神であつたのである。共に大君のために皇國軍人としての本務を盡す、最善の努力をする、そこに我が道があると信じた。そのためには生死のごときは眼中にないのである。山本元帥は、日本海々戰の實況を語り、部下の請を容れて司令塔に入つた三須中將も、部下の請を斥けて艦橋に露出してゐた東郷元帥も、いづれも大勇の人であるといひ、しかも三須中將は司令塔に入つて負傷し、東郷元帥は艦橋にあつて微傷も受けなかつたといひ、

『どこで誰が死し、誰が怪我するかは全く天運で、それを考へるだけ餘計のことである』

といつてゐた。

山本元帥が、昭和十八年二月初頭、友人城戸忠彥少將に與へた書翰に、

小生は十二月八日の所感は

一とせをかへりみすれば亡きともの數へかたくもなりにける哉

なるも、夫れ丈け小生も此世にもあの世にも等分に知己や可愛い部下が居ることとなり、往つて歡迎して貰ひ度くもあり、もう少々此世の方で働き度くもあり、心は二ツ身は一つといふ處にて候

といつてゐた。忠勇なる部下の死を思ふ溢るゝ慈父の情の中に、生死を離脱した心境が見らるゝのである。その、

大君のみ楯と思ひ定めたる心すがすかし秋空に似て

荒潮の高鳴る海に四とせ經つ都の手振わすらえにけり

との詠歌は、この心境のおのづからなる發露であらう。かくて、東郷元帥は、

大君の御爲につくす武夫の道にやすらふいとまあらめや

と詠すれば、山本元帥は、

すめらぎの御楯とちかふま心はとゞめおかまし命死ぬとも

と詠じた。兩元帥には大君の御楯となる、これが最初であり最後である、そこに休みがない、我れ等の生はそのための生であり、死はそのための死である、生死何ぞ論ずるに足らんやとは、その精神であり、それは西郷の精神であり、やがて日本民族の精神であるのである。

八　名將か聖將か

東郷、山本兩元帥を古今の名將といふに何人も異議がなからう。前元帥の黃海海戰、日本海海戰、後元帥の眞珠灣の襲擊或は珊瑚海海戰等はこれを證して餘りある。だが、共に聖將の稱を聽し得るであらうか、世に智將、謀將はた勇將は尠くない。維新以來の我が國にも、戊辰役に大村益次郎、賊なから河井繼之助があり、日清役に川上操六、日露役に兒玉源太郎があり、共にその智謀を稱せられ、膽勇を稱せられた。その他元帥、大將その人必ずしも乏しとしない。しかも、その中の何人に聖將の稱を許し得るか。

私は嘗て名將と聖將の別を論じ、偉人、名將といはるゝ人にあつて、その偉業、功勳は敢へて多しとせず、驚くに足りない、たゞ、その成就した偉業、功勳の地に居るの如何にあると思ふ、例へば山縣有朋、山本權兵衛の兩將のごとき、何人も偉人と稱し、或は名將と稱するに異議なからんも、果して聖將と稱し得るか、それは兩將が、その成就した偉業、功勳の地に居るに遺憾なかりしかといふ疑問に存する、世にいふ薩の海軍、長の陸軍といふがごときは、必ずしも悉く實ならずとするも、我が陸海皇軍にかやうの汚名を蒙らしたことに對して、兩將に果して責任なしとするかといふことに存するのである。

明治の眞儒西村茂樹は、維新の薩長には功臣あつて忠臣なしといひ、彼等は大抵功名富貴を以て心とするもので、その志を得たときは、天下皆精忠偉功を以て稱するが、一旦志を失ふときは恨を政府に報ぜんと欲して謀反し、反抗した、彼等には心中道義の念を蓄ふるものが甚だ少なかつたと歎じてゐた。西村の語は、時勢に憤激した憤懣の語たるを免かれないが、しかし、それは明治維新史を研究した何人にも共通した歎きであらう。かゝる薩長諸豪の中にあつて、薩に東郷元帥、長に乃木大將を見出すに至つて、私は北海の濃霧に天日を仰ぐの感があつた。兩將こそは眞の忠臣、或は聖將の稱を許し得るものであるまいか、乃木大將はこゝで說く限りではない、たゞ東郷元帥に就いて少しく說かう。

東郷元帥が、日露役の大勳功を荷うて帝都に凱旋したが、毫もその偉勳を自覺せざるかの觀があつた。凱旋後東京市民の日比谷の大歡迎會に臨んでも、元帥の動作は平素と異らなかつた、群衆はその成功を祝福せんがために殆ど熱狂したが、元帥は少しも驕れる色がなかつた。元帥がその壇場に登つて朗讀した謝辭には、一言の聯合艦隊の功を說くことなく、一に大元帥陛下の御威德と部下將卒の勇敢とを稱するのみであつた。この日の元帥の謙虛の態度には感激しないものはなかつた。しかしこれは元帥の終生の態度であつた。日露役後三十年の生涯に於て、何人も一度たりとも、その功を云々する元帥を聞いたことはないのである。

元帥の晩年に深く親炙し、日夕その邸に出入してゐた安部眞造といふ人が、元帥の『直話集』といふ書を公にしてゐる。安部が或るとき、日本海海戰の大捷に及ぶと、元帥は

『あゝ行くのが當り前ぢや』

といふだけで他に語がない、それで阿部が、

『閣下はどんな勳功を御建てになつても、御自身ではさうと御氣がつかれないのでせうか』

といふと、元帥は

『吾々軍人はそれが當然の務めぢや、なにも功を誇ることは一つもしてはをらんよ』

といふだけである。阿部が尙も

『閣下は自慢するやうなことは、一回もなかつたのですか』

と聞くと、元帥は

『いやある、私は永い間海軍にをつたが、未だ一度も始末書といふものを書いたことがないのぢや、失敗は自己の過失から起ることもあるが、天變とか、地變とか不可抗力から起ることも多いが、私は一度もさういふことに出くわさなかつた』

といふのである。どこまで謙虛であるか、測り知れないものがある。尾崎行雄氏は元帥を評して、

余の大將に敬服するは、大將が蓋世の偉功を奏しながら、毫もこれを自覺せざるものゝ如くなるにあり、その鞠躬如たるは作爲の恭謹に非ずして、自らその功業の偉大なるを知らざるがためなるに

似たり、……曠古の偉勳を奏してこれを自覺せず、是東郷大將の大將たる所以にして、所謂おみなる英雄の最上乘なるものにあらずや

とは、評し得て適切といふべく、尾崎氏は市長として凱旋後の元帥に歡迎會、祝賀會等に數度、面接の機會を得たが、その著『号堂集』にかう記してゐる。私はこの偉勳を自覺せざるがごときところに、元帥の聖將たる所以を見出すのである。

また、杉浦重剛は東宮御學問所總裁としての元帥を語り、

『現下の日本において、東郷さん程東宮御學問所總裁の適任者は他にあるまい。それは英雄だとかいふ點からでは無い、唯その終始一貫の誠實からである。あの毎年末、年始に行はせられる御終業式と御始業式との際、東郷さんが御前に進んで、その學年の御成績や將來希望し奉る點を言上する時の容子には、つく〳〵感心させられる。あの地位、あの功績で加之總裁でありながら、鞠躬如たる態度ばかりか、八年の最終の時まで何時も聲が顫へてゐた。一度あの容子を見聞したら、誰でもその誠意に打たれない者は無いであらう。榮達して愼み、親しみ奉つて狎れず、君子でなければできない。私は從來種々な場合に會うてゐるが、これ程奥ゆかしい感じのした事は滅多にない』

聖者、聖者を知るといふべきか。元帥はかやうの人である。元帥自からは、

おろかなる心につくす誠をばみそなはしてよ天つちの神

といつてゐた。これが元帥の總てゞあつた。誠を盡す外に何ものもない。元帥果して自らの功績を自覺せざるためか、自覺して全て謙虛なるためか、聖賢の心事妄りに忖度を許さゞるものがあるが、たゞかやうなる名將をこそ皇國の聖將と呼ぶのである。

しからば、山本元帥には、聖將の稱を許し得るであらうか。元帥は、第一線にあつて、米英撃滅に心魂を勞して遂に他を顧みるに暇がなかつた。元帥が未曾有の謀將、勇將たることに何人も異存がなからう。たゞ元帥にも聖將の稱を許し得るか、否やである。

思ふに東郷元帥も眞に聖將の稱が、萬人に首肯さるゝに至つたのは晩年のことで、その天性はいふまでもないが、そこに至る元帥の修養は尋常でなかつたのである。杉浦重剛も『東郷さんの眼を見ると、炯々として人の肺腑をつらぬくやうな氣がする、あゝいふ眼をもつ人は概ね鋭悍で、やゝもすれば相手に恐怖を感ぜしむるものだが、東郷さんと話をしてゐると重厚で謙遜で、たゞもう親しみのみが感ぜられる、どうも眼と感じと相應しないのは、不思議でならないが、それは確に修養の結果と思はれる、だが、よくあれまで修養し得られたものとつくづく感心する』といつてゐた。彼が修養による天成的偉人といふ所以はこゝにあるのである。

しかし、山本元帥には、未だその暇がなかつた。若し東郷元帥の壽を保ち、靜かに半生の功業を回顧し省思する地に立たしめば、私は元帥の修養、進境は測るべからざるものがあつたと思ふ。私がそ

の戰死に無限の痛惜を感ずる所以の一はこゝにあつたのである。しからば、元帥には未だ聖將の稱を許し得ざるか、どうか。

私はさうは思はない。元帥が今日までの勳功とこの勳功の地に居るその言行には、我々は多大の敬意を表するのである。元帥は大東亞緒戰の赫々たる勳功を以てして、毫も自己の偉大なるを知らざる風があつた。元帥は舊友の一人に

小生も若人等の奮鬪の一戰にて、一躍花形となりし樣子、苦笑汗背に不堪候。（昭和十七年二月目黒眞澄宛）

といひ、また森山慶三郎中將の祝詞に對して、

二千六百二年の元旦に當り、御懇辭拜受、恐縮至極に奉存上候、天佑と敵の過失とに依りて得たる緒戰の成功は再び之を期待すべき限に無之、一同倍々自戒奮勵致度覺悟に御座候。（十七年一月七日附）

といつてゐた。これが、元帥の衷心の語たることを私は信ずる。元帥も東郷元帥のごとく、曠古の偉勳を自覺せず、たゞ自己の職責の重大なるを思ひ、その任の盡し得ざることを恐懼するのみである。元帥が神宮行幸を拜聞して、恐懼措かざりし所以はこゝにある。

この謙虛の心事、嚴肅の反省、これは杉浦先生をしていはしむれば、眞の君子にあらざれば能はぬことである。私はこの一事を以て、元帥も亦西村茂樹などのいふ所謂維新の功臣、心中道義の念を蓄ふること少しなどいふ人でなく、東郷元帥と共に聖將と仰ぐべき人であつた。或は未だ圓熟しなかつたかも知れないが、その資は十二分に存在した人たることを信ずるのである。尙ほ私は二三のことを尋ね、東郷元帥と比較してその人となりを見、私の考への誤らざることを證したい。

九　質朴の英雄

東郷元帥が質朴の英雄なりと稱せられたごとく、山本元帥も質朴の英雄であつた。長くも、詔辭には「身ヲ持スル廉潔」と仰せられてある。私は兩將を對比してこのことを語りたい。東郷元帥は武人の質素たるべきを說いて、かういつてゐる。

質素を旨とすることは、本分を盡す上に肝要な一條件で、さうで無いと終には分不相應な贅澤を眞似て見たくなつたりして、邪道に陷ち、不正を働いて名を汚すやうなことにもなる、さうなつては、何うして本分が盡せよう、これは一般に愼むべきことぢやが、別して軍人は決して其の惡風に染まないとの堅い覺悟が大切である。

東郷元帥の日常生活はこの敎訓に徹底してゐた。その邸宅のごときも極めて質素で、その客間の調度器具なども同樣質素で、元帥の人となりの一端を窺ふことが出來たのである。日露役後、元帥の武勳を慕うて、元帥邸を訪うた外人達が、或る人に向つて、『あれ程の世界的偉人をあのやうな粗末な家に住はせて置くのは、貴國の恥辱ではあるまいか』といふ意味のことをいつた。これを聞いた、九

鬼隆一、菊池大麓、奥田義人の諸氏が、諸方の富豪を說いて巨額の金を調達し、これを持參して元帥に受納を請うた。すると元帥は固くこれを辭した。三氏が尙も受納を强ひると、元帥は

『苟くも帝國の軍人たる者が、大命を奉じて敵を擊退したことに向つて、左樣な贈遺物を受け取つたならば、東鄕は今後世間に合はせる顏がありません』

といつて、あくまで峻拒されたといふことである。元帥の謙讓と質素とは、眞に徹底してゐたのである。

しかるに、山本元帥の質素はより以上であつた。その半生を送つた靑山高樹町の邸宅などは、僅かに三間か四間、判任級の小官吏の住宅程度のものに過ぎない。何等特別の器具裝飾もないのである。元帥が次官時代、東鄕元帥の邸宅が市民に開放されるといふときに、職務上視察に行つたことがあつた。元帥は東鄕元帥の質素ぶりも兼て聞いてゐたが、歸つてくると、東鄕さんの御宅も、自分の宅に比ぶれば數段と立派であるといつてゐたといふことである。

元帥が食、衣の質素振りも住と同樣に徹底したものであつたらしい。我々との會合などには、大將になつても電車で往復してゐた。私が或る夜、

『あなたも電車ですか』

といふと、

『私は公務以外はいつもこれですよ』

といつて、つり革にさがつてゐたことを記憶する。

山本元帥のかやうなる生活の徹底振りの由つて來るところはいろいろとある。常在戰場の藩風に基き、その祖餘慶の教訓にも鑑み、また「軍人は質素を旨とすべし」といふ勅諭に基くことはいふまでもないが、私はその一に元帥の公私生活觀にあると思ふ。元帥は公人の公的生活は役所にある、我が家はたゞ、私の休息所だ、これに驕りは禁物だといふのである。元帥は支那事變當初海軍次官をしてゐたが、多忙のときには官邸にも歸らず、次官室にがんばつて徹夜したり、毛布をかぶつて安樂椅子に假睡することも度々であつた。聯合艦隊司令長官に任ぜられたときも、次官官邸から、まつすぐに水交社に行つてそこで事務を辨じてゐる。人が、『どうして宅へ歸らないのですか』と訊ねると、元帥は『私の身體は公の身體だ、みだりに家へは歸れない、家へ歸るときは、公の自分としての役目が終つたときだけだ』といつてゐたといふことである。

その後軍務打合せのため上京することがあつても、自宅へは歸らないで水交社に陣取つて、海軍省、軍令部へと出向、打合せがすむとそのまゝ歸任するといふこともあつたと聞いた。元帥は部下の將校などに、歸港するとすぐに歸宅するやうでは駄目だ、といつてゐたといふ。元帥には「禹が家門を過ぎて入らず」といふ趣があつたのである。元帥が敢て家庭を好まないといふのではない、たゞ徹

底せる公人、公務觀が元帥をして私宅を顧みしむる暇なからしめたのである。元帥が西山伊豆子に宛てた書翰に、

過日は留守宅に御伺被下ましたよし恐入りました、大將の家としては相當のものだつたでしよう、尤も太平洋といふ少々廣過ぎる別莊に常住して居るから、家は貧弱程なつかしいのです

といふ語がある。諧謔の中にも私第觀が現はれてゐる。要するに元帥はつひに私第を樂しむといふ考へや時間的な餘裕をもたなかつたのであるといはれよう。

この公務觀に徹底した元帥は、在米駐在武官中、東京から家族の手紙、物品などが配達されても、執務時間中は決して開封するやうのことなく、そのまゝにしてゐたといふことである。

元帥の質素生活の由つて來ることの二として元帥の「武人錢を愛せず」といふことの徹底振りが擧げられる。海軍では、「軍人はいつ死するか知れぬ、生活は現給與の半分たるべし」とは一般にいはれてゐるが、元帥は身を以てこれを實踐したのである。元帥はこの質素の生活において剩つた金は悉く部下をいたはるの資とし、或は鄕黨の教育や慈善事業などに使用したやうである。

『武人錢を愛せぬの眞骨頂が如實に表はれてゐる』

と、海軍の友人は語つてゐた。

元帥程友人や部下、鄕黨のために餘裕も多からぬ財囊を傾けてゐた人はあるまい。これに就いて、面白い手紙を近頃私は讀んだ。それは、元帥が明治三十八年五月三十日、日本海海戰に負傷して佐世保病院に入院したときに父母に呈した手紙である。

昨卅日愈入院異狀無之候へば御安心被下度候、區々たる微傷をもつて此大勝の萬一に値せしことを思へばむしろ感泣に不堪、艦長以下の丁寧なる慰藉に對しても速に回復致し、來るべき次回の戰にこそ花々しき討死を遂げんものと偏に祈居候、敵の長官ロジ將軍もあはれ、捕虜として昨日本病院に入院致候、陳ば五十六儀、此たびの戰こそかねて覺悟の最後と存じ候ひし爲、臨戰以前、期せまるに先ち、財囊を悉く散じ病床にある友人等に分ち與へ候ひしが、今や僅に身傷きしのみにて囊底殆ど存するものなき有樣に御座候に付、甚だ申上兼候へ共參拾圓許御都合被下、御送被下候はば幸甚に御座候、先づは昨今の狀況と右御願ひまで一筆申上候也、

明治三十八年五月盡日　　五十六

父上樣

母上樣

出征に臨み、囊中を空しうして病友に惠むところ武人の襟懷である。元帥が武人錢を愛せずとの逸話はこれまで友人間にも傳へられたが、しかし、その乏しき私財を割いて親戚、知人等に惠んだことは、多く世に知られなかつたが、その死後に至つて多く發表された。

元帥が小學校時代の恩師渡部與が、後年下關第一銀行支店在職中、その預る金庫から千圓の札束が紛失し、廉直の與氏が私財を以てこれを辨償し、ために一家窮厄、折柄御茶ノ水女子高師二年に在學中の長女與喜子の學資にまで困難を來したといふことがあつた。このことを聞いた元帥は、海軍大學在學中であつたが、その受くる月給中より毎月十二圓づゝをその學資として送つたのである。このときの書翰こそは、恩師を思ふの情と、武人錢を愛せずの面目とを遺憾なく傳へてゐる。

拜復御奇禍の御報拜讀、驚愕の至り御心痛のほど深察御同情の言葉も無之次第に御座候、爾來一ヶ月今以つて原因不明とは御遺憾さこそと奉存上候、人事を盡して天命をまつとは、われら軍人の金言と致す處にて候が、これ決して軍事上のみにあらずと愚考致し居候、これは此際充分の御自重御自愛のほど偏に奉切望候

小生平素金錢の心掛惡しく、且親戚舊友などに援助致居候ため、かゝる場合心にまかせざる儀殘念至極に御座候へ共、これも已むを得ざることと自ら嘲ける次第に御座候、しかし御長女樣、本月より御學資金十二圓宛は、小生身體に故障無之限りたしかに御引受申上候に付、乍憚御放念被下度候、尙かゝる事を直接與喜子樣へ申上げ候も如何かと存じ候へ共、或は御取急ぎのことかとも存じ候に付、兎に角直接御面會の上、御送金のことなど決定致し度、十七、八日の土、日曜日に御面會致度申上置候に付、右御無禮の段御容赦被下度候、御一家皆々樣の御痛心誠に御推察申上度候へ共、人生行路の難さはかねて御教訓にも有之候儀、更に御發奮のほど重ねて奉祈上候、右不取敢御見舞旁々御返事まで一筆斯如御座候、頓首、

四月十三夕　　五十六

渡部先生　侍史

それから、約一年三ヶ月程、毎月の送金を缺すことがなかつたといふことである。當時元帥は大尉時代、その薄給中より、この送金は容易のことでなかつた筈である。しかも、元帥は平氣でかやうのことを敢へてしながら、「小生平素金錢の心掛け惡しく」などいつて氣どらざるところ、その面目躍如たるものがある。

また某外交官が、若い時代外國在勤のとき俄かに歸朝の命に接したが、旅費にも窮し、折柄懇意にしてゐた元帥に相談すると、元帥は直に三百圓を貸與した。某氏はそれで無事歸朝したが、深くこれを德とし、その後某銀行から借りて、元帥に返却した。元帥も既に歸朝してゐたのである。この金を受取つた元帥は、直に某氏を訪うて、「俺は貴さまに返して貰ふと思つて貸したのではない、それに貴さまはこの金をどこから出したのか」といふので、某氏が、銀行から借りたる旨を語ると、元帥は聲もあらあらしく「馬鹿野郎、そんな算段してまで、俺に金を返す必要があるか、今後銀行に返すときまた困るではないか、俺はこんな金はいらない」といつてなげつけて戻すといふ始末、某氏が「そ

れは困る」といふと、「貴さまがそんな金を返すなら、爾來貴さまとは絶交するぞ」と怒るので、某氏はすまぬと思ひながらそれを受取つた。そのまゝ歳月が過ぎたが、後年某氏が元帥に、「私は、あなたに未だ借金があります」といふと元帥は「いや、あれは受取つたよ」といふ始末、彼が、それは「いつのことですか」といふと、元帥は「私がメキシコで困つたときに」といふのである。これは元帥が米國大使館附武官時代、メキシコ油田視察中、金に窮して大使館から送金されたことがあつた、このとき某氏も亦大使館に居つて、そのことに與かつてゐたといふので、元帥はこのことを以て、「あれは受取つた」といつてゐるのだと知れたのである。某氏はこのことを語り、「借りた金を返さうとして怒られたのは私だけだらう」と、元帥の潔白な襟懐を稱してゐたことを私は親しく聽いた。

元帥はこの襟懐だから、蓄財もならず、堂々たる邸宅も構へられなかつたのである。だがそこに徹底した常在戦場の武人魂があるのである。

一〇 皇軍魂

支那事變以來、帝國海軍の活躍が目ざましいことから、傳統的海軍魂といふことがいはるゝ。私は海軍魂とか陸軍魂とかいふことを好まない。共に大元帥陛下の股肱たる皇軍として勅諭に生きる軍人である。東郷元帥はこれを、

『私は日本の軍隊のやうに、崇高なる精神を以て統一されてゐるものは、恐らく世界に復とありますまいと存じます』

といつてゐた。皇軍の精神は陸海軍に於て相違がないのである。かういふ意味に於て、私は、海軍魂といふも、皇軍魂といふも同一に考へてゐるが、その魂といふのは、何んであるか、私は

皇國軍人は自己の與へられたる當面の任務に最高の努力を拂ふ人である、而してその生活には絶えざる修練を怠らぬ人である

といひたいのである。東郷元帥は日露戦役後聯合艦隊を解散するときに、「麾下一般に與へた訓示」の中に、

二十閲月の征戦已に往事と過ぎ、我が聯合艦隊は、今や其の隊務を結了して茲に解散する事となれり、然れども我等海軍々人の責務は決して之が爲めに輕減せるものにあらず、此戦役の收果を永遠に全くし、尚益々國運の隆昌を扶持せんには時の平戦を問はず、先づ外衛に立つべき海軍が常に其の武力を海洋に保全し、一朝緩急に應ずるの覺悟あるを要す……惟ふに武人の一生は連綿不斷の戦爭にして時の平戦に由り、其の責務に輕重あるの理無し、事有れば武力を發揮し、事無ければ之を修養し終始一貫其の本分を盡さんのみ……苟も武人にして治平に偷安せんか、兵備の外觀巍然たる

も、宛も沙上の樓閣の如く暴風一過忽ち崩倒するに至らん、洵に戒むべきなり、

といひ、最後に「古人曰く勝て兜の緒を締めよ」と結んでゐる。この訓示は、皇軍精神の説明といふべく、最も能くこれを實行したものは、やはり東郷元帥であつたのである。

東郷元帥は、嘗て小笠原子が、『閣下は自分が今日までにお成りになるまでの間に、何か御自分として處世上に特別の信條とでも申すか、さう云つたやうのものがお在りでしたか』

といふ問に對しては

『別に何もない、唯々自分は軍人として、一意專心その道を踏んで來たまでゝある』

と答へるのみであつた。また『閣下は嘗て海軍大學校長として、或は　今上陛下がまだ東宮に在しました時に、時の御學問所の總裁でもありましたことでしたが、この教育といふことには、何か確乎たる大方針とでも云ふやうなものでも、お在りでしたか』との問に對しては、また

『これも別に何もない、が隨分研究はした、軍人の教育といふものは、唯々一生懸命、軍人の學問をすればそれで宜いのである』

といふに過ぎなかつた。極めて平凡な語であるが、その實現は何人も難しとするところである。元帥はまた別の語でこのことをいつて、軍人として、軍人の道を盡す心得と軍人の道を說いてゐる。

本分を盡すといふことは、人間に取りて最も大切なもので、それには先づ其の本分の何たるかを承知しておくことが肝要である、處で軍人の本分は何かといふと、恐れながら軍隊に賜つた勅諭にある通り、忠節を盡すことが本分なのである、さうして尙ほ

世論に惑はず、政治に拘らず、只々一途に己が本分の忠節を守り、義は山嶽よりも重く、死は鴻毛よりも輕しと覺悟せよ

と御諭になつてをるのを確守し奉らねばならぬ、隨つて本分以外には、一歩も踏出すまいと覺悟することが、卽ち本分を盡す上に大切な一條件である、

本分を嚴守し、本分に全力を盡す、皇軍魂といひ海軍魂といひこの外にないのである。而して東郷元帥は本分を盡すことによつて、日露戰役にあの戰果を擧げ、八十八歲の生涯に於て、一歩も其の本分以外に踏出さなかつたから、こゝに海軍魂が特に喧傳されるに至つたのである。海軍ではこれを海軍の傳統的精神といひ、海軍魂と呼ぶに至つたのである。

山本元帥が、政治に干與するを好まず、海軍軍人の本務以外に一歩も出なかつた所以も亦、この傳統的精神の嚴守に外ならなかつたのである。かくて、元帥は東郷元帥のいふごとく、同一海軍內に於ても常に、その本筋を邁進せんことを冀つてゐた。未だ少佐として軍務局課員時代であつたが、先輩の大角岑生氏（後の大將）が、祕書官にならぬかと勸め、「海軍軍人として大成するにも、世間の人人に顏を知られてゐても無駄でないと思ふが」といふと、定めし喜ぶかと思ふと、元帥は、

『私は軍人として御奉公したい、祕書官などといふ氣の利いたことは私の器ではない、御命令なら考へさせて頂きますが、閣下の御言葉どほり、相談といふことなら御斷りしたい、私は軍人になりたいため、海軍に御厄介になつたのですから』

と、應じなかつたのである。元帥はこの頃軍務局で、通信と重油問題を擔任してゐた、誰もそんな地味な通信と重油問題などより、華やかな祕書官を冀望することはいふまでもないと思はれたが、元帥には仕事の地味や、華やかさは問題でなかつたのである。元帥がこの本筋を進みたいといふ考へは終生一貫したものであつた。元帥が、海軍次官就任を喜ばず、我々同窓生の祝賀會に臨み、「次官などは迷惑千萬である」といつて、我々を啞然たらしめたのもこの考へがあつたからに外ならないのである。

されば、聯合艦隊司令長官の就任は極めて滿足であつた。やはり祝賀會の席上、私が『今度は本望でせう』といふと、元帥は輕く、『ありがたう』といつてゐた。聞けば、この前後、首相候補にも擬せられたが、その欲するところでなかつたといふことを耳にしたことがある。元帥は就任の翌十五年二月、次の手紙を友人に與へてゐる。

貴翰難有拜見仕候

海上勤務半歲、海軍は矢張り海上が第一、まだ〳〵やるべき仕事、海上に山の如し、所詮海軍々人などは海上の技術家たるべく、がらになき政事などは眞平と存居候

御自愛奉願上候、

二月十八日　　敬具

松本大人　御座下　　山本五十六

山本元帥の一生は、この海軍魂に終始してゐた。二十一歲にして、日露戰爭に從軍したときから、六十歲にして飛行機上に戰死するまで、その生涯を一貫したものがそれであつた。元帥は「人はその勤務の場所にあつて最善の努力を盡すことが一番正しい」ことであると信じ、これを實行したのである。元帥は昭和十年一月ロンドンに在つて、米英相手に軍縮會議に奮鬪してゐたが、元旦に臨み、新聞を通じて故國日本へメッセージを送つてゐる。その中に、はつきりとその信念を述べ、その由つて來ることの一日にあらざることをいつてゐた。

予は海軍兵學校を出ると間もなく、日露戰爭にぶつかり、實戰の經驗を得ることが出來たのは、海軍士官として誠に幸運であつた、當時三須中將閣下坐乘の第一艦隊旗艦日進の艦長付を命ぜられ、前艦橋で戰鬪報告を書くのが予の任務であつた、忘れもせぬ敵艦降伏の前日、即ち明治三十八年五月二十七日、日本海の眞つ只中に國運を賭する一大激戰は開始された、戰友の傷つけるものが少くなかつた、その日一彈が飛び來つて艦橋の破片は予の脚を傷つけ、左手の指二本を奪つた、その刹那感じたことは

人はその勤務の場所にあつて、最善の努力を盡すことが一番正しいことであつて、何等の不安を感じない

といふことであつた。その後三十年の日子を經たが、この信念に變りはなく、今や命を受けて、軍縮豫備會談に臨んでゐるが、責任をもつて、その地位にあれば仕事の繁忙や問題の難澁は眼中になく、たゞたゞ微力を傾けて上下の期待に反かざらんことを冀ふのみである

といひ、詳かに帝國の主張を述べた後、

予は帝國の主張を以て最も正しく、且つ効果的であつて、これを實現することが、單に帝國のためのみならず、世界平和に貢獻する所以であると信じてゐる、而して予はこの信念の下に英米が篤と諒解のゆくまで説明し、以て我が公正なる主張實現に全力を盡してゐるものである。

山本元帥の信念はこゝにあつた。皇軍魂に生き、皇軍魂に死する、それが國家に盡す最善の道だ、大君への忠誠の最良の法だと信じたのである。この信念に立つ元帥が最高司令長官として今次の大戰に臨むに於て、皇國軍人としての最善の努力を捧げて、そこに死を期してゐたことはいふまでもないのである。彼は鄕友に與へた書翰に於て

此大戰には所詮小生にも有言の凱旋などは思も寄らぬ事と存居候　十六年十二月上松蔭宛

といつてゐたのである。かやうの決心は部下にも常に語つてゐたことはなほ後章にも明かにしよう。

昭和十四年四月十二日、元帥は母校長岡中學校に赴り、「事變下の生徒諸子に望む」と題して、一場の講演を試みたが、その要旨はやはり、人間に取りて最も大切なことは本分を盡すといふことであるといふ意であつた。元帥は本分を盡すには、先づ本分の何たるかを辨へねばならぬといひ、「當路の人々、首相を始め、私共軍務に關係する者達も、日夜この心身のごときは如何に磨り減らしても厭ふところでないといふ覺悟を持つてゐる、しかし、その背後に於ては必ず餘裕ある銃後國民の力が必要である、殊に將來の帝國の運命を擔ふ青年少年に、十分の餘裕を以て油斷なくやつてもらひたい。あなた方に冀望するところは、あなた方の本務である學問を飽くまで靜かな平らかなのび〳〵した心を持つて、油斷無く確實なる進歩發展を將來に期して勉强して戴きたいといふことである」といつてゐた。かういふ語は元帥の抱懷する本分觀から、皇軍魂から當然いはるべきことであつたのである。

しかし、元帥も學生が書を捨て、銃を取つて第一線に赴くことも絶無としてゐなかつた。或はかゝるときもなしとせずとして、それに應ずるの準備要意についても亦說いてゐた。曰く

『あなた方に望むところは、三年や五年の後ではない。しかし、或は國家非常の時、諸君に銃を持つて第一線に立つて戴くかも知れぬ、その時はこゝに居られる立派な配屬將校始め諸先生の御指導の下に學業に精勵し、必要ならば、何時でも第一線に立てる樣にして貰ひたい。』

山本元帥がこのことを諭されてから五年、遂に學生も銃を執つて第一線に立つの時機に立ち到つた

のである。この際に於ける山本元帥の本分觀が、學生に何を敎へ、何を冀望するかは、特に說くまでもなからう。

一一　兩元帥の人間味

東郷、山本兩元帥が同型、同質の人でないことはいふまでもなからう。或る點に於ては兩端を代表する人だといはれよう。しかし『聖將東郷全傳』を讀んで、山本元帥のことを瞑想すると、餘りにも類似の點を發見する。東郷の二字を山本の二字に改めても、そのまゝ何の疑問なしに受け取らるゝことが少くない。その二三のことを語らう。

少女の友となる好々爺

明治三十七八年戰役の後、外國人中特に英國人の元帥を敬慕するもの頗る多く、いろいろのものを元帥に贈つたり、或は賴んだりするものがあつたが、スコットランドに住む一少女は、覺束なき筆跡にて、次の意味の書面を寄せて、元帥の寫眞が欲しいといつて來た。

私は深く〳〵閣下を敬慕し、何とかして閣下の御寫眞を頂きたく父母に賴みしに、父は笑うて、立派なる方々より望まれても皆斷られ居る東郷閣下なれば、何とて汝ごときものが願うたればとて賜るものかと相手になり呉れず、それでも私は諦められず、閣下の廣大なる愛にすがりて、失禮をも顧みずお願ひ申し上げますれば何卒お寫眞を頂かして下さい。

この手紙を副官より受取つた元帥は、例のごとく默々として一語をも發しなかつたが、卽座に筆を執つて大判の寫眞に自署して、これを副官に渡した。（東郷全傳）この寫眞を手にした少女の歡喜が思ひやらるゝ。あの寡默にして沈毅な元帥の胸にはかやうな春の日のやうな溫情が溢れてゐたのである。

私はこのことを山本元帥にして考へても、そのまゝの事實が現はれたと思ふのである。山本元帥は能く少年、少女に手紙を與へた。ときには未知の少年少女に返翰を與へることもあつたのである。西宮市の津門仁邊町の川西航空機甲南製作所に勤務する横尾準一といふ人の長女泰子といふ國民學校の三年生、長男博といふ二年生の姉弟が、眞珠灣の大戰果に感激して、二人が力を合せて軍艦二隻と驅逐艦一隻の模型を造り、これに

アメリカとイギリスの艦隊を全滅させて下さい

といふ手紙を添へて、洋上の山本長官に贈ると、元帥はいそがしさも忘れて返事を出してゐる。その手紙は假名文字を刻明に書き綴つてあつた。

御テガミアリガタウゴザイマシタ、

ソレカラアナタトヒロシサンノ、大セツノグンカン二ソウトクチクカン一ソウヲ、ワザワザオクツテイタダキマシテ、マコトニアリガタウゴザイマス、コノツギノケツセンニハ、コノオフネモツレ

テ、センジョウニムカヒ、テキヲミンナシヅメタイト、オモツテヲリマス、
モウ新年ニナリ、アナタモ弟サンモ、一ツトシヲトラレ、オメデタウゴザイマス、ダンダン、サム
クナリマスカラ、カゼヲヒカナイヨウニシテ、ベンキョウシテクダサイ、
ゴキゲンヨウ、サヨウナラ、

昭和　年　月　日　　山本五十六

ヨコヲヤスコサマ

その後、博君から、ソロモン海戰の繪をかいて元帥に送ると元帥は、早速また禮狀を出してゐるが、その中には前年の軍艦模型のことをいつてゐるのである。

サクネン、オネエサントアナタニ、イタヾキマシタ、ダンカン三セキハ、ソノゴブジデ、ミナフン
センシテヲリマスカラ、アンシンシテクダサイ、

なんといふやさしい心情であらう。まるで文豪の繪本でも見るやうな情理竝び盡した文章である。私はまた、こゝにこの手紙を書くときの元帥の心情を思はずには居られない。それは東郷元帥の默々として寫眞に署名するときの心情、より以上のものゝあることを覺えるのである。私はかやうなる意味に於て更に次の手紙を紹介せずには居られない。それは松本英子といふ私の友人目黒眞澄君の孫娘へのもので、昭和十七年正月二日附のものである。

御手紙ありがたう御座いました、
一寸見たときには松本英子さんとは、さてどなただつたかなあと考へましたが、番地を見てああそうかとうなづきました（ココノイミカリマスカ）
お父さまはもう御歸りになつたのですか、まだですか、御あんじ申上げて居ります
御母さまは御元氣でしようね（中略）
此たびは海軍省へ獻金に行つていただいたそうで、まことに有がたう御ざいました、銅貨を千五百五十枚とは隨分重かつたでしよう、まことにありがたう、かさねて御禮を申しあげます
日本のお正月はいかがですか、まだ東京はこれからお寒くなりますから、かぜなどをひかない樣にして御勉强なさい、私はとても元氣で居ります、外の若い人たちが働いてくれるので、私は居眠りをしたり本を讀んだりして居ります、どうぞ御祖父樣、御祖母さま、夫からお母樣に宜しくと申上げて下さい、ではご機嫌よう、左樣なら、

かやうの手紙が、世界を震憾させた眞珠灣大襲擊の猛將山本元帥の書いたものとは誰が思ふであらう。「私は居眠りしたり、本を讀んだりして居ります」と少女の友達となり切る好々爺の面影、それが元帥の半面なのである。

深刻な人間味

明治四十二年春陽堂から發行の雜誌「新小說」の新年號に、猪股達也といふ新聞記者の筆になつた「世間縱横記」の中に、東郷元帥が、四十一年十二月、伊豆天城山の御獵場に於て、或る瞽女を勞はつたといふ興味深き逸事を傳へてゐる。それはかうだ。

御獵は其の翌日から始まつて三日目になつた、川を渡り部落を通つたりして、湯ヶ島から半里以上も行つたと思つたところに出た。そこは二十軒ばかりある部落であつた。先頭にあつた米田主獵頭は、「こゝらで一服しようではありませんか」と立止つた。一行は思ひ〳〵の石を探して腰を下しながら休息した。前には小さな川が流れてゐた、その川に丸太をたつた一本渡した橋がある。その橋を今しも三味線を肩にした年をとつた瞽女が、長い杖で足許をさぐりながら、危なげな足つきで渡らうとしてゐる、はたで見てゐると氣がはら〳〵する、一歩あやまれば川に落ちるのだ。

「あぶない！」誰もの頭に斯ういふ心配が湧いたが、それだといつて人に先んじて之を介抱してやらうといふ勇氣のある者もない、冷淡にかまへてゐるわけでも無ければ、相手の瞽女が餘りに穢いから遁げてゐるわけでも無い、お歴々の前に出過ぎた行爲に出るのを遠慮してゐるのである。

その時瞽女の困つてゐる狀をぢつと見てゐた東郷元帥は、起ち上つてつか〳〵と瞽女のところに行つたと思ふと「あぶない〳〵俺が渡してやらう」といひながら、垢で眞黑になつた瞽女の穢い手を引いて懇切に渡してやつた。この不意の出來事に、一行はいささか面喰つた。だが一世の名譽を擔うてゐる元帥と瞽女！　その對照が面白いのと、二人の恰好が可笑かつたので、一行は思はず手をたゝいた。「よく似合ました」中には斯うした失禮な半疊を入れる不屈者もあつた。瞽女は此の深切者が東郷元帥であるとは夢にも知らう筈が無い「どうも有難う御座います」と簡單に禮を述べて、次の村の方へとぼ〳〵と去つた。元帥は、その影が見えなくなるまで見送つて、何ごとも云はなかつた。

物に感じ易い私は、東郷元帥の斯うした優しい行爲に對し、すつかり感激してしまつた、そして人類愛はこゝにあるのだと思つた。

この記者は、これより前、ロジエストウエンスキー提督の兇報に對する感想を叩かんとして元帥邸を訪うて拒絶せられ、元帥に極めて不快の感情を抱いてゐたのであつたが、この瞽女を勞はつた光景に感激して、石佛のやうに沈默をつゞけながら、とある石の上に腰を下してゐる元帥のところへ行つて、前日の一件を概略話してから、

その時は全くあなたを恨む許りか、血も涙もないわからずやと思ひました、ところが只今の瞽女を助けた溫情溢るゝばかりのあなたの御厚意をまのあたり見まして、あなたにも深刻な人間味があることを、今始めて會得することが出來ました

といふと、元帥はその記者を潤ひのある眼でぢつと瞶めてゐたが、默つたまゝ手をさしのべて、記者

の手を確かと握つた。「その手は溫かつた」と猪股はつけ加へてゐた。

かやうのところにも、東郷元帥の面目が能く現はれてゐる。元帥はもとより無情漢でも、冷血漢でもない。誠に溫い感情の持ち主であつたのだ。だが、衆人の前で、最高の勳位の地に居る元帥が、垢にまみれた盲女の手をとつて一本橋を渡してやるなどいふ行爲は並みの人には出來ない。徹底した人でなければ出來ない行動である。だが、私はそこに山本元帥が居れば、同じやうに亦平然としてこの盲女の手をとつて橋を渡してやつたであらうと信じて疑はないものである。山本元帥もかやうな深刻な人間味を有する人間であつたのである。元帥が聯合艦隊司令長官として舊師を旗艦に迎へて歡待したのもこの人間味からである。

元帥が、中學時代の友人金子頼治君に示した友情などもその一つである。大正十四年、金子君が重病で入院した。爾後五箇年の窮迫生活に於て、元帥はいかにこの舊友に溫情を示したか、級友目黒君が友人間に奔走して義金を度々募つたときに、その都度見舞金を送つて溫かい同情を示してゐたのは元帥であつた。その頃の手紙に、

金子禿翁天壽あり、輕快退院のよし、何卒再擧の機を得せしめ度念願罷在候

と、退院を喜び、衷心からその再擧を冀つてゐた。金子君が、病癒え、後藤合金株式會社に就職したときに、元帥はどんなにこれを喜んだことであらう。元帥は太平洋上の風雲急を告ぐる十六年の夏、就職を世話した野澤一郎氏は未知の人ながら厚き感謝の意を表し、自作和歌「人の世に立たむ敎はあまたあれど誠一つの外なかりけり」といふを墨痕鮮かに認めて送呈した。

さて、かやうのことを考へると、兩元帥には人間として共通した點の多かつたことを思はずに居れない。

尙ほ兩元帥とも懇請されて能く揮毫した。これに就いて二三のことを語らう。東郷元帥は晩年、特別の關係あるものゝ外一切應じなかつた。たゞ、一人特別の人があつた。それは元帥と同郷竹馬の友で、勳功第一の重臣となつても、その交友は變らなかつた。この人が訪問すると、必ず數葉の揮毫を請ふを例とし、元帥も亦快く承諾してゐた。或るとき揮毫の際、元帥は「貴方はいつも澤山書かせるが、一體誰れのナ」と問ふと、その人は言下に「私のごはす」と答へた「すべてナ」「はゝ」「如是(にぜん)澤山如何するナ」そのとき、その人は、平然と「賣り申すが」元帥は微笑して「さうなア」とそのまゝ四五枚に筆を走らせた。

山本元帥も能く郷土の人、舊友などに請はるゝまゝに揮毫してやつた。或るとき、金子頼治君が揮毫を賴まうと、次官邸に訪問すると先客が三人ばかりあつて語りあつてゐた。金子が見えると、「何か用事かね」との尋ねに、彼は揮毫のことを語り出すと、元帥は無愛相に「俺は近頃揮毫は一切しないことにした」といふので、金子もあきらめて歸らうとすると、「君には、少し用があるから待つて

くれたまへ」と、やがて先客が歸ると、金子に、

『さつきは人がゐたから あんなことをいつたのだ、あの人達にも書かせられるとたまらないからね、君には特別だ』

と、翌日早速立派な揮毫を贈り屆けてくれた。これには金子もすつかり感激したのである。

目黒眞澄君なども元帥の揮毫を煩はした一人であるが、嘗て布哇のヒロ市の越友會の互助資金として、また鄕土廣瀨村の雪害救助金として元帥の揮毫を請うたことを語つた書翰の一節を紹介しよう。宛名は北越新報記者西方稻吉君、昭和十七年一月のことである。

大正十三年秋、小生はハワイ島ヒロ市に約二週間滯在中、當地在住の新潟縣人諸君が縣人會を組織せられ候節、「越友會」の稱を呈して同地を去り候、其の後會員は月々若干金の醵出を以て資金をつくり、會員の逆境又は不幸に際して互助の方法を立て來り候うち、或る年多數の被救助者を出したるため、資金の涸渴を來し、新に基本調達の方法として、故鈴木莊六大將と當時中將の山本閣下とに揮毫を請ひ受けたしとありて、小生に其の斡旋を求め來り候、鈴木大將には旅行其他にて面會の期を逸し候へども、山本中將は言下に之を快諾し、日ならずして二十枚の半折を送り越し候、小生其の裏打ちをさせ、幸便に托してヒロ市越友會幹事に屆けてもらひ候ところ會員の喜びは非常なることなりし由……

四、五年前、越後の山村が雪害になやまされたること有之候「在京廣瀨村人會」と申す團體有之、（北魚廣瀨鄕出身の在京者の組織するもの）何とかして鄕里山村の雪害見舞金を調達せんと思ひ立ち、又しても山本閣下に御願ひしてとの切望をもたらし候、如何に山本君が忙中の小閑に乘じて揮毫の勞を吝まぬと申してもあまりのこととて遠慮し候も、村人會の熱心なる申出遂にもだし難く、又々山本閣下に持ち込み候ところ、又々快く承諾し、幾許もなくして會員の手に渡すこととなり、其の御蔭を以て村方への見舞のみならず、若干の不幸家族まで救濟しやるだけの資を得、村人會員一同今以て山本閣下の恩を深謝致し居る次第に御座候

目黒君はこの外廣瀨村の五ヶ所の國民學校のために、元帥の畫箋紙全大の大染筆一枚づゝを寄贈してゐる。これも元帥の舊友に、或は海外同胞に、或は地方敎育の振興に對する溫情と熱意のあらはれに外ならないのである。

部下、使用人への溫情

東鄕元帥は日常生活に些細のことを以て、他人を煩はすことがない、必ず自分で處理するを常とした。來客などと對談中でも、自分で立つて行つて入用なものを持つて來られる。執事や女中などを呼ばれることは、殆んど絕無といつてもよい。これは若い頃から一貫した元帥の信條らしい。女中や書生に小用事を命じられることは殆んど無い。身のまはりのことから、煙草盆の出し入れに至るまで、

一切を自分の手ですまされてゐたと傳へられてゐる。

山本元帥も同樣であつたらしい。元帥の次官時代海軍省副官として元帥に親近してゐた松永大佐は、『元帥の次官中、私は夜遲くなつて官邸に參ることも珍しくなかつた。しかし、夜十時過ぎて行くと、取次から、案内、御茶の用意まで悉く御自分で辨ぜられるには恐縮した。元帥は十時過ぎると家族も、使用人も決して使用されなかつた』と、元師の日常を語つてゐた。

元帥は使用人の面倒を能く見たものだ。嘗て元帥の自動車の運轉手が飲酒が原因で、交通事故を起し、罷めさせられたことがある。元帥は正規の處分が一應片附くまでは、時々處理の經過を聞かれるだけであつたが、愈〻免職と決すると、自から色々と手を廻はして、その男の就職を世話された。その當時よくもこれ程御世話が届くものだと感心したとは、松永大佐の思ひ出話である。

かやうの話を書き出すと限りがないが、元帥の御通夜の晩に親しく聽いた某參謀官の話を一つ紹介しよう。

聯合艦隊司令長官として臺灣地方航行中、風波が烈しくて豫定の港に這入れず、某港に碇泊したことがある。こゝは港だけで市街もないので、將校等は上陸もしないで艦内にごろごろしてゐた。その參謀官が、元帥もをられるところで、「こんなところに入つて全くつまらないな、我々は土產物一つ買ふことも出來やしない」と歎息すると、元帥は

『土產といつて、何が買ひたいのか』

との問、

『臺灣のことですから、蛇皮の草履くらいのものですね』

との答、元帥は、

『さうか、一たい誰への土產にするつもりなのか』

『うちの家内の土產にしたいのです』

『家内にやるのか、平凡だな』

と、傍らにゐた將校等もどつと笑つた。話はそれきりであつたが、その夜、遲くなつて、その參謀官の寢室のドアを叩くものがある、あけて見るとそれが長官だ。長官が寢室に來るなどといふことはないことだ、さては何か起つたかと、

『何か御用ですか』

と尋ねると、元帥は微笑して、

『これをやらう』

と、なにか新聞紙に包んだものをなげ出して、サッサと歸られた。參謀官は何かと思つて、包を解くと、それはなんと立派な蛇皮の草履ぢやないか。彼はつく〴〵感動したのである。彼は、

『元帥はかうした細心な能く氣の屆く、それで思ひやりの深い方でした、私が歸つてその話をして、その草履を妻にやると、妻は、ほんとうに感泣して歎びました』

と語つてゐた。この話を傍で聽いてゐた他の參謀官は、私にも同じやうの思ひ出話があるといつて、或る港に寄港したとき、私に「家へ土產にすれ」と、革のハンドバックをくだされたことがあつたと述懷してゐた。かういふ溫たかい人情に浴したものは、それ等の人たちだけではなかつたのである。

一二　聖將として相通ずるもの

命名に見る共通の理念

兩元帥には、往々能くもかやうに類似するかと思ふ程に共通の理念を見ることがある。これ等は人間として共通するといふ外に、皇國聖將として共通するものがあるからであらう。極めて些事ながら、次のことを傳へよう。

昭和十七年十月、山本元帥の姉高橋嘉壽子の孫が誕生する直前のこと、嘉壽子は、武勳赫々たる弟元帥にその命名を依賴した。これに對し、元帥は子供の命名は親がするのが至當であるとの意を告ぐると共に、參考意見として『誠』と『眞』の二字を選び、その理由を告げてゐる。その手紙には、

さて十一月上旬にはお芽出度御趣にて、小生に名前選擇の御依賴有之候處、手許に四書五經等も無之、根據ある字句等難申上、且つ子供の一番敬愛し、且偉人と信ずるは、君に次で親たるべく、たらざるべからざる儀と信じ候へば、矢張り御兩親に於て御相談、御決定可然哉に愚考致居候、小生としては人生の窮極は眞たるべく、之に達するは、誠あるのみと存じ、此二字を中心とせる字句は、特に尊重すべきものかと被存候、爲御參考

とある、元帥の盛名を以てして、尙ほ命名を辭し、たゞ參考として誠と眞の二字を擧げ、その意義を說くところ、元帥の人生觀が思はるゝのである。

明治三十九年小笠原長生子の第三女が出生したとき、小笠原子は平素崇拜する東郷元帥を訪ひ、その命名を請うた。元帥は、しばらく打ち案んじたが、やがて、信子の名を選び、その理由を告げた。

『信子と命名しよう、信卽ち信は最も大切なもので、古人がこれを五常の結末に置いたのは深重な意味あることと思ふ、忠にせよ、孝にせよ、これを貫かなければ信に叶ひがたからう』

私は、兩元帥が命名に當つて感じられることの相等しいもののあることを知つて、深く敎へられることのあるを覺えたのである。

恐怖を知らぬ人

名將として勇氣が勝れてゐた、豪膽であつたといふごときは、これ亦當然なことであらうが、東郷、山本兩元帥もこの點に於て遜色がなかつたことが思はるゝのである。

山本元帥が事に臨んで滿身これ膽といふ勇氣の人であつたことは著名のことで、怖ろしいといふことを知らぬ人であつたといはるゝ。米内大將が海軍大臣のとき、或る人に次官の山本の人となりを語り、

『山本はね、怖いといふことを知らない人だよ』といつてゐたといふが、その著『常在戰場』の中には、次の意味のことを語つてゐる。

故山本元帥は逞しき膽つ玉の持主であり、殆ど恐怖心なしと申してもよいほどであつた。從つて事に臨みては、常に從容として微動だにしなかつた。かやうなことは平常の修養の然らしむるところであらうが、一面から見れば、先天的な所があつたのではないかと思はれる。普通の人は自動車に乘つて七十粁から八十粁の速度では平氣でゐるが、百粁となると恐怖心を起す。また船では二十四ノット以上は氣味が惡い。噴火口などでは一メートル近くまでは進み得るが、突端に臨むと、殆ど手足が固くなり、恐怖心を起す。軍艦のマスト登りなども、初めは手や足が固くなつて恐怖心が起るのが普通であるが、故元帥にあつてはかゝる恐怖感はなく、マスト登りなど、多年熟練した水兵などと少しも變りなく平氣で登つて居つた。

元帥はこの天性の勇氣を以て、二十二歳で、日本海海戰に臨んで重傷を負つた。元帥は昭和十年五月海軍記念日に母校長岡中學校でその思ひ出を語つた。それには當時の心境が能く現はれてゐるばかりでなく、いかに元帥が勇敢な若武者であつたかゞ思はれるから、こゝに紹介しよう。その中には、また當時の東郷元帥及び三須中將の武勇談も語られてある。

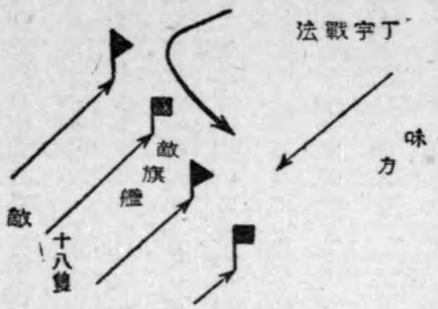
少尉候補生の元帥が敵艦見ゆの警電を得たのは、五月二十七日午前五時五分であつた。元帥はかう語つてゐる。

『私は長官室の前の釣床の中で、ぐう〳〵眠つて居た、大急ぎで顏を洗ひ、すつかり著物を著更へた。これは武士の最後の嗜みで、汚れた垢の附いた褌や、穢い著物は武士の恥である、著物が新しく、いつどこを見られても恥かしくないのが、日本武士のたしなみである。

午前十一時には中食をとり、敵に出會ふのは午後の一時頃の豫定であつた。酒保も開いて、戰前だから酒は飲ませないが、菓子をすつかり喰はせた。腹一杯で、戰鬪の準備もすつかり出來た。私が甲板士官をして居たから音頭を取つて軍歌をやつた。午前十一時四十五分頃になつて、一旦休息する爲に解散し、艦内はすつかり準備が出來た。いつ敵が現れてもよい。それで艦内を廻つて見ると、方々に水兵達が大砲の彈を枕にして、ぐう〳〵眠つて居る者が在る。もう直ぐそこに現れてゐる敵を目の前にしてぐう〳〵と眠ることが出來る、自分は我が海軍は屹度勝つに違ひないと考へた。

私は艦長傳令といふ役で、日進の一番上にゐた。一番高いところで戰を見物するのだから、見物席としては一等席である。艦長の側でいろいろの計算をしてゐた。所が一時過になつても敵が來な

い、當日は濛氣があつて、海上は一萬五千米乃至一萬米位しか見えなかつた、それで敵を發見するのが大變遲れた。一時四十五分には敵を南西より少しく南の方に見た、三笠が發見したのは一萬三千米位の距離であつた。そこで向ふはかう云ふ恰好でやつて來る、こんな恰好ではどつちを向ひても、戰は出來るものではない、敵の一番强いのが、兩方に圖のやうに竝んで來た、そして、この邊に來て、その距離正に八千米、當時の主砲の十二吋砲としては、極めて良好なる戰鬪開始の距離である。こゝで三笠の聯合艦隊の長官は、打方始めの號令をかけるかと思つてゐたところが、とんでもない號令をかけられた。それは右手をかういふ風に左に振られた、そこで三笠の艦長は取舵一ぱいの號令をかけた。それで艦首はぎゆーと曲つた、敵は驚いたが、得たり賢しと許りどん〳〵撃つた、こゝへ撃つたら間違ひないとばかりに撃つた。約五六分の後には、日進は第一戰隊の六番艦であるから、水煙の中を走つた、私は水煙を二回被つただけで、身體には損害を受けなかつた。三笠は相當やられた、その他も相當損害を被つた、日本の艦隊の損害の方が多かつたに違ひない。しかし、これが捨身の戰法



でこの地獄の一丁目を通り越して、こゝに極樂が開けるのである。敵はうつかり眞直に進んで、反對に攻撃を受けて撃ち込まれ始めた。

これが東郷長官がかねて研究して居られた丁字の戰法を應用せられたのであつた、どつちからも撃てないやうにしてしまふといふ戰法である。敵前八千メートルで有効彈がどんどん來る中で突然やられた、これが三笠がこの戰に非常な損害を被つたと同時に、この海戰に一大勝利を得た原因であらうと敬服してゐるのである。これから後、我が主力艦隊は全力を擧げて、敵の戰鬪艦スワロフ・オスラビヤの兩艦に猛火を浴びせかけた。オスラビヤは戰線外に出で、敵の長官旗艦スワロフも列外に出で、非常の混亂を來した、未だ兵術眼なき我々の眼にも勝敗は歴々と分つた、それは戰鬪開始後僅かに三十分である。

日本軍必勝の算は解つてゐた、これはこの非常なる英斷を以て、とんでもない號令をかけられたのにあるのである。そこで敵は非常なる損害を受け、混亂に陷つたために、得たりかしこしと日進が先頭になつて壓迫攻撃した。このとき彈丸がどん〳〵來たので、三笠は隨分苦戰した、東郷長官は三笠の艦橋に居られた、それより下の艦橋に居た松井參謀は卽死した。

夕方の五時頃には、敵の船は火災を起した。敵の主力が五隻位一所になつて居ただけで敵の司令長官の旗艦が沈んでしまつた。東郷長官は驅逐隊、水雷部隊は今や全力を擧げて敵の撃滅を計れと命

じた。艦隊は日沒を待つて北上して鬱陵島を目指して進んで行く事にした。戰正に終らんとした時、敵の一彈が轟然として日進の前部砲塔に爆發した、命中彈が非常の音をたてゝ炸裂し眞赤な火をぱつと吐いた。同時にグラース・カップを首にかけて立つてゐた私の眼の前がくわつとしたと思ふと、鉛筆を持つてゐた指をはね飛ばして、左手の指が二本びりつと旨く折れて、皮だけ附いて心が折れてゐた。人間の指なんか折れた許りの色は、赤いものだと思つてゐたが、白いやうな美味さうな色をして居る、大して痛いことはない、別に虛勢でなかつた、ベースボールのバットで少し强く撲たれた樣な鈍痛を感じた以外何ともなかつた。手が動かなくなつたばかりである。私の下の艦橋に居つた信號兵以下七、八名が斃れたのであるが、大砲彈が飛んで來て私は飛び上つた。外の人は私の足を見て、「あつ、高野候補生がやられたな」といつた。それで自分はやられたと思つた。ズボンを見たら、すーつと裂けて居た、靴は何ともない、踏んで見たけれども痛くない、骨をやられると痛くて立つて居られないと聞いてゐたので「占めた、皮だけやられたんだ」と思つて、戰鬪を續けようとした。ところが記事板をなくしてゐた、それに氣が附いたのは甲板から下されようとしたときであつた。そのときは指がなくなつたことだけしか頭になかつた。詰らぬところで斃れた、血止めをしろといふので、繃帶で縛つて貰つた、丁度豆腐を捲く簀卷のやうなもので簀卷にされて、とにかく一旦下された。そのとき始めて、戰鬪記事を書いて居つたのを思ひ出して、「あの板を探してくれ」といつたが、後で見たに形だけであつた。

こんなことではまだいかんと思つた。この次に怪我をしたならこんなことはないつもりです、然るにその後不幸にして、いや幸にして怪我をしたことがない。とにかく、それ位の怪我をしても、痛いことはないといふことをよく傳へて置きます。脚の傷は六吋の三吋位を殺がれた、が、それは始めから終りまで痛くなかつた。指の方は痛かつた。しかし、これ位の怪我では斃れるものではないと思つてゐた。大抵怪我をして靑くなつて斃れるのはこれは大變だと思つて斃れるのだ。

先づそれで大體、その日の戰鬪が濟んだ、私が簀卷にされた後、打方止めの號令がかかつた。』

以上は日本海海戰に於ける元帥の負傷狀況の實話である。元帥は當時を顧みて自から遺憾とするところがあつたらしいが、二十二歲の初陣としては無理もなからう。淡々たる談話の中にも、彼が若武者らしい心意氣と剛勇の天禀とが能くあらはれてゐる。

東鄕元帥が、この海戰に於ける沈毅剛勇のさまはまた格別であつた。旣に「皇國の興廢此の一戰にあり、各員一層奮勵努力せよ」との信號は揭げられた。彼我の血戰は將に開始せられんとしてゐる。秋山參謀は從來の戰況に徵し、長官の身を氣遣つた、

『閣下、何卒司令塔內にお這入り下さい』

『否こゝで可い』

長官は肯かない、永田副官も、加藤參謀長も勸めた、しかし長官は肯かない。

『東郷は老人じや、貴方がたこそ御奉公の前途が長いお這入りなさい』

果して開戰となるや、旗艦三笠は、最も敵の狙ふところとなつた。右舷側に四十個、左舷側に八箇の彈痕を留め、死傷合して百十三名の多きに達し、十八門の備砲中、完全なりしは僅に六吋砲五門に過ぎなかつた程の激戰を演じた。午後二時二十分に飛來した第十六回目の命中彈は右舷の鐵板を貫き內壁に中つて爆裂し、無數の破片は四方に迸つて前艦橋にも霰のごとくに注ぎ、そこに屬合せた將兵十五名を傷つけたのみか、司令塔內にあつた將兵四名も同じ運命に陷つた。このとき東郷元帥は原基羅針儀の側に立ち、雙眼鏡にて戰勢に見入つてゐた。そこへ拳大の一彈片が下より斜に艦橋を貫き、大將の胸を望んで飛來つた。ヤツー、思はず一齊に叫びをあげた幕僚等は色を失つてキッと見ると、元帥は依然として小搖ぎもしない。その脚下には七分まで彈片に貫かれた釣床一箇横たはつて居るではないか。風は怒り、波は逆卷き、艦上血の飛沫を散らす中に、自若として立てる元帥の雄姿は威風四邊を拂つて神々しい許りであつた。

『東郷長官の身體には神經系が存在しない』

とは、幕僚の歎息であつた。東郷元帥はかやうなる剛勇の猛將であつたのである。

兩元帥はかやうの人であつた。一は恐怖を知らぬ人といはれ、一は神經系の存在しない人といはれた。私はこゝに兩元帥の名將たる資質の一を見出すのである。

一三　山本元帥の武勇觀

——戰場の勇、日常生活の勇——

山本元帥の武勇を語つた序でを以て、元帥の武勇觀を尋ねて見たい。元帥の貴ぶ武勇とはいかなる精神、行動をいつたのであらうか。元帥は日本海々戰に於ける東郷司令長官と三須司令官の行動を語り、部下の言を斥けて艦橋に露出した東郷、部下の言に從ひ默々と司令塔に入つた三須共に剛勇の將であると稱した。元帥の武勇觀が知らるゝのでこゝにこれを紹介しよう。前記談話の次に、更に次のやうに語つてゐた。

『こゝで一言いはねばならぬのは、東郷長官は終始上甲板に居られ、第一戰隊の三須中將は終始司令塔の中に入つて居られた、これは非常なる勇氣を持つて居られたからである。東郷長官は「司令塔へお入り下さい」といつても、良いとも惡いともいはれず、默つて最上艦橋に立つて居られた。左手には一文字吉房の名刀を、右手には最新式の雙眼鏡を持つて居られた。長官は丁字の戰法をやらなければならなかつたから這入らないのである。

三須中將は、參謀等が、自分達が上に居りますから、どうぞ司令塔にお入り下さいといつたら、默

つて入いられた。私はこの態度は眞に大勇ある將軍だと思つた。餘程の信念を持つて居られるのでなく、邪念のある人なら默つて入いれるものではない。若しも司令長官がやられたら誰が艦隊を指揮するか、それは第一司令官でなければならない、それで三須中將は默つて入いられたのである。しかし、敵の長官が司令塔で怪我した。三須中將も矢張り一寸した隙間から砲彈の破片が飛んで來て片眼をつぶされた、司令塔は厚さ一尺以上の壁に圍まれ、これは非常に頑丈さうである、しかもその中の三人は重傷を負つた。上甲板では私が一人怪我をしただけで、後の八人は誰も怪我しなかつた、どこで怪我するかは全く天運で、それを考へるだけ餘計のことである』

元帥の武勇觀、死生觀は、かくのごときものであつた。元帥はこの精神を以て、今次の戰爭に臨んだのである。

尙ほ、その武勇觀の一二を紹介しよう。これは戰爭に於ける元帥でなく、平時に於ける心構へとも見らるゝのである。元帥は、嘗て、長岡中學讀本編纂の需めに應じ、叔父野村貞少將のことを鈴木貫太郎大將に聽き、これを「野村將軍を聽く」と題して寄せてゐる。それには「野村將軍の事蹟に關しては、尙ほ詳細を知悉せらるゝ先輩なしとせず、而も余が鈴木大將に懇願する處ありしは、特に大將の人格を通じて野村將軍を聽かんと希ひしに因るのみ」といつてゐたごとく、元帥は野村將軍を尊敬せしがごとく、亦鈴木大將を尊敬してゐたのである。何故に尊敬してゐたか。元帥はかう書いてゐる。

鈴木大將が、野村將軍の性格を「剛毅磊落親しみ易く忸れ難し」と言はれし處に無限の味あるを感ず。

鈴木大將は溫厚慈愛の人格者なるも、其の胸中烈々たる忠誠の赤心と剛勇不撓の膽力とを有せらるゝ余の最も尊敬せる先輩なり。見よ、二・二六事件凶徒の襲擊に會ふや、かねて用意の銘刀をさぐつて得ず、遁逃のそしりを得んは武士の恥辱なりとて、徒手凶徒等の面前に立ち、彼等が問答無用と呼ぶや、「然らば擊て」と堂々屹立して、其の數彈に倒れられたる態度の如何に悲壯にして美事なりしかを。而も皇天此の至誠剛勇の忠臣を捨てず、凶彈或は頭を射、肺を貫きつゝも、起死回生再び君側常侍の重職に奉仕せらるゝを見るに至れり、すなはち茲に圖らずも野村將軍につき、其の事蹟を伺ふことを得たり、眞にこれ命なる哉。

鈴木大將は、このときのことをかういつてゐる。

『元帥は嘗て昭和十一年六月某日余を侍從長官舍に訪ひ、問ふに野村貞將軍の事を以てす、將軍は余が少尉候補生として練習航海の時の筑波艦長にして、元帥の鄕黨先輩、而も其近親なり、余卽ち具さに將軍の人格擧動及敎訓等を述べ、其中の一節として「野村艦長は剛毅磊落小事に拘泥せず、時に大喝部下を震駭せしむることあるも、常には極めて寬容溫情の方で、親しみ易く忸れ難き大人物の樣に思はれたり」と告げたるに、元帥は深く感動したる者の如し』

元帥の深く感動したことは、その自から書いてゐるごとくである。また多年元帥に親炙してゐた三和大佐はまた次の逸話を傳へてゐる。それは昭和二年二月から三年春まで米國駐在武官中のことである。

『在米一年の間に、私は一度大變叱られた事があつた。(自分は叱られたと思つて居る)それは忘れもせぬ、アノ三保ヶ關事件の直後であつた、神通艦長水城大佐はあと始末の後に、責を負うて立派に自決されたのであるが、其の事に就て、私は「死んでも仕方があるまい、生きて償ひをつける樣な働きをされた方が善かつたのではないか」と言ふ意味の事を言つたら、武官は「何ッ」と言はれて、私の方を見られ、(睨み据ゑられたと言ふ樣な氣がした)

死を以て責に任ずると言ふ事は、我が武士道の根本である、其考へが腹の底にあればこそ、人の長としても御勤めが出來る、さう言ふ人が艦長に居ればこそ日本海軍は大磐石なのだ。水城大佐の自決は立派とも言へるし、自分としては當然のことをやつたとも考へて居る。君の樣な唯物的の考へは今時流行るのかも知れぬが、それでは帝國海軍の軍人としてまさかの時に役に立たぬゾ。又、死を以て責をとつた人に對しては、例へ其の所業が惡と見えても、輕々しく批評してはいかぬ。

と辭色を勵まして言はれた。私は自分の頭が唯物的であるか、唯心的であるかも氣がつかぬ位であつたが、とに角その考へが眞向から粉碎されて腹の底迄ジーンと寒くなるのを感じた、その恐ろしかつた眼は今でも思ひ出せる』

かやうに元帥の自ら語つた言葉、その尊敬した人の言葉、親炙した人の言葉などで考へると、元帥の最も尊び、自ら行はんとした勇氣、武勇のいかなるものであるかゞ思はれるのである。ナポレオンは「一人にして偉大なる軍將たるに必要なる總ての資質を兼備する者は極めて稀なり、最も望ましきところは知識才能が品性膽勇と均衡を得る事にして、斯の如き者は能く名を成すの士なり」といつてゐたといふが、元帥の冀ふ膽勇は、知識才能と品性とが均衡を得てゐた膽勇たることであつた。長岡藩が藩風としたといふ仁義の大將、義勇の侍がそれであつたのである。元帥は開戰直前に、我々との會合の席上で、米國軍人のことを語り、何某の勇氣は絶倫であつたが品性が缺け素行が修まらなかつた、あんな奴は仕方がない、と語つてゐたことを私は思ひ出す。

さて、かやうなる元帥の武勇觀から思ひ出さるゝことは、武勇とは必ずしも戰陣のことばかりでない。日常生活に於ても尊ばねばならぬ、人に勝つ前に、己に克つ、それが眞の武勇であるといふことである。而して元帥はかやうの人であつた。井上成美中將は、元帥を語つて、

『元帥は決して誘惑に乘らないし、輿論、風潮に惑はず、世評の如きは勿論問題にせず、自己の思ふところを判然と言明せられ、一路所信に邁進せられる、何事にも必ず自分で、自分の答へを持つ

てゐたから、他人の答へに引づられることがなかつた。それは頭腦の良さもあるが、私心がなく、名譽慾も、出世慾もなく正當なる判斷が出來たからである。元帥は意志の鞏固な人であつた、信念に邁進しては百萬の敵も恐れぬが、又身を持するにも意志の極めて强い人である。元帥は煙草が大變御好きで次官時代迄は隨分煙草を喫はれ、葉卷も大好物で良く喫はれたが、丁度支那事變中、最初の煙草の値上げの時、ぴつたり煙草を廢められた。當時私共に對し、「俺は一生煙草を廢めるのではない、蔣介石が參るまでは喫はない」と言つて居られた』

元帥はかやうの人であつた。日常生活に於ても勇者であつた。自己に克つの勇者であつたのである。井上中將のいふごとく私心私慾がない彼は、聰明にして情實によつて事の處理判斷を誤まることがなかつたのである。元帥は理の人といふよりも情の人といはるゝ程溫情の持ち主であつたが、しかも情のために正しさを失ふ人ではなかつたのである。鈴木大將が野村將軍を評して「極めて寬容溫情の方で、親しみ易く忸れ難き大人物のやうに思はれたり」といふ語に元帥は深く感動したものゝごとし、といつてゐたのは、とりも直さず元帥自身がさうであつたからであらう。

かやうな日常生活の勇者たるに就いて思ひ起すことは、やはり東郷元帥の語である。元帥は嘗て世に處するの道は何であるかと問はれて、

『それは正しいことを踏み行つて世に盡すことぢや、事柄は簡單であるが、なかなかむづかしいことでさうして最も大事なことだ、これさへ皆んなが踏み行つて居れば決して間違ひはない。卽ち惡いことでも情にほだされたりして、それは惡いと言ひ得なかつたり、又平素憎んで居つた人のことは、それが例へ正しい善いことでも惡く言つたりするやうではいかぬ。人を忌み妬むといふことが往々あるが、これは宜くないことだ、日頃自分の厭な人のことは、それが例へ正しいことでも惡いとし、又惡意にしてゐて何時も自分に同意をするやうな人のことは惡いことでも惡いと言ひ切らないやうなことでは駄目だ。憎い人でもその正しいことは賞せねばならぬ、これを賞せられないやうではいかぬ』

と敎へたことがある。而して東郷元帥がこれを實行した人であつたごとく、山本元帥も亦これを實行した人であつたのである。またこの敎へは長岡藩の重要敎訓の一つであつたのである。藩祖忠成の制定した「侍之恥辱十七ヶ條」の中に、

被官之者成敗すべきを成敗せざる事、
仕合よき人をば惡きも譽め、仕合あしき人をばよき人もそしりあなづる事

とあるのは東郷元帥のいふ意であらう。たゞ山本元帥はこの敎へを實行するに於ても極めて寬容で、同情と涙とを常に失はなかつたことであらう。前に述べた元帥の使用した運轉手の酒癖のためにしくじつたときの處置などはこの好例であらう。多年元帥に親炙し、事を共にした某中將は、

『故元帥は至誠の前には何物をも恐れざりき、御互ひに顧みるとき蔭に於ては相當偉ら相な口を利くも、一身の利害關係或は榮達の爲には別人の如く豹變、御都合主義に流るゝ世間滔々たる幾多の實例に接する世間に、故元帥は正しいと考へ、御國の爲、海軍の爲と考へられし事は隨分思ひ切つた言葉を洩される場面に接した（今日は差し障りあれば書けない）。當時少壯にして、可成りやんちやな自分としても內心少からず冷や冷やし、正義の爲には一身の利鈍眼中になしともいふべき生きた海軍軍人實在せりと感じた。これは故元帥の高邁なる人格にして始めて成し得たことである』といつてゐた。元帥が次官時代、外交問題で一部の誤解を招いたのもかかるところにあつたのであらう。元帥は常に正を正とし、邪を邪として憚らない人であつたので、その勇は決して戰場のそれのみでなかつたのである。

一四　東郷戰法の最大なる實行者

東郷元帥が明治三十八年五月、日本海海戰に臨まんとするに際し、部下一般に戰鬪實施の覺悟を懇諭した中に、

已に合戰するに當りては、また防禦をいふの要なし、積極の攻擊は最良の防禦なり、假令非裝甲艦と雖も、我が猛火を以て敵の砲火を擊壓すれば、これ取りも直さず、最良の裝甲を有するに等し。

我が砲數少き場合に於ても、その照準發射迅速確實なるときは、恰も我が砲數を倍加せるが如し、黃海々戰に見るに、我の三發する間に、彼一發するの比例なりし故に、我が一門は能く彼の三門と對抗するを得べし、況んや我が射擊の練度は、遙に敵に優るあるに於てをや。

といつてゐた。また大正四年十二月、佐藤鐵太郎少將が、海軍大學校長に轉補された際に、東郷元帥は、最良の補短術は勇氣なりといふ意で、次のごとく諭してゐる。

敵の砲力が大きく、我が砲力が小さいからといふて、あながち危惧するには及ばない、我が刀が短くば踏込んで斬れば可い、敵彈は我に達するに我が彈が彼に達しないからとて、敵を避くるは勇が無いのだ、智がないのだ、そんな覺悟では到底勝を制することはできぬ。我が砲彈が敵に屆かねば、屆くところまで進んで敵を猛射すべきだ。

勝敗の觀念は戈を交へざる以前のことで、一旦白刃を交へた以上は、決して勝敗を念としてはならぬ、敗れまいとするものゝ敗るゝは疑ひを容れぬ所である。

かやうな精神を以て、我が短を補つて敵を壓倒する、卽ち質を以て量を破るといふのが、東郷元帥の戰法であつた。元帥はこれを以て日露役に大勝し、海軍の傳統的戰法を確立したが、これを最も能く實現したのが、今次戰爭に於ける山本元帥の作戰であつたのである。元帥は少壯時から、かやうの精神であつた。その中學時代から劍道を學び、相當に達してゐたが、好んで短かい、重い竹刀を選び、

いつも踏み込みの氣魄を以て相手を壓倒した。竹刀が長いと竹刀に依頼する氣があつて、眞の氣魄が出ないからといつてゐた。

元帥はこの精神を以て、海軍航空戰士の養成に當つたが、この戰法によつて飛行機の體當り戰術を創始し、斷行したのである。これは全く東郷元帥のいふ非裝甲艦と雖も、我が猛火を以て敵の砲火を擊壓すれば、これ取りも直さず最良の裝甲を有するに等し、といふの精神であつたのである。

元帥のこの東郷戰法を更に遺憾なく發揮したのは、昭和十七年八月第一次ソロモン海戰に於けるツラギ海峽の敵艦隊に對する夜襲敢行であつた。敵は米濠の聯合艦隊で空母を有する大艦隊である。これに對する我が水上艦隊の勢力は遙かに劣勢であつた。將棋でいはゞ飛車も角もないといふ始末である。この衆を恃む敵を寡兵を以て擊破するのは夜襲敢行の外はないのである。元帥はこのとき、

消極にして未だ劣勢ならざるはなし

とし、この劣勢を補ふは積極的に出る外はないと考へたのである。この決意の下に行はれたのが、昭和十七年八月八日夜のツラギ海峽の夜襲戰であつた。元帥はまたこのとき、直接戰鬪に必要でない可燃物、ガソリンその他の艦隊積載物を悉く海中に投じ、敵彈命中による火災の被害を最少限に止めようとした。決死の裸身の戰法である。某幕僚は、

『素裸に長刀一本をぶちこんで殴り込みに行く男伊達の心意氣だね』

といつてゐた。これは韓信の背水の陣の精神で、死中活を求むるの戰法である。

＊

以上は私の東郷元帥と山本元帥との對照觀である。私は兩元帥が同一性質を有し、同一精神を有した人であるといふのではない。されど、兩元帥は、その表面に現はれたごとく決して異なつた素質の人でなかつた。可なりに類似したところのあつたことを思ふのである。しかし、私のいはんと欲するところはかやうな異同觀ではない。齊しく皇國武人とし、聖將としての緣因するところを尋ねたい、その淵源するところを明かにしたいためであつたのである。

私のいはんと欲するところは、そこにあつた、兩者個性の異同、人物、功業の大小といふがごときはまつたく私の問ふところではないのである。

第七　山本元帥と海軍航空隊

——半生を航空の發達・戰術の完成に捧ぐ——

我が航空機及び航空技術は、總てが歐米からの輸入、模倣であつて、最初の飛翔が彼に比して七年後れてゐた。その初めは飛行機は歐米のものをそのまゝ使用し、操縦技術者を招聘して講習を受くるといふさまであつた。かやうの時代が、相當永く續いたのである。されば、歐米では、我が航空機やその技術のごときは、全く眼中になかつたのである。彼等は猿の人眞似とすら思つてゐなかつた。

だが、支那事變から漸く彼等もめざめた。大東亞戰爭が開始されると、皇軍の航空機はその機體の優秀と操縦技術の卓越とを以て世界を驚倒させた。我が戰鬪機と雷擊機、これを操縦する飛行兵のごとき、世界のいづこにあるであらうか。この航空機及び航空技術今日の發達をもたらし、海戰に於て新たに航空戰なるものを作り、海戰の主力とするの新戰術を創始したものは誰であるか。

それは、もとより一人や二人の力にあらざることはいふまでもなく、日本人の力である。日本人の精神、智能、科學、技術の總てによつて成就されたものである。機體は最初外國から輸入しても、これに日本精神を吹きこみ、純日本的のものとし、世界最强のものとしたのは日本人である。しかし、この精强な日本的航空機及び技術の發達を指導した最も有力なる一人が、山本元帥その人であるといふことに誰も異論がないのである。元帥は我が航空機及び航空技術の育ての親であり、航空戰術の創始者である。

元帥は海軍生活四十三年中に於て、その後半二十年を、直接間接海軍航空關係のことに於て費してゐる。元帥の海軍航空に意を致したことは大正の中期に遡る。

この頃の我が航空機は極めて幼稚で、その操縦技術も不完全であつた。飛行機といへば、航空母艦に搭載する車輪のついた艦載機及び軍艦に積む浮舟附の艦載機だけで、行動距離も漸く二百浬位に過ぎなかつた。その任務も、たゞ艦隊の補助兵力といふのが一般の認識で、艦隊の耳目としての偵察搜索の任務も、艦隊決戰場裡に於ける爆擊雷擊も、一般に補助的に考へられてゐた。しかし既に航空機も飛躍的進歩の趨勢にあつたので、航空機が將來の海軍軍備に於て如何なる地位を占むべきかといふことは識者の深く注意するところであつた。されど多くの人は、依然として戰艦を以て海軍兵力の主力なりとする大艦巨砲主義を持し、航空機は極めて有力なる兵力なれども補助兵力の域を脫し得るものでないとしてゐた。それは宛かも潛水艦が出現したごとく、航空機も亦有力なる對空兵機が出現整備する對潛水艦兵器が發達して潛水艦の威力が減殺したごとく、航空機も亦有力なる對空兵機が出現整備して、その威力發揮は困難となるべしといふのが一般の通論であつた。この考へ方は、我が國だけで

なく、歐米でも變りなかつたのである。

この間にあつて、將來海軍の主力は、航空機にあるとし、帝國海軍として巨額の經費と物資を要する戰艦を建造して米國海軍に對抗することは極めて困難にして不利である。宜しく航空機を整備して對抗するにしかずとは、我が識者の自然に到達する考へであつた。特に大正十年以來軍縮會議により對英米五、五、三或は一〇、一〇、六等の減率が强制され、量の缺を質に於て補ふべしとの見解が勃興するに於て著しく考へられて來たのである。さうして、元帥はそれ等の有力なる唱導者であつたばかりでなく、一身を挺してその實現に當つたのである。元帥は大正八年米國へ留學、同十年海軍大學教官たりし頃から深く意を航空の發達に留め、大學校に於て軍政學を講ずるや、我が國軍備の將來を論じ、航空機對戰艦の攻防問題に及び、將來必勝の軍備は航空機にあることを强く唱導してゐた。

元帥が大正十三年九月海軍大佐として霞ヶ浦海軍航空隊附に補せられ、次いで同航空隊教頭兼副長に補せられ、幾ばくもなく副長兼教頭となつたが、多年の抱負を實現するの機今にありと、これから直接海軍航空隊の發達、操縱者の養成に從事することになつたのである。

この頃の飛行は勘の飛行であつた。帝國海軍航空母艦鳳翔が始めて出來、それが漸く實用の域に入つたが、その著艦は極めて困難で、非常に優秀な、いはゞ天才的技倆を有する搭乘員でなければ不可能とされてゐた。元帥はかやうなる航空隊の現狀を不可とし、努力と訓練によつて誰でも出來るものとせねばならぬといふ主張を持して、その實現につとめた。

『百人の搭乘員中幾人あるか知れぬやうな天才的な人間でなければ著艦出來ないやうな航空母艦は帝國海軍に必要がない。搭乘員の大多數が著艦出來るものでなければならぬ。素質もさることながら、要は訓練方式の改善と訓練努力の如何にあると信ずる。天才よりも努力に依つて鍛練した入神の技術の方が遙かに勝つてゐる、試みに次回の母艦搭乘員には技倆中級のものを充てて見よ』

と主張し、これまで特殊の技倆を有するものでなければ採用しなかつたのを改めさせ、天才や勘よりも鍛練を重んずるやうにしたのである。いつもかやうの際には經驗者の議論が勝を占むるものであるが、元帥が全くの航空無經驗を以てして、有經驗者の主張を排したことは、その熱誠の結果であつた。これから、元帥の猛訓練が始まつたのである。そのため犧牲者が續出したが顧みなかつた。餘りに多き犧牲に、當局者も驚いて、元帥に訓練の手を緩めるやうにと注意したが肯かなかつたといふことがある。このことは、その副長時代かその後のことかはつきりしないが、猛訓練だけは前後一貫して變らなかつたのである。元帥はその當時の苦心を我々に告げたことがある。

『我が海軍航空隊に恃むところは精神と技術の外にない、飛行機の製作に於ては彼に一日の長がある、我々も負けないやうにやらねばならぬが、我々はたゞ、死を賭ること歸するがごとしといふ大和魂を以て平素猛訓練を試むる外はない。人は能く日本人は器用で、操縱が巧妙だから發達が早い

といふが、そんなことは當てにならぬ。米國人は冒險好きで隨分突飛のことをやる、我々はたゞ猛訓練によつて、眞の技術を身につけるより外はない』

かやうの猛訓練を勵む一方には、航空兵に就いてあらゆる注意を拂つた。副長時代には隊内の和樂一致を圖り、部下に就いては個人々々に就いて細密の注意を拂ひ、個人の性狀識量に應じてそれ〴〵指導した。遊び過ぎるもの、身體の强くないものに、適當の注意をした。また嫁を貰ふといふ人には、元帥自からその女性を見にさへ行くこともあつた。また航空將校は三十五歳まで結婚するなといふのは、元帥のいつもいふことであつた。訓練中の將校の結婚談を耳にして、結婚を來年暮まで延ばさないかなどと特に注意することもあつた。これは妻子があると死を厭はぬ眞の訓練が出來ないからといふのであつた。その自から語るところによれば、航空戰隊司令官時代に、中少尉を集め次の訓示をしたことがある。

『青年將校に貴ぶところは、旺盛なる元氣、純眞なる氣魄、汲々たる研究向上心である、これ等の美點あつてこそ艦隊の意氣も亦昂揚する。然るに近來若手將校にして結婚を急ぐ傾向があるではないか、勿論家庭の事情等にて一樣にはいはれないが、特殊の境遇にあらざるものは、尠なくとも高等科學生、大尉の初年頃を終り、所謂一人前になつてから結婚するを適當と考へる。尙ほ一言する、飛行將校、特に戰鬪機操縱者は、その最上上達點たる三十歳までは獨身たることを希望する。予自身は三十五歳にて結婚したが、未だに遲いと悔いたことはない』

これは、元帥が、昭和十五年九月、某將校に與へた書翰にもいふところであるが、司令官時代の頃我々にも「御前方は三十五歳まで結婚するな、俺も三十五歳まで我慢したんだから、御前方も我慢すれといつてゐる」と話をされたことがある。また前記將校に與へた書翰の末尾には、

南昌に敵機を追突し散華せし南郷少佐は、此の時の小生の忠言を實行し、三十二歳まで獨身にて名戰鬪機乘となりし一人也、可惜、

と追記してゐた、元帥は副長時代特に意を航空將校の風紀問題に留め、その刷新に志した。當時の航空將校はとかく酒色に耽るといふ噂が高かつた。かくて、その就任第一の訓令は斷髮令であつた。山本副長は就任卽日、總員を集合した。號令臺の上から

『本職本日より當隊副長兼教頭の職を執る』

と重々しく宣言された。暫く語を絶つて、總員を見まわし、更に、

『下士官にして頭の毛をのばして居る者は皆斷れ、一週間の餘裕を與へる、終り』

と宣告された。たゞ、それだけであつた。當時頭髮をのばすことは飛行將校以外にも一種の流行となつて、搭乘配置のない下士官兵にものばすものが多かつたので、大問題となつて、「禿があるから」とか、「滿期前であるから」とかいつて斷髮の猶豫を請ふものがあつたが一切許さず、完全に勵行し

た。かやうのことが動機となつて、隊員の間に自から清新の氣分が漲つたのである。

副長は、夜分には自から營内外を巡見し、風紀の肅正取締に當つた。當時副長附の三和中尉（現大佐）の語るところによれば、副長就任後二三週間目の夜のことであつた。朝からの雨は眞夜中には氷まじりとなつて降り續いた。寒氣は烈しい、しかし、かやうのときに却て脱營者があるかも知れぬと、三和中尉は夜中の十二時頃、合羽跣足で、兵舎の門外を見廻つた。兵舎裏の自動車庫の横まで行くと二十米許り先に黑い人影が行く、さては脱營者かと、「待てつ」と大喝した。これまでの經驗だと、脱營者ならば止るか逃げるかのいづれかである。然るにその人影は一寸止つて振り向いた樣だつたが、また悠然として歩いてゐる。こやつ不逞なと許り急ぎ足で追ひついて見ると、これはなんと山本副長ではないか、副長は雨合羽に身を固め、長靴を履き、氷雨の降りしきる眞夜中の巡檢である。山本副長は立ち止まつて、三和中尉を振りかへり、

『甲板士官か、御苦勞、君は明日の飛行がある、今夜は僕が見廻るから、早く歸つて寢たまへ』

といひすてゝ、闇の中に消え去つた。三和中尉は感激に身心の戰く感があつた。彼はかう回顧してゐる。

『私は目のあたり神樣を見たやうな奥奮と感激とを覺えた、このときの感激は到底筆紙に盡されぬ、あゝ有り難い、副長は自分で言はれたことを實行してゐる、この人のためならば、喜んで水火の中にも飛びこまれると思つた。私はこの感激を折りに觸れて想起してゐる、さうして一生これを持ち續けて行けることをこの上もなく喜んでゐる。しかし、このやうな感激は大小の差こそあれ、當時山本副長の部下として働いた者は、誰もが持つてゐることと思ふ』

こんな風であつたから、最初就任のときは、とかく反副長的の隊内の空氣は、月餘もたゝぬ中に完全に拂拭され、悉く副長の命のまゝに、指導のまゝに愉快に服務するやうになつた。脱營者は殆どなくなつた、遲刻者は著減した。擧隊の面目は一新した。

元帥は、常に飛行將校の頭は粗笨で困ると誡めた。隊務會報、教務會報、研究會等の席上で、折に觸れて叱正し、或は揶揄し、或は諷示した。或るとき、某分隊長が、「飛行機乘りは高空に行くと生理上頭が粗くなるから止むを得ない」と辯解すると、元帥は語氣を强めて、

『それは事實だ、それなればこそ平素からもつと頭を緻密にし、準備を周到にして置かねばならぬわけになるのだ。さうでなくて、今のまゝでは到底將來の海軍航空を發達させられないぞ』

と深く誡められたことがあつた。元帥は伸び行く帝國海軍航空の前途を案じて、若い將校に眞摯な努力研究を奬勵したのである。元帥の注意は諸般のことに亙り、或るときなどは、「飛行機屋は喋らすれば相當のことをいふが、書かせればなつてゐない、思ふことが思ふやうに書けぬやうでは將來困る」といつて、文書の作製、作文等にまで注意されたことがあつた。

元帥は、また若い飛行學生が、料理屋などで亂暴するものなどがあつても、その責任を自分で引受けて、自から監督不行屆を謝して學生を寛大の處分にとゞめたこともあつた。また、航空隊の下士官兵が、土浦町と喧嘩をし、土浦在住の下士官は町外に轉ずる等、土浦をボイコットするからといつて願出たとき、元帥は下士官のいひ分に理があるとし、町が屈古垂れるまで、どんなことがあつてもやり通す決心ならば許すといつて對抗を認め、五十人許りの下士官は土浦町を立ち退いた。町に住まつてゐた元帥も、宅に歸らないで、下士官と共に四十日も隊内に籠城したこともあつた。元帥が部下を愛することはかやうであつた。

大正十四年十二月、元帥が在職一年三ヶ月で米國大使館附武官として轉任することになつた。部下將校もそれ〳〵昇任したので、山本副長を招じて一夕、料亭で謝恩會を開いて大いに歡を盡した。二、三日の後幹事が料亭に支拂ひに行くと既に副長が拂つてあることがわかつて、あつけにとられた。幹事が、副長を訪うて、支拂撤回を賴むと『好いおやないか、人の金で謝恩會をやつたつて、君達の謝恩の志は有り難く受けたよ』と笑つて應じなかつたといふやうな逸話を遺して、米國に赴任したのである。三和大佐手記

元帥の猛訓練の裏にはかやうな實踐躬行と細心の注意、溢るゝ溫情とがあつたのである。かゝる中に、我が航空隊はすくすくと成長して行つたのである。

元帥は昭和元年から三年の春まで武官として米國に居つたが、米國の航空界には深い注意を拂ひ、研究を怠らなかつた。ときは恰かも大西洋横斷飛行といふことが米國の航空界の大問題となり、リンドバークがこれに成功し、續いてバードが成功した。だが、我が航空界はそこまで至らなかつた。元帥は輔佐官に命じて、米國航空の發達を詳細に研究せしめ、洋上長距離飛行には計器飛行、天測航法等の絶對必要なることを認め、當時日本では未だ勘飛行の域にあつたことを歎じ、これを打破し、計器飛行に改めねばならぬと詳細に意見書を認めて海軍省に提出したこともある。この頃、日本では未だ計器などは發達せず、そんなものを賴りにして飛べるものかと、專ら勘偏重教育の域を脱しなかつた。或る下士官が一生懸命に計器に合せて著艦すると、傍の教官は「今のは一節早い」と注意する、「いや、計器に合せて來ました」と答へると「何の計器があてになるか、乃公の勘の方が確かだ」とどなりつけられるといふ狀態であつた。元帥は、かやうの飛行方法を排し、科學尊重の教育を主張したのである。

元帥は、昭和三年三月歸朝、八月五十鈴艦長、次いで赤城艦長に歷補し、五年九月には海軍航空本部に出仕し、次いで海軍航空本部技術部長兼海軍技術會議議員、海軍航空機廠設立準備委員を命ぜられ、八年十月第一航空戰隊司令官に、十年十二月海軍航空本部長に補せられたが、この間に帝國海軍航空の發達の基礎が完全に成就されたのである。

元帥が航空技術部長となるや、本部長を補佐して航空機の進歩發達に、航空兵力の增加充實に非常の努力をした。當時海軍航空關係工場も極めて貧弱であつたので、先づその促進充實を圖り、指導につとめた。また、この頃までは、海軍航空機は母艦または軍艦から發進する小型機以外、基地から發進するものは飛行艇のみであつた。しかし、將來の海上作戰には、陸上基地より出發する大型機が必要なりと認め、三菱會社に命じて陸上攻擊機を製作せしめたのは技術本部長松山茂中將と技術部長の元帥であつた。この陸上攻擊機は幾多の困難が伴ひ、實用機として相當數が整備されるまでには長年月を要したが、支那事變の勃發に際して、荒天の渡洋爆擊の擧に成功して世界を驚倒せしめた。

元帥は、昭和十四年五月、長岡中學校に抵り、回顧して學生等に、それ等のことを語つたことがある。その中に、

『私は最近迄十二年許り飛行機の方面に從事してゐたが、飛行機の乘手と飛行機そのものとを如何にしたら、一旦緩急ある時戰ひの役にたてることが出來るかといふことを考へて、計畫の一歩をたて〻進んだのは今から八年前であつた。勿論それ迄我々の先輩は十分努力されましたが、しかし、この飛行機は日進月歩のものでなかなか油斷が出來ません、先づ以て五年間の計畫で進んだ、支那事變の起きた時は丁度六年目であつた。五年の計畫で大凡出來、六年目に事變が始まつた。それで幸にしてやゝ以て、戰ひの役に立つだけの飛行機人員を整備することが出來、今日に至つてゐる』

といふことがある。元帥の航空機の製作、航空戰士の養成、更に航空技術の完成に對する苦心は洵に慘澹たるものがあつた。私は今少しく戰士の養成訓練のことを語らう。その航空戰隊司令官時代のことである、晝夜を問はぬ訓練が續いた。第一期訓練中の基本演習中のこと、薄暮になつて攻擊機隊を發進せしめねばならぬといふことがあつた。しかし、當時は未だ夜間著艦し得る技能のものは尠なかつた。航空參謀は、危險だから攻擊機隊の發進は中止されたいと進言した。攻擊機隊の人々は、司令官がなんと命令するかと固唾をのんで、艦橋を仰いでゐた。だが、司令官は肅然として、「宜いから出せッ」と命じた。萬事は決した。攻擊機隊は躊躇なく飛び出した。案外敵は近くにゐたので、有効な攻擊を終へて、全艦無事收容することが出來た。すべてがこんな具合であつた。

また元帥はいつも陣頭指揮で、率先して訓練に當つた。霞ヶ浦の副長時代に、初めて編隊で帝都訪問飛行を試みたときには、指揮官としてその先頭に立つた。かやうのことは當時には聞かないことであつた。赤城艦長時代など新鋭機の試驗飛行などには、必ず操縱者の乘らぬ前から、いつも默つてその飛行機に乘りこむといふ風であつた。

元帥が訓練のため斃れ行く部下の將兵に對して、深き愛惜と哀悼の誠を捧げたことは有名の話で、霞浦航空神社はこの人々の靈を祭つたもので、元帥が率先して建立したものである。而して所持の手帳には犧牲者の姓名、死去の年月日、遺族名、府縣別を記入し、暇あるごとに取り出し、瞑目してそ

の功績を偲び、その遺族を慰藉するにつとめた。

昭和十三年五月、支那事變當初の渡洋爆撃隊の指揮官が歸還し、海軍省大臣室で任務の報告があり、若い飛行機搭乘員の奮闘や戰死の狀況が具さに報告された、誠に感激深い話であつた。報告を聽き終つた山本次官は、次官室に退つた。軍務局長井上成美も續いて次官室へ入つて行くと、次官は涙を流し、拳でそれを拭つてゐた。そこへ、報告を終つた指揮官が入つて來て、この光景を見て、共に泣いて次官の手を固く握り、

『有難うございます、これを知つたなら、死んだ部下も定めし滿足することでせう』

と、感激の涙に咽んだ。これを見た井上氏もまた泣いた。

『山本次官の涙こそはまさに部下をして喜んで水火に飛びこませる將軍の涙であつた』

と井上氏は言つてゐた。元帥は常にこの同情を以て部下將兵を統率し、その猛訓練に當り、さうしていつも率先躬行、所謂帝國海軍の陣頭指揮をやつてゐたのである。

元帥は、かやうに司令官としては猛訓練につとめて航空戰士を養成し、技術部長や航空本部長としては航空隊の整備につとめ、航空戰術の完成に盡した。さればこそ、昭和十一年十二月海軍次官に榮轉したときなどは、却てこれを遺憾とし、航空界にまだ爲すべき多くのことがあつたといつてゐたのである。十三年四月再び兼職として航空本部長になつたのはこのためであつた。かくて支那事變に於て、充分にその成果を中外に發揮したが、航空界に對する豫期の目的が略〻達せられるに於て、聯合艦隊司令長官に親補せられ、多年研究に研究を重ねた航空戰術を深く藏して、その充實した航空隊を率ゐて大東亞戰爭に乘り出すことになつたのである。元帥はその頃、海軍航空本部總務部長に對して、次のごとく語つてゐた。

『航空の整備充實さへやつてくれれば、對米作戰は大丈夫だ、どうか、航空基地を充分整備して基地航空部隊の活躍し得るやうに準備してください』

大東亞戰爭に於ける帝國海軍航空隊の活躍は世界の驚歎するところとなり、海軍戰術を一變したことは周知のことである。これ等はもとより元帥一人の功績にあらざることはいふまでもないが、その二十餘年來終始一貫、海軍航空部隊の發達と航空戰術の完成とに努力した功績は正に不滅である。

第八　山本元帥と大東亞戰爭

一　臆病な犬ほど吠へる

國雖大好戰必亡　天下雖安忘戰必危

といふ支那の司馬法の語がある。元帥の軍事に對する思想はこの語につきてゐる。元帥のごとく戰爭準備につとめたものはあるまい。元帥は私人として公人として、一日も戰ひを忘れたことはない。常在戰場はその覺悟として餘りにも有名である。しかも、元帥は眞の平和論者であつたのである。ロンドン海軍豫備會議に於て、帝國全權として、航空母艦の廢止を提議したときのこと、米國代表デヴイスが、

『日本海軍航空隊の權威たる貴下が、かやうの提議をするのは甚だ意外である』

と迫ると、

『だからこそ、この提案をしたのである、航空母艦が如何に、殘虐な役割を勤めるかは、その戰隊司令官を經驗した自分は、もつともよく知つてゐる、人道のためにこれを主張するのである』

と答へた。これが實際である。軍備と戰爭を最も能く體驗し、その總てを知つてゐる元帥の平和主義には、極めて深い意義のあることが思はるゝのである。

元帥は、支那事變に際し、英、米、等の不法の重慶援助が次から次へと現はれ、我が國民の憤激その極に達し、街道には討英の宣傳ビラが充滿し、米國に對する無言の憤懣が國內に溢れてゐたときも、元帥は帝國海軍を擁して、街の聲には雷同しなかつた。寧ろ國論を抑へるにつとめた。そのため一部の誤解を受けたが、意に介しなかつた。我々同窓の友人が、その意見を叩くと、たゞ笑つて、

『臆病な犬ほど吠へるものだよ』といふのみであつた。この間、たゞ軍備の充實に全力を傾倒してゐた。海軍省を去つて後、或る軍友に、

『この後、私が海軍でどんな功績を立てることがあつても、私が、在職中石油を貯藏した功績に勝ることは出來さうもない』

と語つてゐたといはれる。日・米問題が愈々急迫を告げて來た。しかし、海軍大將野村吉三郎は帝國全權として米國にあつて、日米親善は理論を超越した予の宿論であると稱して、危機の打開に全力を傾けて奮鬪した。この人は海軍軍人であつたので、國民の中には、我が海軍は戰爭する氣がないのかと臆測するものもあつた。この問題を以て、我々が元帥の意見を叩くと、

『戰爭には十二分の自信がある、しかし、平和に勝るものはないからね』

といつてゐた。私は元帥が決して好戰論者でないことを知つたのである。しかし、元帥はもとより恐米論者でもなければ、ガンヂー式の平和主義者でもない。元帥はたゞ、米英と疊端を開くを以て、

「洵ニ已ムヲ得サルモノアリ、豈朕カ志ナラムヤ」

と宣はせたまひ、平和に御軫念極めて切なる聖旨を奉體して愆らざるを念としたのであらう。

されど一旦宣戰が布告せらるゝや、たゞ

「速ニ禍根ヲ芟除シテ」「征戰ノ目的ヲ達成スルニ遺憾ナラムコトヲ期」

し、聖旨に奉答せんとするの外になにも思ふことがなかつたのである。戰前平和の維持に深き慮りを致した元帥は、宣戰後、征戰完遂に一切を捧げて遺憾なき態度を示したのである。この對照は一見或は奇異の感があるが、これが我が日本武士の本領である。

元帥は海軍次官として支那事變に會し、また聯合艦隊司令長官として、二ヶ年の歳月を經過してゐたので大東亞戰爭の勃發に直面しても、何等驚くところはなかつた。好むと好まざるとに關はらず、世界の情勢はこゝに至らざれば止まざることを知つて、その準備に默々として萬全の策を講じてゐたのである。開戰前の元帥を少しく觀察して見よう。

二　聯合艦隊司令長官として

聯合艦隊司令長官の職は海軍に志すものの最大榮譽とするところである。重大時局下に於て、この親補は元帥の極めて本懷とし、光榮とするところであつた。元帥は親補後幾ばくもならず、西下の途、友人に書を與へ、

秋涼暫時清泉に都塵を洗ふの爽や羨望に不堪候へ共、三年の惡夢より離脱せる昨今の身には、此上の慾は勿體なし、況んや將兵〇萬今や練武其極に達し、而も慘として驕らざる樣を觀ては亦何をか言はむ、たゞ肅然責務の重大に悚然たるのみに御座候　昭和十四年九月二十八日城戸忠彦少將宛

といつてゐた。次官の地位を去り、聯合艦隊司令長官として慘として驕らざる將兵を統率するその本懷思ふべしである。昭和十五年元旦、旗艦々上に於て

日の本の海のまもりの長としてけふの朝日をあふぐかしこさ

と詠じてゐた。しかし、元帥はこの本懷に陶醉するものではなかつた。その職責の重大と帝國の前途を思つて、就任月餘にして、未だ寢食安んぜざるものがあつたのである。その頃のことである。私共の長岡中學同窓會の祝賀會の席上に於て、元帥は先輩の賀辭に對し、

『不肖の私は就任後月餘になるが、未だ安眠したことがない。世に成敗を問はず、全力を盡すといふ語がある。私も軍縮會議に臨むときは、成功、不成功を問はず、最善を盡して來るといつてゐたが、今度の任務には成不成の問題はあり得ない。どうしても聯合艦隊は勝たねばならぬ、この必勝

の確信を得んとして、私は未だ安眠が出來ないのである』と答へてゐた。この沈痛の態度には一座肅然として聲がなかつた。それから月餘、また或る會合で同席した私が

『確信を得ましたか』

と訊くと、たゞ一言

『得ました』

といつてゐた。私はその上問ふ必要はなかつたのである。

元帥は、日本一の幸福者なりと感じつゝ、しかも强烈なる責任感の下に周到なる準備を怠らなかつた。艦隊内に於ける航空部隊の編制指揮系統及びこれが運用等に幾多の改革を斷行し、來るべき戰爭の準備、作戰に萬全を期した。元帥がいかに全艦隊の訓練につとめたかは、次の書翰がこれを語る。

艦隊は其後引續き、〇〇〇〇の一角に於て、陸岸とは郵便物の送受の外全く絶縁して日夜訓練に從事罷在候、本年度の訓練も愈々終末に近づき實力殆んど向上の極點に達し居るの感有之、如斯有爲の艦隊を繼承せしは誠に心强き限りなると共に、責務の愈〻重大なるを痛感し、兢々戒々なほ足らざるを虞るゝ次第に御座候

若し夫れ世上の俗事に就ては、一日三回のニュースと二日おきの新聞により僅かにその一端を窺ふのみにて、夫れすらあの世からなる寢言をきくが如き心地致され候

今や一切を脱却して專心軍事に精進神身共に引しまるを覺え申候　〇昭和十四年九月十五日笹川良一宛

といつてゐる。更に昭和十五年十月九日には、

貴見の通り一旦緩急の日は大言壯語にては一彈も防ぎ得ず、我等艦隊の任務益〻重大を加ふるを覺え、たゞ孜々練磨に精進の外無之と存じ一路邁進に努力致居候、尙時局益〻危迫、切に御自愛祈上候　〇笹川良一宛

といつてゐる。時局の急迫に備へて、いかに訓練に孜々といそしんでゐたかゞ思はるゝ。大言壯語にては一彈も防ぎ得ずといふところ、元帥の言擧げせずといふ魂が思はるゝのである。また昭和十六年一月二十四日には、

小生は單に

小敵たりとも悔らず、大敵たりとも懼れず

の聖諭を奉じて日夜孜々實力の錬成に精進致し居るに過ぎず、恃む處は慘として驕らざる十萬將兵の誠忠のみに有之候　〇笹川良一宛

といつてゐた。これが、元帥の來るべき大戰に應ずるの準備であつたのである。所謂來らざるを恃まず、待つあるを恃むといふ精神に外ならないのである。日米間の風雪急を告ぐるに於て、聯合艦隊

の訓練は一段烈しさを加へた。幾多の訓練が實施されたが、元帥はいつも躬を以て衆員を率ゐた。當時旗艦乘組の航空本部員上出中佐はかう語つてゐた。

『一週間も續くと元氣潑剌たる若い者も、流石に疲れを覺えて來るやうな激しさであつた。それにも拘らず、長官は晝となく、夜となく、毅然たる姿で、いつも艦橋に立ち續けられた、これは體力が續くといふよりは、深い精神から來るのだといふ樣に思はれた』○米内光政述『常在戰場』

また、旗艦參謀の井口中佐は、當時の猛訓練に就いて、元帥のことに及び

『事訓練に關しては頭の下る思ひを度々させられた。若いくせに、我々が艦橋でくたびれるとこつそり腰を下したりしてゐたが、どんなに連續の訓練が續かうと長官は嚴として艦橋に立つてをられ、度々恥しい思ひをした。數日間殆んどお休みになられなかつた』

と語つてゐた。しかし、この頃は訓練による犧牲者はなかつた。それは、長官の精神が能く徹底し、衆員が緊張してゐるからであると、故岩村俊武中將は、我々に語られたことがある。

時局の進轉に伴つて、元帥の大決意と大作戰構想とは益〻進んで來たと見られる。昭和十六年六月十六日笹川氏に與へた書翰には、「艦隊は大命に應へ奉り得ると信居候」といひ、更に追書に、

ビルマルート位で細々と援ける英米の物資供給の爲、蔣は屈し難しなどの論法は何となさけなき事ならずや

雄大なる獨逸の大作戰、あゝ壯なる哉

あの劣弱の蔣を屈し能はざる日本とすれば如何にして英米を屈し、如何にして東亞の新秩序など言へるか不思議なり、世人は宜敷冷徹一番、物を正しく檢討して見るを要す、率直大膽に、若し夫れ英米海を蔽ふて武力來攻の際は、昭和の御代豈一人の相模太郎なしとせむや

といつて、烈々の意氣を示してゐた。思ふにその準備、覺悟は既に完備して遺憾がなかつたのである。

艦隊が實力行使の已むなきに至るが如きは、君國の不幸之より大なるはなきも、一旦緩急の日には默々實力の錬成に精進し來れる海軍が如何なる作戰で、如何なる力量を顯表するか、充分御覽被下度候。○飯塚譲三宛

といひ、また武井中將宛には「小生こそ日本一の幸福者といふべく、此際勇猛死鬪を以て戰ひ拔かむのみ」云々といひ

大君のみ楯と思ひ定めたる心すがすがし秋空に似て

といふ一首が添へてあつた。有史以來の大戰に臨む武將の心事が思はるゝ。これにつけても、思ひ出すのは、開戰前、昭和十六年十月末の鄕友會の席上で、

『戰爭となれば、陛下の御命令によつて身命を擲つて戰ふつもりだ。御稜威の下、絶對に勝利の見

込みがある、海軍のことだけは私が引受けた、御心配はいりません。しかし、どうしてこの戰果を收拾するかは、私共の任務ではありません、これは政治家にお任せいたします』

と言つてゐたことを思ひ出さずにはゐられないのである。このとき、元帥はまた、

『諸君も、山本がやつたなあーといふやうのことをやるかも知れませんよ』

などといつてゐた。既に大作戰の構想は成つてゐたのであらう。

しかし、かやうに、自から「日本一の幸福者」といふ元帥が、既に「有言の凱旋などは思ひも寄らぬ事」といひ、深く決するところがあつたことを思ひ出さずには居られない。これは開戰後のことであらうが、三和大佐が、某大佐と司令長官の作戰室で議論を闘はしてゐるところへ這入つて來た元帥は、兩大佐の語を聽いて、靜かに諭された。

『今日君達も、一身の立身や出世のことなどは考へてゐまい。各幕僚はその職務に於て、この戰爭に心身共にすりつぶして仕舞へばそれで好いのだ。勿論君達ばかりではない、僕もさうなのだ。秋山將軍といふ人は、中佐、大佐の時は成程偉い人だつた、……而し、そこが秋山將軍の偉いところだ。あの日露戰爭の一年半で心身共にすりつぶされたのだ、そして東鄕元帥を補佐して偉績をたてられたのだ、軍人はこれが本分だ、お互ひにこの大戰爭に心身を摺りつぶすことの出來るのは光榮の至りぢやないか』

と、その眼には堅い決意が閃いてゐたと三和大佐は書いてゐる。これが、今次大戰に臨む元帥の覺悟であつたのである。秋空のごとき清爽なりといふその心事は、この覺悟から來たのである。

三　空前の大作戰

東に北に南に發進す弓末振り起し射つる矢ぞこれ

開戰劈頭の大作戰、眞珠灣の大襲擊、續々として起つた大戰果は世界を驚倒させた。全く何人も夢想し得なかつた作戰構想であつたのである。我々は、山本果してやつたなあー、ゲームの天才を誇るだけあると歎稱した。歌友、武井中將は、

誰かかつて想ひ到りし一萬浬地球を掩ふ作戰の構想

と酬ゐたと聞く、これは萬人の歎稱である。

かくて、元帥は莞爾として自己の作戰構想の成就を受取つたのである。

突擊の電波は耳を劈きぬ三千浬外布哇の空より

と詠じた元帥の滿足が思はるゝのである。眞珠灣の大襲擊は、名をも命をも措まざる元帥自らの構想で、自ら發案强行することを主張し、遂にその實現を見たのであるといはれるが、全くさうであつたのである。これは多年考へてゐたことで、航空戰術の創始者としては當然のことであらう。蓋し戰爭

の前途を案じた元帥は、量と數とに優勢なる米英には、開戰劈頭に先づ大打擊を與へざるべからずと期したのである。同郷の先輩小原直氏に、次のやうにいつてゐる。

布哇馬來兩海戰は敵自ら其過失に自滅せるものと可稱、併し此次からは同じ手には乘る間敷と存居候、尤も布哇攻擊に關しては專門技術と種々苦心研究の餘に成れるものにして、素より實施には非常の努力と死鬪の結果には相違無之も、數年來稀に見る好天明に惠まれたる處も有之、天佑神護なりと信居候、併し實は開戰となれば此位はやつて置かざれば、〇〇の艦艇〇〇の飛行機に對しては とても勝目なき次第にて、目下の戰況は豫期せる處に概ね一致せる程度にて、布哇の一擊を免れたる敵航空母艦、大型重巡洋艦等は、彼當日神護を失はざりし哉に被思候、

此戰勢にて進み、新嘉坡、蘭印迄を順調に攻略する事は勿論としても、戰爭は實に其後にあるわけなれば、自肅嘗膽、戰備の促進の要、今日より急なるはなしと焦慮に不堪次第に御座候、銃後の御指導何卒此上共宜敷御願申上候、（昭和十七年一月三日附）

眞珠灣大襲擊の意圖が、先づ戰機を制し、彼我の海空勢力を一變せんとするにあつたことに疑ひがない。この爲めに慘憺たる苦心が重ねられたのである。

私は、こゝに大快擧の決行に於ける元帥の武士らしき心事を傳へたい。

元帥はこのことの敢行に際し、開戰の通告の米國に既に屆きしや否やを氣にして、傍の某〇〇〇に二三度確かめられ、また、敢行後に於ても、通告は屆いてゐたであらうな、と質されたといふことである。奇襲敢行は、寸秒の急を爭ふが、さりとて、敵の寢首をかくやうのことはしたくない、枕を蹴上げないで刀を下しては武士道がたゝぬと考へたのである。しかし既に本國政府に通告してあれば、その後の準備責任は彼にある、我れの問ふところではないといふのであらう。元帥はこの心事を、友人に次のごとくもらしてゐた。

御懇書拜受、難有御禮申上候、寢込を襲ふての一擊などに成功したりとて賞めらるゝ程の事は無之と恐縮に候、……米將の不覺は武人の恥辱たるべきは確と存候、英の自滅は無謀による過失にて、言はゞ清正の鎗先を餌と間違ひ飛び付きしこれも先方の不覺と存候、小敵を侮らざる事は大敵を懼れざるよりも大切と感申候、併米英とて今日迄の大を成せしもの、用心堅固の必要第一と心得、小心翼々奉公の覺悟に御座候、（昭和十六年十二月十七日上松蓊氏宛）

緒戰の大功を誇らず、益〻小心翼々將來の奉公の誠を誓ふところに元帥の面目を思はずにはゐられないのである。

かやうにして元帥は、世界の戰史上に特筆さるべき眞珠灣の大奇襲を以て、毫も自己の功勳としなかつたのである。前記の手紙にもあるがごとく「賞めらるゝ程の事は無之と恐縮に候」といひ、また一友には

小生も若人等の奮鬪の一戰にて、一躍花形となりし樣子、苦笑汗背に不堪　昭和十七年二月目黑眞澄宛

といつてゐた。元帥は全くこの戰果功績を自己のものとせず、部下若人のものとして無限の感謝を寄せてゐたのである。そして前聯合艦隊司令長官高橋三吉大將の祝辭に對して、

此度開戰劈頭の戰果に對し、過分の御懇辭を拜し、光榮恐縮の至に御座候、是れ素より歷代司令長官の御薰陶に依る傳統精神を此の有事に發揚ぜるものにして、此の點深く感泣致す次第に御座候……

布哇に飛び込みし特殊潛水艇に到つては、……兵學校卒業一年未滿の若武者共を加ふる此の決死隊が、暗夜敵港に突入して此の成果を揚げたるを思へば、今の若い者はなどと口ハバたき事は申聞敷としかと敎へられ、此れ又感泣に堪へざる次第に御座候

大戰の前途は眞に遼遠にして、幾多の苦難相次で生ずべきは深く覺念致し居候へ共、青年將校等の意氣と技倆とは概ね上述の如く、肅然襟を正しうして敬意を表するに足るもの有之候へば、自戒奮勵誠心奉公に邁進すれば、希くは　聖旨に副ひ奉り得むかと三思致し居り候

玆に御懇辭を深謝し、尙將來御氣付の點等は御垂示を賜度奉願上候　昭和十六年十二月十九日附

この大戰果は、一に歷代司令長官の薰陶による帝國海軍の傳統精神に養成された若武者共の致すところであるとは、誰に對しても繰り返す語である。これが謙虛なる元帥の心事である。そして、この若武者あれば、この後如何なる難局も突破し得べしと信じてゐたのである。

實は元帥も部下の若武者どもには絕對の信頼を寄せながらも、かほどまでの戰果を揚げ得べしとまでは思はなかつたらしい。元帥はその後或る夜、しみじみと傍人に述懷してゐた。

『布哇の一戰で、航空部隊だけであれだけの戰果が擧るのだつたら、特別攻擊隊の方は使ふのぢやなかつたな……、しかし、最初はそこ迄は判らなかつたから仕方もないが……』

比ひなき勳を樹てぬ若人は
さはれ昨日も今日もかへらず

四　第二期作戰と決意

かやうに緖戰の功を誇らなかつた元帥は戰爭の將來を極めて重視し、その困難と長期戰とを覺悟し、國民が安價なる勝利感に浸つて士氣の懈怠せんことを憂慮した。かやうのことでこの重大時局を切りぬけ得べきかと思つたのである。

眞珠灣大空襲後、實姉の高橋嘉壽子さん宛の書翰に、

いよ〳〵戰ははじまりましたが、どうせ何十年も續くでせうから、あせつても仕方はありません、世の中ではカラさわぎをして、がや〳〵して居るやうですが、あれでは敎育も、修養も、增產もあ

まりうまくは出來ぬでせう、重大時局になればなるほど皆が持場を守つて、シーンとしてコツ〳〵やるのが眞劍なので、人が軍艦の三隻や五隻を沈めたとて、さわぐには當らないと思ひます、勝つときもあり、少々はやられる時もあります、海軍はこれからだと覺悟して油斷なくやるつもりですが、戰爭の事ですから、今の今どうなるか、しかしこれは問題ではなく、唯力一杯自分の仕事に御奉公するだけです、幸に丈夫で勤務をして居りますから御安心下さい、（昭和十六年十二月十八日附）といつてゐた。心置なき實姉のこととて、その心事をつくしてゐた。元帥が恩師の嗣渡部重德に與へた書翰には「唯此の戰爭が何十年續くかと思ふのとき」云々といつてある、（十六年十月二十一日附）これは、未だ大東亞戰爭にならないときであるが、對米英の戰爭が始まれば、容易に終熄することがないとは、夙に期するところであつたのである。

かやうにして、元帥は緒戰の大勝以來眞の戰爭はこれからだとして、その努力決心は益〻新たなるものがあつた。元帥の知人への書翰には常にこれを洩してゐた。前記渡部氏への書翰には、「私共聯合艦隊將士としては、七生報國の熱誠を以て死鬪の一途のみと堅く決心せし次第に御座候」とある。皇軍は連戰連勝、米英東洋艦隊の主力を擊滅し、新嘉坡を略し、南方東印度諸島を攻略して第一期作戰を終つたときに於ても、この考へには變りがなかつた。鄕友駒形十吉氏に宛てた書翰には、

第一段作戰も不日概成、之にて海軍小供の時間を終り、いよ〳〵本格戰と可相成、此間小供等はよく働き呉れたりと感謝致居候、小生とみに頑健に候（昭和十七年三月末附）

とある。この新たなる決意の下に迎へたのが、昭和十七年八月以降の米國の大反擊であつたのである。

五　敵の反擊を邀へて

ソロモン群島は米國にとつては、布哇と濠洲を結ぶ聯絡線確保のためには死守すべき最後の一線であつた。これを失つては濠洲に對する聯絡線が、帝國海軍の不斷の脅威の下にさらされる。かくて、開戰以來の相次ぐ敗戰に追ひつめられた太平洋に於ける戰略態勢の不利を挽回する希望を永久に喪失することを意味する。

これが、米國のソロモン反擊の消極的意義であるが、敵は更に積極的意圖を抱いてゐた。それはソロモンを奪回することによつて、基地飛行機の制空權下に艦隊決戰を有利に展開し、先づ少くとも西南太平洋の海上權を回復する、さうして自からの好む時期に於て、ソロモンから、ビスマルクへ、更に赤道を越えて我が內南洋に進み、而して直接我が本土と南方との連絡路を脅かすと同時に、フィリッピンを衝き、ビスマルクから、ニューギニヤを經て東印度諸島を奪還するといふのである。かくて、北はアリューシャンから、南はソロモン、東はギルバートと彼の進攻が企圖されたのである。

昭和十七年八月六日、相次いで襲ふスコールの惡天候に乘じ、珊瑚海々戰後三ヶ月、漸く整備のな

つた米濠聯合艦隊が、精鋭を誇るその海兵部隊を搭乘した三十隻を下らぬ輸送船を護衛して珊瑚海を北上して來たのである。それ等の敵聯合艦隊は四隻の空母を擁し、甲巡洋艦及び驅逐艦、潜水艦を含む大艦隊であつた。我が〇〇基地艦隊司令部が、その報道を得たのは八月七日の朝であつた。かくして開始されたのがソロモン海戰である。こゝでも元帥の大膽にして積極的攻擊精神は遺憾なく發揮された。

消極にして未だ劣勢ならざるはなし

これを優勢ならしむるは積極的に出る外なしとし、殆んど不可能と思はれた夜襲戰に出ることとしたのである。元帥の幕僚の一人は、そのとき、

『こんな戰爭は未だ嘗て試みられたことがあるまい、恐らく今後もあるまい。しかし、あたりまへのことなら、こちらの考へる位のことは敵も同じやうに考へるからな』

といつてゐた。これが八月八日の大夜襲戰であつた。卽ち午後四時旗艦マストには司令長官の訓示が高々と揭げられた。

帝國海軍の傳統たる夜戰に於て必勝を期し突入せんとす、各員冷靜沈著事にあたり、克く全力を盡すべし。

かくて、全艦隊は積載してゐたガソリンを始め、その夜の戰鬪に直接必要でない可燃物を悉く海に投じた。敵彈命中による火災の被害を最少限に止めようとする愼重な事前の處置である。

この用意の下に行はれた戰果は著しかつた。

ツラギ海峽九日の夜明けより慘澹たるものはなかつた。滿足な姿をとゞめる艦船は一隻も殘らなかつた。悉くが、我が航空部隊と水上艦隊の息もつかせぬ猛攻の前に潰滅し去つたのである。このソロモン戰はこの夜襲を最大戰として前後三日間に亙つたが、その戰果は、米英甲巡乙巡計十三隻、驅逐艦九隻、潜水艦三隻、輸送船十隻をそれぞれ擊沈し、甲巡一隻、驅逐艦三隻、輸送船一隻を擊破し、擊墜飛行機は五十八機に及んだのである。

これに對し、我が方の損害は飛行機自爆二十一機、巡洋艦二隻に輕微なる損傷を受けるに過ぎなかつたのである。

かやうにして八月二十四日には第二次ソロモン海戰が戰はれ、次いで十月二十六日には南太平洋海戰、十一月十二日には第三次ソロモン海戰、十一月三十日にはルンガ沖夜戰、十八年一月二十九日にはレンネル島沖海戰、二月一日にはイサベル沖海戰、四月七日にはフロリダ島沖海戰と相次いで大海戰が戰はれた。而して、戰つて勝たざるなく、その戰果は益〻著しかつた。第一次ソロモン海戰からフロリダ島沖海戰に至るまで何々海戰として大本營で發表した海戰のみにても戰艦五隻、空母六隻、巡洋艦二十六隻、驅逐艦二十三隻、潜水艦十三隻、輸送船二十九隻、魚雷艇十三隻を擊沈し、飛行機

一千百七十一機を擊墜してゐる。その他各方面に於て擊沈輸送船及び擊墜飛行機の數亦莫大に上つてゐる。しかし、これ等、戰鬪の狀況及び經過を述ぶることは私の目的でない。私はこれ等日に劇烈凄愴を加へつゝある戰局に對する元帥の心事を考へて見たい。

元帥の戰術眼は、八月七日ソロモン海戰の開始以來、米國の意圖を看破し、その容易ならざる決心を覺り、愈〻第一段の作戰、卽ち海軍小供の時間が終はり、本格的の第二段作戰に入つたことを知つたのである。元帥の勇氣は益〻振起された。戰爭はこれからと武者振ひして立ち上つた。昭和十七年九月、上松蓊氏に與へた書翰には、

八月十九日附貴信拜受、御禮

あと百日の間に小生の餘命は全部すりへらす覺悟に御座候、敬具

といつてゐたのは、立ち上つた元帥の決心であつたのである。米英の敵として不足なきを知つたのである。友人目黑氏に宛てゝ、同年十月初めに、

日米兩海軍は漸く本格戰期に入り、角力ならば丁度觀頃と被存候、何しろ各種艦艇を次から次と失ひながら、ビクともせざる如き彼は、國力、國民氣力に於て甚强と見て可然哉に被存候

と感懷をもらしてゐた。何事にも負けることが嫌ひで、また負けたことを知らぬ元帥が、この日米の大相撲、本格戰に入つて、一大決心を固めたことは當然であらう。米人の力量、技能は既に熟知して剩すところがないのである。この大決心の下に行はれたのが、前記の海戰の結果で世界を驚歎せしむるの戰果となつたのである。

しかし、米國も必死であつた。强大なる生產力にものをいはせて、やられても、やられても飛行機の數を揃へて來た。また豐富な機械化兵器を以て飽まで執拗なる抵抗を續けたのである。ソロモン海戰以來、激鬪に次ぐ激鬪が續けられたのである。我が戰果は益〻あがつたが、戰局は必ずしもこれに伴はなかつた。こゝに元帥が拜聞したのは、昭和十七年十二月十二日の　聖上陛下神宮御親拜の御事であつた。元帥は聖慮の程を拜察して全く恐懼に堪へなかつたのである。省みれば我が身心は邀擊戰以來百日を過ぎて未だすりへらされない、近時頭髮やゝ白きを加へたれど、黑髮も尙ほ尠しとしない。嗚呼申譯がない、我が身心頑健にして、しかも聖慮を安んじ得ざるかと猛省せざるを得なかつたのである。これが、親友目黑氏及び城戶忠彥少將に宛てた述懷である。十八年一月附で、目黑氏に

天皇陛下の伊勢神宮御親拜を拜承するに至りては誠に恐懼措く所を知らず、此御一事に對し奉りても、第一線指揮官として頭髮尙ほ未だ悉く白からざるの不忠を自ら深く恥づる次第に御座候

といつてゐる。城戶少將に對しても二月附にて同一の心事を語つてゐる。これは、陛下に一身を捧げ、身を以て國家の大事に任ずる我が國古忠臣の心事で、私は楠木正成等のそれと毫も異ることなきを思はざるを得ないのである。

この心事を思はゞ、元帥の飛行機上の死を以て生を輕んじ、重責の身を思はざるの行爲なりといふごとき非難は全く忠臣の心事を理解せざるものであることが知らるゝのである。東郷元帥、乃木大將は、日露戰爭に於て屢〻危險を冒して顧みなかつた。東郷元帥のことは既に述べたが、乃木大將は攻圍中絕えず戰線を巡視して戰局の狀を見ると共に、無言の裡に將卒を勵ましてゐた。幕僚等が何氣なしに注意すると

『なあに、俺は危い場所を除けることが上手だから心配はないのぢやよ』

と笑つてゐるのみだ。遂には松平副官が心配して、明治三十七年十二月二十五日には、たまりかねて、今後かゝる危險の行爲をなさぬといふ誓約を將軍に迫るといふさまであつた。近代の聖將といはるゝ乃木大將が、かやうに戰爭に於ては生を輕んずるごとき行動をとつた理由はいづこにあつたのであらうか。人或は乃木大將を以て、その愛兒を失つたからであるといふのである。『乃木希典』の著者宿利重一は「將軍の第一線に暴露することが滋くなつた、そして或る場合には衞兵長さへも伴はず出掛ける、殊に保典が爾靈山で戰死してからは、幕僚間でも注意せねばならぬと窃かに警戒するやうになつた」といつてゐる。また大將は、自からその心事を寺內正毅陸相に告げて

久々御無音ニ打過候處、實ハ彈丸ト人命ト時日ノ多數ヲ消費シツヽ埒明キ不申候爲メ、唯々苦悶、慚愧ノ外無之、漸ク須將軍モ根氣負ケノ氣味ニテ開城致シ呉レ、當方面ノ一段落ヲ得候、無智無策ノ腕力戰ハ上ニ對シ、下ニ對シ今更ナガラ恐縮千萬ニ候、山（縣）元帥ヨリ度々懇示モ相蒙リ候得共、是又御答モ不仕多罪至極、且ツ詩ノ次韻モ未ダ出來上リ不申爲メ、今日ハ呈書不仕、乍憚尊臺ヨリ前件宜敷御取成シ置キ奉願候

といつてゐた。この書を受取つた寺內陸相は東京から赴任する第三軍の幕僚塚田清市中佐に窃かに傳言したのは「乃木を殺さぬやうにしてくれ」といふことであつた。寺內は乃木の人と成りを知つてその心事を察してこの傳言をなしたのであるといふのである。

乃木大將は、かやうにいつも「死處」を求めてゐたのであらうか。思ふに軍人が、戰爭に臨んで「死處」を求むることは當然であらう。たゞ、乃木大將を以て、自から進んで死處を得んとしたといひ、或は愛兒を失つたためといふごときは、決して大將の心事を盡したものではないのである、たゞ大將自らいふごとく、人命と彈丸、時日の多數を消費して埒が明かなかつたといふことに只管苦悶慚愧を重ね、そこに自から死處を求めたといふことは、所謂仁義の大將（長岡古武士の最も貴んだといふ）情の武人として、まさにあり得べきことであると思ふ。能くも死んでくれた、汝等のみを殺さないぞ、とは自然に起る叫びであると思ふ。極めて情誼に厚く、部下を熱愛した山本元帥が、續々と死し行く部下將卒に對して意安からざるものゝあつたことはいふまでもないことである。

元帥は、戰爭が愈〻激しくなり、航空戰士の死が多きを加へて來た頃、

『もうどの位になつたかなあ、この手帳も一杯になつて數をかぞへるのも難しくなつた』と、感慨無量のやうすで、常に放さぬ古い小型の手帳に見入るのであつた。この手帳は飛行機で戰死殉職したもの等を府縣別に分け、遺族の名前住所まで書いてあるものであつた。三和大佐はかやうに書いて、「その頃から長官は生きては還らぬとの御考へが彌ましに激しくなつて來たのではなからうか、それを述懷された歌も出來て居る」と記してゐた。

成る程元帥の眞珠灣襲擊の特別攻擊隊を讃へた三首の歌

比ひなき勳を樹てぬ若人はさはれ昨日も今日もかへらず

比ひなき勳をたてし若人は永久にかへらずわが胸痛む

益良雄のゆくとふ道をゆきさはめわが若人らつひにかへらず

を思はゞ、三和大佐の言も、まことに首肯されるのである。元帥が昭和十八年二月附にて城戸少將に與へた書翰には、開戰一週年を迎へての所感をかういつてゐた。

小生は十二月八日の所感は

一とせをかへりみすれは亡きともの

數へかたくもなりにける哉

なるも、夫れ丈け小生も此世にもあの世にも等分に知己や可愛い部下が居ることとなり、往つて歡迎をして貰ひ度くもあり、もう少々此世で働き度くもあり、心は二つ身は一つといふ處にて候

といふ一節がある。極めて淡然たる言葉の中にも部下將士を思ふ切々たる眞情が溢れてゐる。また昭和十七年十月二十六日、南太平洋海戰の大戰果を聽きつゝ

今宵もや照る月影をしるべにて仇うちをらむ空の男の子は

かへりこぬ空の愛子の幾人かけふも敵艦に體當りせし

と詠じてゐた。この日の海戰には、擊沈航空母艦及び戰艦各〻一隻、巡洋艦三隻、驅逐艦一隻、擊墜飛行機二百機といふ、赫々たる大戰果を擧げたが、我方も亦飛行機四十數機といふ犧牲を出したのである。元帥はこの戰鬪を指揮せられ、それ等の報告を受けつゝ、折からの十三夜の明月を仰ぎつゝ、熱帶の澄み切つた夜空で、航空部隊の將兵奮鬪のさまを偲んだ感懷がこの二首となつたのである。

また、昭和十七年六月、東太平洋作戰の華と散つた司令官山口多聞中將、〇〇艦長加來止男少將の最後を聽いて、元帥は

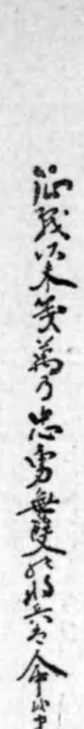
燃えくるふ炎を浴みて艦橋に立ち盡ししわが提督は

海の子の雄々しく踏みて來にし道に君立ちつくしつ神上りましぬ

といふ二首を獻げてゐる。兩提督の死は海將の最後として、これ以上に尊い美しいものはないといはるゝ。一艦の乘員を悉く避難退艦せしめ、自からは從容として炎の中に立ち盡した部下兩將軍の最後

の光景を偲んでは、まことに萬斛の涙なきを得なかつたのである。

最近、元帥の筐底より發見され、その戰死公表一週年記念の日に公表された次の遺詠には元帥の心事が盡されてゐる。



征戰以來幾萬の忠勇無双の將兵は命をまとに奮戰し護國の神となりましぬ
あゝわれ何の面目かありて見えむ大君に　將又逝きし戰友の父兄に告げむ言葉なし
身は鐵石にあらずとも　堅き心の一徹に敵陣深く切り込みて日本男子の血を見せむ
いさましてしはし若人ら　死出の名殘の一戰を華々しく戰ひもてやかてあと追ふわれなるそ

昭和十七年九月末述懷　　山本五十六誌

かやうなる遺詠述懷に現はれたる元帥の心中を想へば、元帥が、開戰直後に既にいつてゐたごとく、有言の凱旋などは全く期してゐなかつたのである。明治三十八年十月二十二日、東郷聯合艦隊司令長官が、滿都の歡呼を浴びつゝ萬歲聲裡に帝都に凱旋せし光榮などは、決して元帥の夢にはなかつたのである。その心事は寧ろ死處を求めてゐたといはるゝ乃木大將に近きものがあつたことが思はる。元帥は出征中、乃木大將歌集を愛讀し、「眞實胸を打つものがある」といひ、

撫子の花にも心おかれけり我が友人の血汐にやあらぬと

かういふ部下將士の死を悼まれた歌などには、特に意をひかれたといふことである。まことに元帥の心事を思ふと萬斛の涙なきを得ざるものがある。仰いで大君を思ひ、俯して我が部下を思ふ、我れ一人無事なるを許さゞるのである。これが皇國聖將の心事である。しかし、私は乃木大將が自から好んで死處を求めたといふことの必ずしもその心事を盡したものにあらざるごとく、元帥も亦好んで死處を求め、或は生を輕んじたといふことの必ずしも、その心事を盡したものでないことを斷言し得るのである。武士の涙と情に厚きはその特質であるが、その全面ではない。理を以て情を制するは武士教育の常である。乃木大將、山本元帥共にかやうなる教育に養成された人であることを忘れてはならないのである。

井上中將は、元帥を評して、

『元帥は峻嚴其のものの如き冷たい理智一點張りの人の樣に思はれるかも知れないが、實は然らず、それとは反對に非常に感じ易い情味豐かな人であつた、元帥は能く、感激性の無い奴はだめだよといつてゐた』

と語つてゐる。元帥がかやうの人であつたことは疑ふべからざることであるが、さりとて、情によつて、また感激によつて理智を沒した人でないことはいふまでもなく、井上中將も、元帥を以て滿身是れ膽の人、意志堅固の人、正義感の强い人といつてゐるのである。

元帥が死處を求めてゐたなどといふのは、その一面のみを見た結果である。元帥はそんな女々しい人ではない。深きに過ぎやしないかとまで思はるゝ情愛の人であると共に、餘りに强過ぎやしないかとまで思はるゝ理智の人であつた。元帥は事苟も軍事に關係ある場合には、「貴さま死ぬ」とはつきりいひ切り得る人であつた。部下に死を命令するといふことは容易ならぬことであるが、そこが指揮官として最も重要な資格である。元帥はこの資格を持つてゐたのである。その冀ふところは、いかにして最善の方法に於て、最善の努力を盡すべきかといふことであつたのである。ナポレオンの語に、

將才は天授なり、然れども最も將帥に必要なる資質は剛毅不動の精神と何物を犧牲にするも必ず勝たんとするの決心なり。

とあるのは同じ意味ではあるまいか。何物をも犧牲とする、といふ語に深甚の意味があるのである。

元帥の冀ふところは、たゞ完全なる勝利によつて、上御一人の宸襟を安んじ奉ることである。妄りに死を冀ふといふがごときは、元帥の情の一面のみを見た語に過ぎないのである。而して、元帥はその部下將兵とこのことを共にせんとしたのである。犧牲も、光榮も共にせんとした。かくて遂に自身も亦部下と共に光榮の死を頒つたのである。

六　崇嚴なる死

元帥の、今次大戰に於ける功績とその死とは洵に偉大なるもので、まさしく皇國史上に特筆すべきものである。これは、畏くもその國葬に際して賜りたる大元帥陛下の誄辭に盡くされてある。卽ち、

沈毅ノ性能ク大任ニ堪ヘ寛宏ノ度常ニ衆望ヲ負フ身ヲ持スル廉潔人ニ接スル諧和戎事ニ鞅掌シテ心力ヲ航空ニ殫シ軍政ニ參畫シテ智術ヲ振武ニ效ス出テテ水帥ヲ督スル善謀豫メ彼我ノ勢ヲ審ニシ雄斷克ク勝敗ノ機ヲ制ス風行雷動未タ一歲ヲ經サルニ八タヒ竹帛ノ勳ヲ樹テ鷙搏鵬擊遠ク萬里ニ亙リテ兩ナカラ空海ノ權ヲ握ル戰局ノ方ニ酣ナル將星遽ニ墜ツ壯烈古ヲ曠シクシ軫悼殊ニ深シ玆ニ侍臣ヲ遣ハシ賻ヲ齎ラシ臨ミ弔セシム

と宣はせられてある。海軍大臣嶋田繁太郎、軍令部總長永野修身は各〻弔辭を呈して、元帥の功績と死とを稱してゐる。また海軍大臣は國葬に際し、その挨拶に於て、

山本元帥の統率されました我聯合艦隊は洪大無邊の御稜威の下に、開戰當初布哇の敵米國艦隊に壊滅に近い大打撃を與へ、馬來沖に敵英國東洋艦隊の主力を撃滅し、又比島に敵米國航空兵力を殲滅致しまして、先づ海上及空中の敵に徹底的打撃を與へて戰勝の基礎を堅めました上、忠勇なる我陸軍と水も漏さぬ極めて緊密な協同を以ちまして短日月の間に敵米英蘭の東亞に於ける根據を覆滅し、其の勢力を一掃して必勝の態勢を確立致しました、爾來一年有半太平洋に又印度洋に敵を索めて之を撃破し、敵米英が必死の努力を以てする反抗を粉碎して皇國を富嶽の安きに置きましたる功業は眞に偉大であります……偶々本年四月最前線に於て全艦隊の作戰を指導中敵機と交戰し、飛行機上に於て壯烈なる戰死を遂げられたのでありますが、この間元帥は終始泰然自若、軍刀の柄を堅く握り、最後の瞬間まで主將として寔に崇嚴なる態度を持して居られました。

この語は誄辭の謹解とも見るべきもので、元帥の偉大なる功績と崇嚴なる死とを語つて、一語の加ふべきものゝあるを知らないのである。

結　論

――回顧して一生を憶ふ――

以上數章に於て、私は、私の解する元帥の人と成りとその功績と、更にその功績の由つて來る所以とを述べたつもりである。それは洵に不充分で、且つ不完全である。しかし、これ等以上のことは、今日未だ公にするの時機でもなく、また許さるべきことでもあるまい。

近代帝國海軍史に於ける元帥、支那事變史に於ける元帥、大東亞戰爭史に於ける元帥を詳細に傳ふるは將來のことに屬するのである。私は史家の立場に於て元帥を傳へんことを冀つたが、私の爲し得たことは、元帥の人と成りの半面の一部であり、その功績の何分の一たるに過ぎないことをこの書の讀者に御詫を致し、且つ元帥生前の知遇に對して、洵にすまない感がするのである。

しかも、更にこの結論を附加せんとするは、徒らにその罪を重ねるの感があるが、聊かその缺を補はんとするに過ぎない。

一　藩風・士魂に立脚

元帥が長岡藩風・士魂に養成された人であつたといふことに何人も異存がなからう。元帥のごとく郷土を愛し、その遺風・遺訓に重きを置いた人は尠なからう。常在戰場の遺風に一生を處し、終生質朴勤勉にして努力忍苦の生活を終つた。而して武士の義理、侍の一分に生き、忠孝の遺訓を全ふしたのである。曩に河井繼之助は同一の藩風・遺訓に身を起し、世に處しながら不幸にして逆賊の汚名を蒙つたが、元帥はその死によつて正三位　大勳位　功一級に敍せられ、元帥府に列せられ、元帥の稱號を賜ひ、國葬を賜ふの旨を仰出され、優渥なる誄辭を賜はるの光榮に浴したのである。

この兩人はその天稟、性格に於て著しく類似のものを有し、同一の藩風・遺訓に養成されながら、かくも順逆、忠賊の差を見るに至つたが、その差は時勢、境遇の差の外に何ものもないといふことが明かに思はるゝのである。

こゝに於て繼之助はこの元帥によつてその志を成就し、長岡藩は維新後七十年にして始めてその寃を雪ぐことを得たといふべきである。

私は、元帥を喪つた長岡市民が感激、痛恨して止まず、その神靈を奉祀して敬慕尊崇の念を致さんとするのは當然のことであり、しかあるべきことと信ずるのである。

元帥を以て、長岡藩風に生き、その遺訓に養はれた人といふも亦何人も、元帥を地方的小人物とするものはあるまい。元帥が日本民族の代表的人物であり、その功業の世界的たることを疑ふ者はないのである。これは、元帥が舊長岡藩人でありながら、最も傳統的なる帝國海軍軍人であり、典型的なる皇國軍人であつたからである。元帥は常に、軍人下賜の勅諭を遵奉し、その聖訓を遵守し、至誠一貫、大君の股肱としてその御楯として一身を鴻毛の輕きに比してゐた。而して傳統的帝國海軍軍人としてその職責を勵み、人はその勤務の場所に最善の努力を盡すことが一番正しいことであるといつて、到るところの官職にその精魂を傾けた。駐外武官とし、航空戰隊司令官とし、航空本部長とし、海軍次官として遺憾なくその才幹を盡した。元帥によつて、我が海軍航空隊は世界驚異の發達を遂げたのである。遂に聯合艦隊司令長官として大東亞戰爭に乘り出し、開戰三日を出でずして米英東洋艦隊の主力を擊滅し去つた。この偉大なる人物を、誰か一地方人として渺視するものがあらうか、古人が修身齊家に立脚して治國平天下を說くがごとく、元帥は出生地に立脚して世界的大業を成就したのである。このことは元帥を考察するに於て忘るゝべからざることである。

二　日本民族の典型的人物

近代日本に於て、元帥のごとく、その死に於て國民朝野の敬慕哀悼を受けた人はあるまい。昔、聖

露光量違いの為重複撮影

德太子の推古天皇二十九年二月五日薨ずるや、上下國民の哀悼洵に甚しかつた。日本紀には、「是の時、諸王諸臣及天下の百姓悉く、長老は愛兒を失へるが如くして、あぢはひ口に在れども嘗めず、少幼者は慈父母を亡へるが如くして哭泣つる聲行路に滿てり、乃ち耕夫は耜を止め舂女は杵せず、皆曰へらく、日月輝を失ひて、天地既に崩れぬべし、自今以後、誰をか恃みまつらめや」と記してゐる。我々は、明治天皇の崩御に於て、この光景を目擊し、日月輝を失ひ、天地崩れぬべしとは、まさしくこのことかとの感のあつたことを昨日のごとく記憶してゐる。

然し、これ等は、國民の父母たるやんごとなき御方のことにて、まさしく然か在るべきであるが、臣下として、元帥のごとくその死を悼まれたことは、近代誠に稀有のことである。たゞ、前太政大臣三條實美公の薨去に會し、國民悉く師父を失へるごとく、闇夜に星影を見失へるごとく、上下哀悼せざるなかつたといはれたが、元帥の死はこれにも超ゆるものがあつたのである。私は水交社の英靈への參拜、國葬の儀、多摩墓地に至る沿道の民の堵列奉送を目擊して特にこの感を深くしたのである。

元帥が國民の敬慕、哀悼を、かくも一身に集めたる所以はいづこにあつたのであらうか。これは大東亞戰爭未だ半ばならざるに、國民の最も信賴せる聯合艦隊司令長官を失つたといふ悲哀失望感にも因ることあるはいふまでもないが、元帥その人に對する敬慕・愛惜の念も亦尠しとしないのである。その緣因はいづこにあつたであらうか。それは、元帥の人と成りと、その功績とに歸することであらう。その功績はいふまでもないが、その人と成りは、何故にかくも、普ねく國民に愛惜敬慕されたであらうか。それは元帥が日本民族の典型的人物であつたから、また日本人の最も尊敬する性格、最も好む性格を有してゐたからであるといはれよう。

日本人の最も尊敬し、最も好む性格とは何であらう。私は、これを我が歷史に考へれば自ら明かであると思ふ。我が國民の最も尊敬する偉人は菅原道眞であり、楠木正成であり、吉田松陰であり、東郷元帥であり、乃木大將である。最も好む偉人は近代では西郷隆盛であり、伊藤博文であると思ふ。何故にこれ等の人々が尊敬せられ好まれるのであらうか。これ等の人々は決して同一の性格ではないが、日本人として日本民族として共通したものを有するからである。

楠木正成はその誠忠義烈、一身一家を捧げて皇國に殉じたるばかりでなく、七生滅賊の精神に存するのである。故に、死を決して戰陣に臨むに際して正行を誡め、「正成已に討死すと聞なば、天下は必ず將軍（高氏）の代に成ぬと心得べし、然りといへども、一旦の身命を助らん爲に多年の忠烈を失て降人に出ることあるべからず、一族若黨の一人も死殘てあらん程は、金剛山の邊に引籠て、敵寄せ來らば命を養由が矢さきにかけ、義を紀信が忠に比すべし、是ぞ汝が第一の孝行ならんずる」と諭してゐる。かくて、楠氏の一門は汗血を傾盡して王事に盡瘁し、吉野朝は五十有七年の存立を保つことを得たのである。この櫻井の里に於ける楠公父子の訣別のごとく痛烈な感激を國民に與へるものは、

露光量違いの為重複撮影

德太子の推古天皇二十九年二月五日薨ずるや、上下國民の哀悼洵に甚しかつた。日本紀には、「是の時、諸王諸臣及天下の百姓悉く、長老は愛兒を失へるが如くして、あぢはひ口に在れども嘗めず、少幼者は慈父母を亡へるが如くして哭泣つる聲行路に滿てり、乃ち耕夫は耜を止め春女は杵せず、皆曰へらく、日月輝を失ひて、天地既に崩れぬべし、自今以後、誰をか恃みまつらめや」と記してゐる。我々は、明治天皇の崩御に於て、この光景を目擊し、日月輝を失ひ、天地崩れぬべしとは、まさしくこのことかとの感のあつたことを昨日のごとく記憶してゐる。

然し、これ等は、國民の父母たるやんごとなき御方のことにて、まさしく然か在るべきであるが、臣下として、元帥のごとくその死を悼まれたことは、近代誠に稀有のことである。たゞ、前太政大臣三條實美公の薨去に會し、國民悉く師父を失へるごとく、闇夜に星影を見失へるごとく、上下哀悼せざるなかつたといはれたが、元帥の死はこれにも超ゆるものがあつたのである。私は水交社の英靈への參拜、國葬の儀、多摩墓地に至る沿道の民の堵列奉送を目擊して特にこの感を深くしたのである。

元帥が國民の敬慕、哀悼を、かくも一身に集めたる所以はいづこにあつたのであらうか。これは大東亞戰爭未だ半ばならざるに、國民の最も信頼せる聯合艦隊司令長官を失つたといふ悲哀失望感にも因ることあるはいふまでもないが、元帥その人に對する敬慕・愛惜の念も亦尠しとしないのである。その緣因はいづこにあつたであらうか。それは、元帥の人と成りと、その功績とに歸することであらう。その功績はいふまでもないが、その人と成りは、何故にかくも、普ねく國民に愛惜敬慕されたであらうか。それは元帥が日本民族の典型的人物であつたから、また日本人の最も尊敬する性格、最も好む性格を有してゐたからであるといはれよう。

日本人の最も尊敬し、最も好む性格とは何であらう。私は、これを我が歷史に考へれば自ら明かであると思ふ。我が國民の最も尊敬する偉人は菅原道眞であり、楠木正成であり、吉田松陰であり、東郷元帥であり、乃木大將である。最も好む偉人は近代では西郷隆盛であり、伊藤博文であると思ふ。何故にこれ等の人々が尊敬せられ好まれるのであらうか。これ等の人々は決して同一の性格ではないが、日本人として日本民族として共通したものを有するからである。

楠木正成はその誠忠義烈、一身一家を捧げて皇國に殉じたるばかりでなく、七生滅賊の精神に存するのである。故に、死を決して戰陣に臨むに際して正行を誡め、「正成已に討死すと聞なば、天下は必ず將軍（高氏）の代に成ぬと心得べし、然りといへども、一旦の身命を助らん爲に多年の忠烈を失て降人に出ることあるべからず、一族若黨の一人も死殘てあらん程は、金剛山の邊に引籠て、敵寄せ來らば命を養由が矢さきにかけ、義を紀信が忠に比すべし、是ぞ汝が第一の孝行ならんずる」と諭してゐる。かくて、楠氏の一門は汗血を傾盡して王事に盡瘁し、吉野朝は五十有七年の存立を保つことを得たのである。この櫻井の里に於ける楠公父子の訣別のごとく痛烈な感激を國民に與へるものは、

我が國上下三千年の歴史に於いて見ないところである。この感激は日本民族全體に通ずる感激であるのである。かくて楠公は永久に國民最高の尊敬を受くるのである。道眞、松陰及び、東郷・乃木兩將軍の尊敬せらるゝ所以も亦こゝに存するのである。

西郷隆盛、伊藤博文等の好まるゝ所以はいづこにあるか、思ふに西郷の如く無慾恬淡の人はない。子孫のために美田を買はずと、家には何等錢財を止めなかつた。參議兼近衞都督陸軍大將の榮官を以て下僕と二人づれの生活、月給は袋のまゝ棚に上げて置く、志を得ざればさつさと罷めて、郷里に歸る、犬を連れて山野に狩りするといふ高士の生活、それで胸中、いつも國家百年の大計を抱き、東洋經綸の大策を藏する、死生、榮辱を超脱し、默つて一身を門下子弟に捧げて惜むところがないといふ彼の風格には、知ると知らざるとを問はず敬慕せざるものはなかつたのである。

伊藤は隨分缺點があり、生前烈しき非難を受けたが、その不幸の最後にかざられて國民敬慕の對象となつた。明るき直き清き心に徹底した日本民族の一人で、その天眞流露する性格と無慾恬淡、至誠君恩に報ずるといふことの外には何ものもなかつた。内には立憲政治樹立の大功なり、外には東洋平和の大計を抱き、遂に異域に暴死して韓國併合の礎となつたことは、痛く國民の同情を惹ひたのである。

これ等の歴史上の人物に就いて考へれば、我々皇國民の尊敬し、愛好するは、いかなる人なるかは、自から明かであると思ふ。さうして、我が山本元帥を思はゞ、元帥の死が、近代日本に見ざる國民の愛惜敬慕を集めた所以が亦自から明かであると思ふ。元帥の忠誠は既に說いた、元帥の流露する天眞も既に說いたが、大東亞戰爭の勃發するに於て、國民最大の信頼は帝國海軍に集められ、更にその司令長官に寄せられ、遂に一躍して國民的英雄となつたが、元帥は昔日の一山本と毫も變らなかつたのである。某郷友が、赫々たる元帥の榮名に狂喜しながらも、竊かに往時の交遊を連續し得ざるを思ひ、

『陋巷の老貧書生は、榮冠に輝く他日の閣下に接するの機自然に尠かるべきを今より心細きものゝ一と致居候』

といふに對して、元帥は「有言の凱旋などは思もよらぬことだが……」しかし、

『萬一再會の機ありとしても、アッキャ、オラ、何日だつて矢つ張高野のオジだがに』

と郷土の方言を以て、戯れの中に眞情を吐露するのであつた。榮達によつて舊友を忘るゝ輕薄兒ではない。その流露する天眞は伊藤に超え、その質素は西郷にも劣らなかつた。海の猛提督も少童、少女と俱に遊ぶの童心を失はなかつた。恬淡無慾、人の爲めに謀るいかにも忠實、その詠歌雅懷は、その雄渾なる筆蹟と共に西郷、伊藤を思はしむるものがあつた。かう考へれば、元帥がその死によつて、國民上下の敬慕を一身に集めたことの決して偶然にあらざることを思はざるを得ないのである。

元帥の舊知某將軍は、元帥の人と成りを語つて、

『元帥の性格中自分の好きな點を擧げて見るなら、衒はぬこと、虛勢をはらぬこと、阿らぬこと、威張らぬこと、氣取らぬこと、チャラッポコを言はぬこと、直言すること、然諾を重んずること、信義に篤いこと、親切なこと、報恩感謝の念の厚いこと、努力すること、勇敢不撓であること、非常に實行力に富んでゐること等で……』

と列擧してゐた。これは決して一片の褒辭ではないので、こゝに附記する。

三　將に將たるの器

元帥が、古今の名將として我にあつては源義經、上杉謙信に比し、彼にあつてはハンニーバル、ナポレオン等に比肩して史上に特筆さるべき善謀勇戰の名將たることは否むべからざるところであらう。それは我々の論證を待つまでもなく、大東亞戰爭に於ける事實が說明して餘りある。畏くも誄辭はこれを盡して遺憾なく、「風行雷動未タ一歲ヲ經サルニ八タヒ竹帛ノ勳ヲ樹テ」と嘉尙したまうたのである。大東亞戰爭緖戰の戰果は、もとより大元帥陛下の大稜威を奉じた陸海將兵の共に分つところたることはいふまでもないが、水帥を督する元帥の善謀雄斷が與つて大きに居ることは、何人も認めざるを得ないのである。

元帥の先輩で、嘗て聯合艦隊司令長官であつた高橋三吉大將は、今次戰爭の直後、現下の海軍に於て元帥のごとき最適任の司令長官はないとし、元帥を信賴せよと言つて、

近代海戰に於ける勝敗の鍵は艦隊指揮官の運用の妙が、最高度に發揮されるところにかゝつてゐる。日本海大海戰の大勝利は實に東郷元帥その人の指揮運用の賜に外ならない、今山本長官と聯合艦隊の關係は、東郷元帥とその麾下に似てゐる、國民は大船に乘つた氣で、山本五十六に信賴して善い。

皇國の興廢を決した日本海々戰の敵前の大轉舵、神の閃きにも似た東郷長官の丁字戰法の大英斷はどこから生れたか、東郷長官の撓ゆまぬ自己訓練であり、もつと詳しくいへば、旅順沖の海戰に啓示があつたのである。誰でも大英斷、卽ち勘の次には私心が起り易いものだ、この私心を大いなる勇斷を以て斥け、最初の神のごとき閃きを斷行し得るもの、その人こそ非凡なる指揮官たり得る。長州の志士桂彌一が、乃木將軍に送つた言葉に「私心一絕萬功成」とあるが、僕は今一片の老婆心から山本長官に期待するのも、まさにこの心境だ、彼の太い膽つ玉、緻密な頭腦、海上二ヶ年の猛訓練に磨をかけ、ものをいふときが來たんだ（昭和十七年一月第一回大詔奉戴日）

と述べてゐた。高橋大將は、元帥の航空戰の經驗と多年の猛訓練と、私心なき心境に最大なる信賴を置き、その前途に期待したのである。その期待は誤らなかつた。元帥の發揮した作戰運用の妙とその戰果の偉大さとは古今東西の名將を凌ぐものがあつたのである。その戰果は既に述べたが、開戰以來、

昭和十八年五月二十六日までの戰果は、擊沈戰艦十三隻、航空母艦十一隻、巡洋艦その他の艦艇の擊沈破五百五隻、船舶四百八十四隻、飛行機擊墜破四千八百二十六機に達し、これに對する我が損害は飛行機に於てさへ十分の一に至らず、戰艦、航空母艦、巡洋艦等七隻に過ぎないのである。かやうなる華々しき大戰果が、これまでの海戰に於てあつたであらうか。從來の戰爭なりせば勝敗の決は既に決したのである。

新戰術の創始者

しかし元帥が名將たるは、その大戰功だけでない、元帥が古今の名將の誰彼のごとく、新戰術を案出し、世界戰史に一大紀元を劃したことに存する。織田信長が名將として天下統一の基礎を作つたのは、當時の新武器たる鐵砲を極度に實戰に利用するの戰術を創始したからである。鐵砲は傳來以來三四十年に及び、毛利元就、武田信玄等は既に實戰に應用してゐたが、信長はこの鐵砲を以て、隊伍を組織して第一線に配置し、次に槍隊を置き、木柵を軍前に作つて、その內側に銃隊を列し、敵の近距離に進み來るを待つて一齊に射擊し、敵兵の混亂するに乘じて、槍隊を以て突擊するといふ新戰法を案出し、これを以て猛將武田勝頼の大軍を長篠に殲滅したのである。信玄以來練りに練つた甲州軍も、信長の新戰術の前に潰れ去つたのである。

ナポレオンの成功は、革命後フランス青年の心理をつかみ、高度の訓練を要する橫隊戰術を捨て、散兵戰術を採用し、各兵の自由尊重を指導精神とする新戰術を案出したところにある。その他古今の名將、我が楠木正成、支那の諸葛孔明、近くは東鄕元帥、佛國のフォッシュ元帥等、いづれも新戰術の創始者たらざるはなかつたのである。

山本元帥が亦この新戰術の案出者たることはいふまでもない。航空機は歐洲第一次大戰に於て、既に盛んに使用され、その發達は遙かに我が國を凌駕してゐたが、未だ歐米の何人も海戰の主力とするまでには考へ及ばなかつた。この航空機を極度に近代海戰に應用し、新戰術を創始したのは實に元帥であつたのである。眞珠灣の大空襲と南支那海の航空部隊の偉功は世界を驚倒せしめた。これまで戰艦は飛行機では到底沈沒せしめ得ないとされてゐた考へを一變したのである。世界海戰に一大劃期がもたらされた。これは、我が山本元帥によつて創始された新戰術である。

信念と勇氣

名將として更に重大の資格は、善慮深謀、一度決心した作戰は、いかなることがあつても必ず遂行するといふ强剛なる意志である。かの眞珠灣大襲擊の作戰のごとき、敵の最大軍港、數十隻の大小艦隊、數百の飛行機を有し、設備の完全を誇る根據地を、潛水艦や飛行機で一擧に屠らんとする如き作戰は從來何人も夢想だも爲し得ざる最大冒險の戰法であつた。それは東鄕元帥が、日本海で、敵前に丁字戰法を取つた以上の大難事である。若しこれが失敗すれば帝國艦隊も航空戰隊も全く覆滅するの

である。されど元帥はこの外に緒戰の策なしとし、一切を犧牲にしてこの戰法を斷行したのである。元帥が

大君の御楯とたゞにおもふ身は名をも命も惜しまざらなむ

といふのはこの心事である。萬一失敗すれば、古今第一の暴將の汚名を受くるかも知れないが、そんなことは問ふところでないといふ悲壯の大決心に出でたのである。

思ふに古今の名將が乾坤一擲の大戰爭を決行するときの心事は、いづれもかゝるものであらう。この大勇猛心が大信念を擁護するのでなければ、いかなる戰術も作戰も成就しないのである。

士心の收攬

名將として見のがせぬ重大資格の一に、元帥の有したる上下の信頼と聲望、人心の收攬といふことがある。これまで聯合艦隊司令長官として二年以上勤續したものはなかつた。多くは一年で更迭した。然るに元帥は二年勤續したときに大戰が勃發した。元帥も先例に則つて、その職を辭せんとしたが、來るべき大戰爭を遂行し得るは、元帥の外にその人なしといふ海軍上層部の意見で遂に留任することになつたといはるゝ。

更に元帥の留任を餘儀なくさせたのは、我が聯合艦隊將兵全部の絶大なる信頼であつたといはれる。我が海軍に智將勇將その人に乏しからずと雖も、元帥のごとく部下將兵の信頼を一身に集めた人は、東郷元帥以來、未だ嘗てなきところである。山本元帥部下の某參謀は、嘗て元帥を語り「この人の爲めならば、この人の命令とあらば喜んで水火の中にも飛びこんで行けると思つた」といひ、その後二十數年の今日まで、この考へが變らないといつて、「一生これを持ち續け得ることをこの上もなく有り難く思つてゐる」といひ、また、「かやうの感激は大小の差こそあれ、部下として働いた者は誰も持つてゐると思ふ」といつてゐたのである。

元帥はかやうにたくまずして人心收攬の妙を得てゐた。元帥はその部下を、いや、その接する人を悉くかやうに魅了したのである。嘗て元帥の部下とし、某艦の艦長であつた某中將は、元帥を語つて、「實に幅も奥行きも廣く深い方で、老若男女上下誰にも好かれる人德の人であり、同時にどんな善人とでも、又どんな惡人とでも交際へるといつた、所謂清濁併せ呑む達人たり、棟梁たり、將に將たる方であることを身を以て知り得た」といひ、また「吾々から見れば、公私何事に限らず、一切をぶちまけて御話しの出來る、此の上なく信頼感に滿ちた上長たり、先輩であつた」といつて、更にその理由を說明し、これは元帥の聰明であり、誠意であるからであるといつてゐた。

『元帥は嘗て部下某のことを誠意聰明の人といつたことがあるが、この語は全く誰よりも故元帥自身に能く當嵌まる言葉であると思ふ、吾々が公私どんな事でもぶちまけて御話し出來るといふのは、要するにどんなことを話しても、元帥の聰明は必ずや秘すべきは秘し、取捨を誤らず、認識の

ピントが外れる樣なことがないといふ安心が潜在し、またその誠意は決して御座なりや、有耶無耶に事をすます樣な方でないといふ信賴に滿ちて居るが故に外ならぬのである』。

聰明であるから、人の長短得失を知り悉くし、誠意であるから、人を腹中に容れ、人をして總べて を捧げしめ得るのである。元帥が、地方長官一同を横須賀の聯合艦隊旗艦に招待したとき、一砲術長 を一同に紹介して、

『皆さん、この砲術長は日本一、いな世界一の砲術長であります、この人の狙つた砲彈は百發百中 中らざるはない、この砲術長あるかぎり如何なる敵も怖るゝに足りない』

といつた。かやうの語は、聰明の人、誠意の人にあらざれば發し得ぬことであるが、かく紹介された 砲術長は、元帥の爲めには死を辭せざるにいたることはいふまでもなからう。

某中將は、元帥の人心收攬をその無邪氣と純眞と潑剌たる元氣とに置いた。曰く、

『愉快なことがあると、これこれで實に愉快であつたと笑つて喜ばれるさまは實に無邪氣で、子供 のやうで將軍などとは思はれない。身體も極めて强健で、一晩位徹夜しても平常と少しも變らぬ勤 務をされた。心身ともに旺盛で、若い者もかなはない、從つて鬪志も極めて旺盛であつた。若い士 官達が偉い方だと思つて敬服すると同時に、非常に親しみを感じてなついたのは、元帥の無邪氣さ、 純眞さと、氣も體も潑剌として居つた若さの點にもよるのである。』

思ふに元帥の人心收攬、魅了の要は、その部下に對する誠意熱情にあつたのである。これは古今の 名將に共通した點である。昔、支那の戰國時代の魏に吳起といふ名將があつた、その人と成りは貪つ て色を好むといふ感心出來ない人物であつたが、兵を用ふることは天才であつた。この人が軍に臨む ときは、最も下等な士卒と衣食を同じうし、臥するに床を設けず、行くに馬に乘らず、自から糧食を 荷つて行くといふありさまで、士卒と全く勞苦を分つた。或るとき、士卒の一人に疽を病むものがあ ると、吳起は口づからその卒の膿を吸ひとつた。その卒の母がこれを聞いて聲をあげて泣いた。傍人 が、汝の子は卒ではないか、將軍が自からその疽の膿を吸ふとは、眞にありがたいことではないか、 といふと、その母は、いやありがたいどころか、前年その子の父が疽を病んだとき、吳起はそれを吸 つてくれた、感激した父は、その後の戰に踵を旋さずして戰死した。然るに吳起は今またその子を吸 うた。彼もやがて起のために死するであらう。私は夫も子も失ふことになる、泣かずに居られないと いつたと傳へられてある。

戰陣に臨む將軍には、この吳起が部下士卒の疽の膿を吸ひとるといふ熱情がなければならぬ。かく して士卒がその將のために死し得るのである。元帥は部下に對してこの熱情を持つてゐた。皇國のた めには躊躇なく部下に死を命じ得ると共に、その死には限りなき熱情、溢るゝ愛惜を示した人であ る。この熱情あればこそ出陣に臨んで、「各員は本職と死生を俱にせよ」と訓示し得たのである。

元帥は、いつも軍を統率するに實踐躬行、陣頭指揮をやつてゐた。六韜といふ兵書に、周の太公が武王に、大將に三勝ありと告げ、

第一は禮將といふ、冬は裘を服せず、夏は扇を操らず、雨降るも蓋を張らず、かくせざれば士卒の寒暑を知ることが出來ないからである。第二は力將といふ、隘塞を出で、泥塗を犯すに、將必ず先づ馬を下りて步す、將身に力に服せざれば、士卒の勞苦を知ることが出來ない。第三は止欲の將といふ、軍が皆宿をとつて將乃ち舍に就き、炊く者皆熟して將乃ち食に就き、軍火を舉げざれば將も亦火を舉げず、將止欲にあらざれば士卒の饑飽を知ることが出來ない。將、士卒と寒暑、勞苦、饑飽を共にすれば三軍の衆始めて將のために先を爭うて進む

と大將たるものゝ秘訣を敎へたとあるが、元帥は全くこの敎へを實行してゐたのである。その性格と修養とは自然にこれを行つてゐたのである。

山本元帥が古今の名將として永く戰史をかざる所以は、以上のごとき諸點にあると私は信ずるのである。

四　皇國の聖將

たゞ名將と稱するだけでは、未だ元帥を盡したものではない。皇國日本の名將の概念は外國の名將の有する概念と異なるものがある。前に述べた貪つて色を好むといふ吳起なども支那では名將と稱し得ようが、日本では許されぬ。ネルソンでさへ、日本では名將と許さないのである。皇國日本の名將は眞個皇國の武人であらねばならぬ。我々はかやうの武人を聖將といふのである。

聖將とはいかなる將をいふかに就いては既に述べた。私は、その成就した功績にあらずして、その功績の地位に居るの心術の如何にありとし、山本權兵衞と山縣有朋とを評し、兩人は名將たらんも聖將にあらず、近代日本に於て聖將と許し得るは東鄕元帥と乃木大將あるのみといつて、東鄕元帥の大功を自覺せざるかのごとき謙虛の心事を稱し、聖將の資はここにありといつた。山本元帥がまたかやうの人であることをいつたが、私は再び、皇國聖將の資格を論じて、このことを論證しよう。

皇國の聖將は、楠木正成が後醍醐天皇の勅を奉じて北條氏を征するとき、「正成一人未だ生て在と被聞候はゞ、聖運遂に可被開と被思召候へ」と奏したごとく、東鄕元帥が日本海々戰に臨むに際し、「誓つて增遣艦隊を擊滅して宸襟を安じて奉ります」と奏したごとく、大稜威を奉じ、絕對必勝の信念を以て、大君の御楯となるといふ精神の外に何ものもないのである。山本元帥の今次戰爭に於ける用意の、一にそこにあつたことは屢々述べたところである。元帥はこの精神を

千萬の軍なりとも言擧せずみことかしこみい向ふわれは

といつてゐた。皇祖皇宗の神靈に絕對の信賴を捧げ、その大稜威の下に、一億國民の輿望を負うて醜

虜を撃滅せんとして出で立つ皇國武人に何ものか敵するものあるべき。東郷元帥は、「天は必ず正義に與し、神は必ず至誠に感ず」と信じて疑はなかつたのである。

おろかなる心につくす誠をはみそなはしてよ天つちの神

と詠じて、至誠に一貫したのである。この精神はまた山本元帥の精神であつた。

天皇のみ楯とちかふま心はとゞめおかまじ命死ぬとも

といふ外には誓ふ何ものもなかつたのである。大戰勃發の夏のこと、長岡の知人、西山夫人に宛てた書翰の一節に、

併し之が浮世なり、此先二年の間に日本がどうなるか、從つて私も最後の御奉公をどんな風に務め上げる事になるか、夫れらはすべて神命と考へて居ります

とある。すべて神命と信じ、たゞ努力し至誠を致すのみである。かくて元帥は、今次戰爭に臨むに生還を期せなかつた。而して米國の南太平洋の反擊が開始されるや、「あと百日の間に小生の餘命は全部すりへらす覺悟に御座候」といつて、ソロモン數次の海戰に臨んだのである。畏くも、神宮御親拜を拜聞して恐懼感激、頭髪悉く白からざるの不忠を深く愧ると愈々善謀勇戰して止まなかつたのである。元帥の求むるところは功名にあらず、富貴にあらず、生命亦惜むところではない。たゞ一に聖慮を安んじ奉ることであつた。元帥の心事はまさしく大楠公のそれであり、東郷、乃木兩將軍のそれであつたのである。山本元帥を名將といふに止まらず、皇國の聖將といふ所以はこゝにあるのである。

私が元帥未だ死せずといひ、元帥に學べといふ所以も亦こゝにある。皇國日本人は、元帥のごとく總てを大君に捧げ、大君のために生き、大君のために死せねばならぬのである。佐久良東雄は

ちりひとつわがものはなき世の中に君の惠みをわすれざらなむ

と觀じてゐたが、この國體觀に徹底せば、何人も我が生存の目的がこの外にない、この外につとむることがないことを知り得るのである。これが、平時といはず、戰時といはず皇國日本人の覺悟であらねばならぬ。山本元帥はこの皇國民の覺悟に終始したのである。我々國民の元帥に學ぶところはこゝにあらねばならぬ。戰局益々苛烈を極め、國難日に加ふるに於て、元帥の偉勳は愈々仰がれ、その精神はいよいよ敬慕さるゝのである。

附

錄

山本元帥の國葬に陪して

——日比谷齋場にて——

山本元帥國葬の儀は、深仁なる御軫悼の下に只今嚴かに執り行はれた。一億國民は心からの哀悼を以てこれを奉送した。私は知友の一人として式典に陪し、參拜の光榮に浴した。往を偲び來を想ひ、萬感交々迫つて座に堪へざるものがあつた。こゝに瞑目して、その所感の一端を述べ、元帥の靈に捧げたい。

私は今日に至つて、元帥の勳功の高きと戰死の意義とがはつきりと理解されたこゝちがする。昔、文天祥は「人生古より誰か死なからむ、丹心を留守して汗青を照す」と詠じて、自ら在囚の苦を擇び、藤田東湖は「死しては忠義の鬼と爲り、極天皇基を護らむ」と皇國民の志を述べてゐたが、元帥は限りなき恩寵と榮光の下に千古汗青を照らし、極天皇基を護るの實を擧げ得たのである。古より武人の死としてこれ程光榮の死があつたであらうか。

日清の役、元帥山縣有朋は第一軍司令官として出征したが、征戰未だ半ばならずして安東縣軍司令部に病を養ふ身となつた。その症狀輕からざるものあるを以て、部下將官、大本營諸將も悉くその歸還を勸めたが、元帥は屍を馬革に裹むは武人の常であると稱して肯かず、纔かに明治天皇の特使によ

つて歸還の途に就いた。山縣元帥はこれを歎じ「老生終生の遺憾の事に候、然れども優渥なる叡慮又奈何とも難致」云々といつてゐた。後年、伊藤公がハルビン驛頭に於いて兇彈に斃れたことを聞いて、元帥は、「私は武辨として其の最後が如何にも欽羨に勝へない、」といつたといふのは、佯はらざる感情であつたのである。死は惜しむに足らず、たゞ死處を得んことを欲するといふのが、我が皇國武人の眞情であるとすれば、山本元帥のごとき死がいづこにあるであらうか。

大東亞戰爭は未だ半ばならずと雖も、その赫々たる戰勝は、もとより大稜威の然らしむるところとはいへ、元帥の善謀雄斷亦與つて極めて大なるものがある。忝じけなくも、

聖上陛下の

出テテ水帥ヲ督スル善謀豫メ彼我ノ勢ヲ審ニシ雄斷克ク勝敗ノ機ヲ制ス風行雷動未タ一歲ヲ經サルニ八タヒ竹帛ノ勳ヲ樹テ鷲搏鵬擊遠ク萬里ニ亙リテ兩ナカラ空海ノ權ヲ握ル

と稱したまうた所以である。その勳功の高き蝦夷追討の坂上田村麿、元寇擊攘の北條時宗と雖も、これにまさることがない。

しかもこの偉勳を奏し、聯合艦隊司令長官といふ最高官を以て自ら身を飛行機に托し、陣頭指揮中に敵彈に殪れたといふ壯烈の死に至つては、古今東西にその比を見ない。たゞ大楠公にその忠誠を求め得るのみである。

人或は元帥が重責を以て自からその危險を冒したるを遺憾とするやうだが、これは我が海軍の傳統戰術を解せず、皇軍の精神を知らざるためである。東郷元帥は嘗て「海戰で勝を制するの極意は、旗艦が常に先頭にあつて艦隊を率ゐ、微細なる戰機を捕へてこれに應ずるの外にない、亂軍になれば益益旗艦は先頭に進まねばならぬ、さうすれば必ず追航するものも出來、隊列も回復し、勝を得るに至る」といつてゐた。この旗艦先頭を山本元帥は航空戰に應用したまでゞある。これは航空戰の研究とその準備に半生を捧げ、海戰に一大革命をもたらした元帥として當然のことではあるまいか、若し東郷元帥をして山本元帥の地位にあらしめば、同一のことを行つたことに疑ひがないのである。

我が皇軍の精神は、勅諭に示され、また戰陣訓に訓ゆる如く「任務は神聖なり、責任は極めて重し、一業一務忽にせず、心魂を傾注して一切の手段を盡し、之が達成に遺憾なきを期すべし」といふにある。元帥はその司令長官といふ任務、責任を遂行するに心魂を傾注し、一切の手段を盡したに過ぎないのである。元帥にはたゞその任務を完遂するといふ精神があつて、死生といふごときことは眼中になかつたのである。これは皇國古今の忠臣の擇ぶ道で、乃木大將が旅順の攻圍軍に於て、とかく危險の地位に身をさらすといふので、副官、參謀を痛く憂慮せしめたといふことゝ同一である。

更に元帥の純眞なる性格を知る私は、元帥が、上大元帥陛下の御信賴と恩寵を拜し、下一億國民の信望を思ひ、眞珠灣攻擊以來の部下將兵の死を見ること歸するが如き誠忠の行動を視ては、自己を顧

るの暇のなかつたことを思はずには居られないのである。元帥は最近友人に書を與へて、大元帥陛下の宸憂のさまを拜しては、前線司令の任にある自分の頭髪が悉く白からざるを恥ぢるといふ意を告げてゐた。私はこゝに元帥の總てを理解し得た感がある。

若しまた元帥が山縣元帥のいふごとき意を以て自ら死處を擇んだものと思ふものがあらば、これまた元帥を知らざるの甚だしきものである。元帥の求むるところ、擇ぶところは功名にあらずして至誠にあつた、たゞ宸慮を安んじ奉らんとするにあつた、その死處のごときは問ふところでない。

こゝに於て、私は元帥未だ死せず、その死といふは假りの軀殼の死に過ぎずといはざるを得ない。元帥の精神に至つては凛冽として千古に生き、永久に護國の鬼となつて皇基を護りつゝあるのである。私が元帥の死處を得たりといひ、死の意義を理解したといふ意はこゝにあるのである。式典に陪して感激いふところを知らず、直ちに筆を執り思ひを述べてこの稿を草す。

（昭和十八年六月五日午後一時）

斂葬の儀を拜して

——多摩墓所にて——

「雲山蒼々たり、江水洪々たり、先生の風は山高く水長し」といふ古人の語は、また山本元帥に對する私の衷情である。

日比谷の嚴儀を終へた元帥の英靈は百萬都民に送られ、折柄の武藏野の薫風に迎へられて、こゝ多摩墓地の奥津城に着した。私も斂葬の儀を拜せんとこゝに先着した。

松柏や櫻樹の翠巒にかこまれた幽邃な靈域に、日本海の海戰を指揮した聖將東鄕元帥と相並んで永劫に鎮まり、その英靈は永く皇國の前進を護らんとするのである。

私はこゝ斂葬の儀に列し祭主義正氏の思慕の情あふるゝ斂葬の詞を聽きながら、哀悼の涙にむせび、今更のごとく元帥の高風勳功山の如く高く、水の如く洋々たるを感ぜざるを得ない。

戰陣訓は皇軍の本質を述べ「常に大御心を奉じ、正にして武、武にして仁、克く世界の大和を現ずるもの是神武の精神なり、武は嚴なるべし、仁は遍きを要す」といつてゐる。こゝに皇軍の正しき姿が示されてゐるが、思ふに元帥は、この皇軍の正しき姿をば身を以て全世界に示現されたのである。

東鄕元帥が聖將として永く國民の絶大なる欣慕をうけ、いま山本元帥が一億の心をうごかし、國民

に痛惜さるゝものは一にして二でない。その峻嚴な武人の剛直、信念と併せ持するに、あふるゝごとき溫情があつたからではあるまいか。勿論、兩將の永久に國民の腦裡に刻まるゝところのものは、その赫々たる海戰の功績であらうが、たゞ單にそれのみを以て兩將を律してはならぬ。洵に孔子の、

「一言にして以て終身之を行ふべきあり、それ恕か」の言の如く、兩將の今日の聲望と尊敬を享けしむる所以のものは、武を裏付くるに仁愛の情を以てしたところにあるのではあるまいか。いま東鄕元帥の靈域に隣して鎭まりし元帥の靈舍を拜して、切にその感を深くするのである。

元帥はもはや永劫に護國の神靈となつて、再び相語るに由もないが、この元帥が身を以て示した範と、輝く武勳とに對して、われら國民はいかなる道を以て應ふべきであらうか。

思ふに元帥の國民に與へたものは偉大であつた。生きては太平洋上幾多の海戰に、頑敵米英の艦隊を擊滅し、その重厚沈毅の人格は國民に限りなき信賴を與へ、死しては必勝のその信念をさらに强固ならしめ、國民をして悉く背を裂かしめた。しかし、國民はたゞそれのみであつてはならぬ。

昭和四年五月二十七日、東鄕元帥が小笠原中將をして代放送せしめた日本海海戰滿二十周年の追憶談中には、次の言葉がある。

『私共が本分を盡す上に於て、平時と戰時との區別はございませぬ、輕重もございませぬ。何時如何なる場合にも唯々至誠を以て一貫すべきのみで、其の他を顧みるの必要は更にあるまいと思ひます、』

といひ、これこそ皇軍の光輝を增す道であり、同時に世界平和を築き、海戰に生命を捧げ或は傷つき病に臥した戰友に報ゆるの道である旨を諭してゐる。

山本元帥の戰死に對しても、またかくあらねばならぬ。徒らに內容空虛な誇大な言辭を千萬言費すよりも、たゞ至誠默々として挺身する實踐の一刻こそ大切なのである。

元帥が今次聖戰に出動する際、感懷を國風に托して、

國を負ひていむかふきはみ千萬の
いくさなりとも言擧げはせじ

と、默々として自己の本分をひたすらに實踐し來つたことは、大いなる國民への示唆でなくてなんであらう。

それは日露の役に東鄕元帥が、明治天皇に拜謁を仰付けられた折、たゞ一言、「誓つて敵艦隊を擊滅して宸襟を安んじ奉ります」と奉答せしと志は一である。彼の志は此の志であり、此の志はまた彼の志であつた。それは「大敵たりとも恐れず、小敵たりともあなどらず」といふ軍人勅諭の聖旨そのまゝの言行である。ひたすらに聖慮を安んじ奉らんとする至誠の發露である。

元帥の偉靈はこの幽邃な靈域に鎭まつたが、その精神は一億國民の胸にもえてゐる。國民は直ちに

それを實踐にうつせば良いのである。一切は「言擧げせず」して默々と實踐し、「誓つて宸襟を安んじ奉る」ことである。かくしてはじめて元帥の靈に應ふるの道に盡すといふべきである。

顧れば往事茫々、感極まり情みだれ、述べんと欲するも筆硯遲々として進まぬ。たゞ祈るは元帥の神靈永へに安らけく、國民の奉公の至誠いよ〳〵敦からんことのみである。肅然としてかの蒼穹を仰ぎ、老軀猶及ばずとも、ひたすらに元帥につゞかんことを念じてこの稿を終へる。（同日午後八時稿）

山本元帥年譜

明治十七年（一歳）
四月　四日　新潟縣長岡町玉藏院町にて高野貞吉六男として誕生、父五十六歳の子たるを以て五十六と命名す。

明治十八年（二歳）
十二月二十三日　內閣制度創始、太政官を廢して國務大臣を置く。

明治二十年（四歳）
三月十四日　海防費補助の詔勅發せられ、宮禁の儲餘三十萬圓を下賜したまふ。

明治二十一年（五歳）
八月二十八日　海軍大學校を東京築地に設置さる。

明治二十二年（六歳）
二月十一日　大日本帝國憲法公布さる。

明治二十三年（七歳）
二月十一日　金鵄勳章制定さる。
三月三十一日　明治天皇名古屋地方に於て最初の陸海軍大演習を行はせたまふ。
四月　一日　新潟縣長岡町阪之上尋常小學校に入學す。
十月三十日　教育に關する勅語渙發せらる。

十一月二十四日　第一回帝國議會開會さる。

明治二十四年（八歳）

五月十一日　露國皇太子大津に於て傷けらる。

明治二十六年（一〇歳）

二月十日　此年政府議會衝突す、この日和協の詔下り、六ヶ年間毎歳内帑金三十萬圓を軍艦費に下賜せらる。

明治二十七年（一一歳）

八月一日　清國に對し宣戰の詔勅下る。

八月八日　義勇兵に關する詔勅下る。

九月十三日　大纛を廣島に進めらる、この日軍艦東京を發す。

九月十七日　元帥の叔父海軍大佐野村貞高千穂艦長として黄海に活躍す。

明治二十八年（一二歳）

四月十七日　日清講和條約及び別約調印成る。

五月十三日　平和克復、遼東半島還付につき陸海軍人に勅諭を賜ふ。

明治二十九年（一三歳）

四月一日　新潟縣古志郡立長岡尋常中學校に入學す。

明治三十一年（一五歳）

一月六日　獨國膠州灣を租借す。

一月十九日　元帥府條例制定さる。

三月二十七日　露國旅順大連灣を租借す。

明治三十三年（一七歳）

五月十二日　清國直隸省内に義和團匪起る。

五月十九日　海軍省に教育本部其他新設さる。

明治三十四年（一八歳）

三月　新潟縣立長岡中學校を卒業す（明治三十三年四月一日縣立移管となれり）

七月十三日　北清事變戡定、陸海軍人に勅語を賜ふ。

十二月十六日　江田島海軍兵學校に入學す。

明治三十五年（一九歳）

三月四日　日英攻守同盟締結につき、海軍大臣山本權兵衛等に勅語を賜ひ、海軍の任務益々重きを告げたまふ。

明治三十六年（二〇歳）

六月二十三日　對露問題に關して御前會議、對露方針決定す。

十二月二十六日　冬季休暇を利して上京の途、濱川神社に詣づ。

明治三十七年（二一歳）

二月四日　對露問題に關して御前會議、開戰と決す。

二月五日　露國と國交斷絶、陸海軍人に勅語を賜ふ。

二月十日　露國に對し宣戰の詔勅下る。

十一月十四日　江田島海軍兵學校卒業、海軍少尉候補生として「韓崎丸」乘組を命ぜらる。

明治三十八年（二二歳）

一月　一日　旅順要塞陥落す。

一月　三日　裝甲巡洋艦「日進」乗組を命ぜらる。

二月十一日　陸海軍人に酒肴料金十萬圓を賜ふ。

三月　十日　奉天大會戰、後年この日を以て陸軍記念日と定む。

五月二十七日　我が聯合艦隊露國太平洋第二第三艦隊と日本海に戰ふ、元帥「日進」艦上に戰傷し、右下腿部に大火傷を負ひ、左手指二本を失ふ。

五月三十日　聯合艦隊司令長官東郷平八郎に勅語を賜ひ、日本海海戰の大捷を嘉したまふ。

八月三十一日　海軍少尉に任ぜられ、横須賀鎮守府附を命ぜらる。

九月　五日　米國ポーツマスに於て日露講和議定書に調印さる。

十月十六日　平和克復につき陸海軍人に勅語を賜ふ。

十月二十二日　聯合艦隊横濱に凱旋す。

十一月十七日　明治天皇伊勢皇大神宮に御親拜、平和克復を奉告したまふ。

十二月十二日　横須賀海兵團附を命ぜらる。

十二月二十日　韓國に統監府を置く。

明治三十九年（二三歳）

二月二十四日　巡洋艦「須磨」乗組を命ぜらる。

四月　一日　明治三十七八年戰役の功により勳六等單光旭日章及金三百五十圓を賜ふ。

八月　三日　戰艦「鹿島」乗組を命ぜらる。

十二月二十日　海防艦「見島」乗組を命ぜらる。

明治四十年（二四歳）

四月二十二日　三等驅逐艦「陽炎」乗組を命ぜらる。

八月　五日　海軍砲術學校に普通科學生として入學す。

九月二十八日　海軍中尉に任ぜらる。

十二月十六日　海軍水雷學校に普通科學生として入學す。

明治四十一年（二五歳）

四月二十日　三等驅逐艦「春雨」乗組を命ぜらる。

六月十五日　巡洋艦「阿蘇」乗組を命ぜらる。

九月　七日　巡洋艦「阿蘇」練習艦隊に編入さる。

十月十三日　國民勤儉の詔勅下る、世に之を戊申詔書と稱す。

十一月三十日　舞鶴を發し、韓國及清國に回航す。

十二月三十日　佐世保に歸著す。

明治四十二年（二六歳）

三月十四日　横須賀を發し北米へ回航す。

七月十九日　函館に歸著す。

十月　一日　練習艦「宗谷」分隊長心得を命ぜらる。

十月十一日　海軍大尉に任ぜられ、「宗谷」分隊長を命ぜらる。
十一月二十一日　三田尻を發し、清國へ回航す。
十二月十四日　佐世保に歸着す。

明治四十三年（二七歳）

二月一日　横須賀を發し、濠洲方面へ回航す。
七月二日　宮島に歸著す。
七月二十五日　横須賀鎮守府附を命ぜらる。
八月二十二日　日韓併合條約調印さる。
八月二十九日　韓國併合の詔下る。
十二月一日　海軍大學校に乙種學生として入學す。

明治四十四年（二八歳）

五月二十二日　海軍大學校乙種學生教程を卒業し、即日海軍砲術學校高等科學生として入學す。
十二月一日　海軍砲術學校高等科學生教程を卒業し、即日海軍砲術學校教官兼分隊長、海軍運用學校教官を命ぜらる。

明治四十五年（二九歳）

七月三十日　明治天皇崩御、即日大正天皇踐祚、大正と改元せらる。

大正元年

九月十三日　明治天皇御大葬儀を青山練場殿に行はせらる。

十二月一日　佐世保豫備艦隊參謀を命ぜらる。

大正二年（三〇歳）

二月二十一日　嚴父高野貞吉翁郷里に於て逝去、享年八十四。
五月二十一日　海軍省の行政整理廢表さる。
八月二十七日　母堂ミネ子郷里に於て逝去、享年六十八。
九月二十日　大正二年度海軍小演習の青軍艦隊參謀を命ぜらる。
十二月一日　巡洋艦「新高」砲術長を命ぜらる。

大正三年（三一歳）

一月二十三日　シーメンス事件起る、山本首相以下海軍への攻擊劇し。
四月十一日　昭憲皇太后崩御、御年六十五。
五月二十七日　横須賀鎮守府副官兼參謀を命ぜらる。
七月二十七日　第一次歐洲大戰起る。
八月二十三日　獨國に對し宣戰の詔勅下る。
十二月一日　海軍大學校に甲種學生として入學す。

大正四年（三二歳）

三月六日　追濱附近に於て海軍飛行機墜落、安達大尉等三名殉職す、海軍最初の犧牲者なり。
十一月七日　大正三四年戰役の功により勳四等瑞寶章及金四百圓を賜ふ。
十一月十日　大正天皇即位の大禮を行はせらる。

十二月十三日　海軍少佐に任ぜらる。

大正五年（三三歳）

三月十七日　海軍航空隊令公布さる。

九月二十日　舊長岡藩士山本帶刀の名跡を繼ぎ山本姓を稱す。

十二月一日　海軍大學校甲種學生教程卒業、即日第二艦隊參謀を命ぜらる。

十二月二十五日　病氣のため待命仰付けられ、横須賀滯在を命ぜらる。

大正六年（三四歳）

六月九日　病氣のため休職仰付けられ、横須賀滯在を命ぜらる。

七月二十二日　海軍省軍務局第二課勤務を命ぜらる。

七月二十七日　海軍教育本部部員、海軍技術會議議員の兼任を命ぜれらる。

大正七年（三五歳）

八月二日　チェッコ救援のためシベリア出兵を宣言さる。

八月四日　結婚願を提出す。（同月十六日認許あり）

八月二十日　陸海軍元帥刀を制定さる。

十月十九日　舊會津藩士三橋康守の三女レイ子（二十三歳）と結婚。

十一月十一日　第一次歐洲大戰休戰條約成立。

大正八年（三六歳）

二月十四日　國際聯盟草案發表さる。

四月五日　米國駐在を命ぜられ、五月二十日横濱出發後の地に於て海軍研究に從事す。

十二月一日　海軍中佐に任ぜらる。

大正九年（三七歳）

一月十三日　世界平和克復の詔勅下る。

六月二十六日　國際通信會議豫備會議委員國員を命ぜらる。

十一月一日　大正四年乃至九年戰役の功により旭日小綬章及金二千圓を賜ふ。

大正十年（三八歳）

七月十九日　歸朝を命ぜられ、此日横濱に歸著す。

八月十日　巡洋艦「北上」艦長を命ぜらる。

十一月十一日　米國華府に於て日英米佛國海軍軍備縮少會議を開催す。

十二月一日　海軍大學校教官を命ぜらる。

大正十一年（三九歳）

八月五日　華府軍縮會議批准成る。

十月七日　長男出生「義正」と命名す。

大正十二年（四〇歳）

六月二十日　歐米各國へ出張を命ぜらる。

六月三十日　海軍軍令部出仕を命ぜらる。

八月十七日　日英米伊佛五ヶ國海軍軍備制限條約公布さる。

九月　一　日　關東地方に大地震起る。
十二月　一　日　海軍大佐に任ぜらる。

大正十三年（四一歳）
六月　十　日　横須賀鎮守府附を命ぜらる。
六月十七日　特務艦「富士」に乗艦同艦長の命を承け、運用術を研究すべき命をうく。
九月　一　日　霞ヶ浦海軍航空隊教頭兼副長を命ぜらる。

大正十四年（四二歳）
一月　七　日　霞ヶ浦海軍航空隊副長兼教頭を命ぜらる。
五月十四日　長女出生「澄子」と命名す。
十二月　一　日　米國在勤帝國大使館附武官を命ぜらる。

大正十五年（四三歳）
一月二十一日　横濱出發、米國に向ふ。
四月　二十　日　青年訓練所令公布さる。
十二月二十五日　大正天皇崩御、寶算四十八、今上天皇踐祚、昭和と改元せらる。

昭和　二　年（四四歳）
三月三十一日　徴兵令を改正して兵役法とさる。
四月　五　日　海軍航空本部設置さる。
六月　二十　日　ジュネーブに於て日英米三國海軍軍備縮少會議開かる。

七月二十八日　ワシントンに於ける國際無線電信會議に帝國委員として參列を命ぜらる。

昭和　三　年（四五歳）
三月十五日　歸朝を命ぜられ、此日横濱に歸著す。
八月　二十　日　二等巡洋艦「五十鈴」艦長を命ぜらる。
八月二十七日　日英米獨伊等十五ヶ國の不戰條約締結さる。
十一月　十　日　今上天皇即位の大禮を行はせたまふ。
十二月　十　日　航空母艦「赤城」艦長を命ぜらる。

昭和　四　年（四六歳）
五月十二日　二女出生「正子」と命名す。
十月　七　日　英國、日米佛伊四國に對し、海軍軍備縮少會議の正式招請狀を發す。
十月　八　日　軍令部兼海軍省出仕、軍務局勤務を命ぜらる。
十一月十二日　ロンドン海軍軍縮會議の全權委員顧員を命ぜらる。
十一月三十日　海軍少將に任ぜらる。

昭和　五　年（四七歳）
一月十一日　ロンドン海軍軍備縮少會議開催さる。
四月二十二日　ロンドン海軍軍備縮少條約に調印さる。
五月二十九日　海軍航空隊令公布さる。
九月　一　日　海軍航空本部出仕を命ぜらる。

十二月　一　日　海軍航空本部技術部長兼海軍技術會議議員を命ぜらる。
十二月十五日　海軍航空機廠（假稱）設立準備委員を命ぜらる。

昭和　六　年（四八歳）

一月　一　日　ロンドン海軍軍備縮少條約公布さる。
八月十七日　參謀本部員中村震太郎大尉虐殺事件公表さる。
九月十八日　滿洲事變勃發す。
十月三十一日　勳二等に敘せられ、瑞寶章を授けらる。

昭和　七　年（四九歳）

一月　四　日　上海事件勃發す。
三月　一　日　滿洲國獨立宣言發表さる。
五月　五　日　上海日支停戰協定に調印さる。
五月十五日　五・一五事件突發し、內閣總理大臣犬養毅暗殺さる。
九月十五日　我國滿洲國を承認す。
十一月十五日　次男出生「忠夫」と命名す。

昭和　八　年（五〇歳）

三月二十七日　國際聯盟脫退に關する詔書下る。
九月二十七日　海軍軍令部條例其他改正公布さる。
十月　三　日　第一航空戰隊司令官を命ぜらる。

十月十四日　獨伊兩國國際聯盟を脫退す。

昭和　九　年（五一歳）

二月十五日　佐伯海軍航空隊新設さる。
三月　一　日　滿洲國溥儀執政帝位に即き、滿洲帝國と改む。
四月二十九日　昭和六年乃至九年事變の功により旭日重光章及金千五百圓を賜はる。
五月二十九日　東郷元帥薨去す。
六月　一　日　軍令部參謀軍省出仕を命ぜらる。
九月　七　日　昭和十年ロンドンに於ける海軍軍備縮少會議豫備交渉の帝國代表を命ぜらる。
九月二十日　帝國全權として横濱を出帆、米國經由英國に向ふ。
十一月十五日　海軍中將に任ぜらる。
十二月二十九日　ワシントン海軍軍備縮少條約廢棄を米國に通告す。

昭和　十　年（五二歳）

二月十二日　ロンドンより歸朝す。
四月十五日　展墓のため歸省、母校坂之上小學校、長岡中學校に於て講演す。
八月　四　日　國體明徵に關する政府の聲明發表さる。
十二月　二　日　海軍航空本部長を命ぜらる。

昭和十一年（五三歳）

一月十五日　海軍軍備縮少會議より脫退す。

二月二十六日　二・二六事件突發し、內大臣齋藤實等要路の大官多數暗殺さる。
二月二十七日　帝都に戒嚴令布かる。
十一月二十五日　日獨防共協定締結さる。
十二月　一　日　海軍次官に任ぜらる。
十二月　六　日　日獨伊防共協定締結さる。

昭和十二年（五四歲）

六月　令兄季八郷里に逝去、歸省す。
七月　七　日　支那事變勃發す。
八月　九　日　上海事件勃發す。

昭和十三年（五五歲）

三月二十五日　中華民國維新政府成立す。
四月二十五日　海軍航空本部長兼任を命ぜらる。
八月十二日　日ソ停戰協定成立す。
九月　三十日　軍人傷痍記章第一號を授與さる、蓋し明治三十七・八年戰役に於ける戰傷に因るものなり。
十一月十五日　海軍航空本部長兼任を免ぜらる。

昭和十四年（五六歲）

三月二十三日　勳一等に敍せられ瑞寶章を授けらる。
四月　九　日　海洋少年團結成式のため歸省す、これが最後の歸省なり。
五月十一日　ノモンハン事件勃發す。
七月　八　日　國民徵用令公布さる。
七月二十八日　米國、日米通商條約廢棄を通告し來る。
八月二十日　日英會談決裂す。
八月三十日　平沼內閣總辭職により、海軍次官を罷む。
九月　一　日　蒙古聯合政府樹立す、獨國ポーランド進擊を開始す。
九月　三　日　英佛、對獨宣戰を布告し第二次歐洲大戰勃發す。
九月二十日　聯合艦隊司令長官に親補せられ、第一艦隊司令官兼任を命ぜらる。
日ソ軍事協定成立す。

昭和十五年（五七歲）

三月三十日　汪精衛を主班とする支那新中央政府樹立さる。
四月二十九日、支那事變の功により功二級金鵄勳章旭日大綬章及金二千五百圓を賜ふ。
六月十二日　日泰和親條約調印さる。
八月　一　日　近衛內閣基本國策を發表す。
八月十五日　近衛內閣の新體制確立に應じ政黨漸次解消す。
九月二十七日　日獨伊三國同盟締結さる。
十月　一　日　紀元二千六百年式典特別觀艦式指揮官を仰せ付けらる。
十月十二日　大政翼賛會發會式をあぐ。

十一月　十　日　紀元二千六百年式典行はれ、勅語を賜ふ。
十一月十五日　海軍大將に任ぜらる。
十一月三十日　日支基本條約調印さる。

昭和十六年（五八歳）

四月十四日　日ソ中立條約締結さる。
五月　九　日　泰佛印平和條約成り、調印式を東京に行ふ。
五月十五日　從三位に叙せらる。
六月十九日　日蘭印交渉決裂す。
六月二十三日　獨伊對ソ宣戦を布告す。
七月二十五日　米英對日資産凍結令を公布す。
七月二十六日　日佛印共同防衛條約成立す。
七月二十七日　英國、日英日印日緬通商條約廢棄を通告し來る。
七月二十八日　帝國米英に對し對應處置を講ず。
七月二十九日　蘭印對日貿易を抑壓す。
八月　三　日　皇軍佛印南部に平和進駐を行ふ。
八月十一日　米國對日石油統制を強化す。
九月　二　日　第一艦隊司令官兼任を免ぜらる。
　　翼賛議員同盟成る。
十月　八　日　英、米蘭、對日石油輸出全面的停止協定を公布す。
十月十六日　第三次近衛内閣總辭職す。
十月十八日　東條内閣成立す。
十一月十一日　帝國全權大使野村吉三郎を米國に派し、野村大使を補佐せしむ。
十一月十七日　日米會談開かる。
十一月二十五日　防共協定五ヶ年延長に決し締盟國十五ヶ國に達す。米國對日覺書を手交す。
十二月　七　日　帝國對米通牒を手交す。
十二月　八　日　米英兩國に對し宣戦の詔勅下る、此日未明帝國海軍航空部隊は米國太平洋艦隊を眞珠灣に撃沈す、其他マライ、フィリッピン、ミッドウエー、ウエーキ等を爆撃す。
十二月　十　日　聯合艦隊に勅語を賜ひ、ハワイ方面の米國艦隊及航空兵力を撃沈破せる偉功を嘉せらる。
　　マレー沖海戦、英戦艦プリンス・オヴ・ウエールズ及びレパルス其他を撃沈す。
十二月十一日　獨伊對米宣戦を布告す、日泰攻守同盟成立す、對米英戦爭を大東亞戦爭と呼稱する旨發表さる。
十二月十二日　聯合艦隊航空部隊に對して勅語を賜ひ、英國東洋艦隊主力を殲滅せる偉功を嘉せらる。
十二月二十五日　香港英軍降伏す、
十二月二十六日　香港全島完全占領す。
十二月二十八日　香港入城式、支那派遣軍及び支那方面艦隊に勅語を賜ふ。

昭和十七年（五九歳）

二月　四　日　ジャバ沖海戦、敵艦四隻を撃沈、一隻を大破せしむ。

二月　五　日　シンガポール陥落す。

二月十六日　陸海軍最高指揮官に勅語を賜ひ、海軍が馬來方面の陸軍部隊に協力して、神速シンガポールを攻略せるを嘉せらる。

二月二十日　バリ島沖及びニューギニヤ北東方沖方面海戰、大戰果を擧ぐ。

自二月二十七日　至三月　五　日　スラバヤ沖及バタビヤ沖海戰大戰果を擧ぐ。

三月　六　日　ハワイ特別攻擊隊九勇士二階級特別進級の旨發表さる。

三月　九　日　蘭印軍無條件降伏。

三月　十　日　陸海軍最高指揮官に勅語を賜ひ、海軍は陸軍部隊と協力して東印度諸島方面の敵航空兵力を壊滅せる偉功を嘉せらる。

自四月　五　日　至四月十三日　印度洋作戰、大戰果を擧ぐ。

四月十一日　バタアン半島完全占領す。

四月十八日　米機我本土を空襲す、損害輕微の旨發表さる。

五月　七　日　陸海軍最高指揮官に勅語を賜ひ、マニラ、バタアン、コレヒドールの頑敵を掃蕩せるを嘉せらる。

自五月　七　日　至五月　八　日　珊瑚海々戰、米空母サラトガ型三隻撃沈、其他を大破せしめ、飛行機九十八機を撃墜す。

五月十一日　南方方面陸軍最高指揮官及び聯合艦隊司令長官に勅語を賜ひ、ビルマ、印度方面の戰功を嘉せらる。

五月十二日　聯合艦隊司令長官に勅語を賜ひ、珊瑚海に米英聯合艦隊を撃破せる聯合艦隊航空部隊の偉功を嘉せらる。

六月　五　日　ミッドウエーを强襲して大戰果を擧ぐ、特殊潛航艇シドニー、マダガスカル島を襲撃す。

自八月　七　日　至八月十四日　第一次ソロモン海戰、米甲巡ウイチタ型外三十四隻を撃沈、五隻を大破、飛行機五十八機を撃墜す。

八月二十四日　第二次ソロモン海戰、大戰果を擧ぐ。

自八月二十五日　至十月二十五日　第二次ソロモン海戰以後米空母ワスプ型外二十一隻を撃沈、八隻を撃破、飛行機五百を撃墜、十九機に大損害を與ふ。

十月二十六日　南太平洋海戰、米空母四隻外二隻を撃沈、戰艦外四隻を中破、飛行機二百を撃墜す。

自十一月十二日　至十一月十四日　第三次ソロモン海戰、大戰果を擧ぐ、ルンガ沖夜戰、大戰果を擧ぐ。

十二月　八　日　山口、加來兩提督戰死を悼み、元帥挽歌を詠ず。

十二月十二日　天皇陛下皇大神宮に御親拜あらせらる。

昭和十八年（六〇歳）

一月二十九日　レンネル沖海戰、戰艦二隻、巡洋艦三隻を撃沈外二隻を中破せしむ。

自二月　一　日　至二月　七　日　イサベル沖海戰、大戰果を擧ぐ。

山本元帥年譜

三月二十七日　濠洲の敵地に潜入した海軍第二次特別攻撃隊十勇士二階級特別進級の旨發表さる。

四月　七　日　フロリダ島沖海戰、巡洋艦驅逐艦輸送船十二隻を撃沈、其他二隻を大破、飛行機三十七を撃墜す。

五月二十一日　元帥本年四月作戰指揮中飛行機上にて戰死せる旨發表せられ、即日大勳位功一級に叙せられ、元帥の稱號を授け、且つ正三位に叙せらる。畏くも大元帥陛下には元帥薨去の旨を聞召され特に國葬の禮を賜ふ旨御沙汰あらせらる、享年六十歳なり。

五月二十二日　英靈帝都に凱旋し、芝水交社に安置せらる。

六月　四　日　誄辭を賜ふ。

六月　五　日　日比谷齋場に於て國葬執行せられ、多摩名譽墓地に神鎮まる。

六月　七　日　英靈故山に歸る、山本家累代の菩提寺曹洞宗長興寺へ分骨を埋葬す。

法名　大義院殿誠忠長陵大居士

史傳 山本元帥（畢）

昭和十九年八月十五日　初版印刷
昭和十九年八月十九日　初版發行

史傳 山本元帥

(帝)定價 五圓八十錢
特別行爲稅相當額 二十錢
實價合計 六圓

(出版會承認 う 30063)

千倉書房

(初版五〇〇部)

著者　東京都牛込區矢來町五九番地　渡邊幾治郎

發行者　東京都京橋區京橋三ノ一　千倉豐

印刷者　東京都神田區三崎町二丁目二二　堀内文治郎

發行所　東京都京橋區京橋三丁目一番地第一相互館　千倉書房　振替東京九七八　電話京橋(56)一六・九九二七　會員番號一一七五一一

配給元　東京都神田區淡路町二丁目九番地　日本出版配給株式會社

堀内印刷・印刷所

(京 382)

永く帝室編修官たりし著者が、敬虔なる歴史家的良心をもつて明治天皇の聖德を各部面より詳述し、明治時代の歴史を具體的に講述せる不朽の名著である。

渡邊幾治郎著

明治天皇の聖德總論　A5判　定價三圓八十錢　四三八頁
明治天皇の聖德軍事　A5判　定價三圓五十錢　三八八頁
明治天皇の聖德政治　（品切）
明治天皇の聖德教育　（品切）
明治天皇の聖德重臣　（品切）

史傳山本元帥　A5判　定價六圓　三四〇頁

日本憲法制定史講　A5判　定價三圓五十錢　四〇六頁
日本近世外交史　（品切）
外交と外交家　（品切）
日本戰時外交史話　（品切）
日清・日露戰爭史話　（品切）
人物近代日本軍事史　（品切）

千倉書房版

289
Y313
2

終